

もう一度輝くために

粗茶3頭身

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

その少年は、一般人が羨む全てを掴み取り、そしてその全てを失った。

その少年の側にずっといた少女たちがいた。突然の出来事に一人は泣き、一人は激怒した。

もう二度と会うことが無いはずなのに、また少年は戻ってきてー。

※「陽だまりをくれる人」のifストーリーです。人間関係とオリキャラたちの設定を変更しただけで、登場するオリキャラは一緒です。(モブ達は登場しないかも)

※→を知らない方も困らないような内容になります。ご安心ください。(世界線が違う、みたいな)

目次

プロローグ

1

1話

3

2話

10

3話

18

4話

26

5話

35

6話

43

7話

50

8話

60

9話

71

10話

80

11話

90

12話

98

13話

106

14話

114

15話

122

16話

131

17話

141

18話

150

19話

161

20話

170

21話

178

22話

189

23話

198

エピソード	27話	26話	25話	24話
	247	240	232	221
				211

## プロローグ

私には、私達にはとても大切な幼馴染がいた。彼はとても優れた人で、文武両道で誰にでも優しく、何だってできる人だった。もちろん努力しないわけじゃない。所謂『努力できる天才』という人だった。私はそんな彼が幼馴染で誇らしかったし、憧れていた。彼のようにになりたいと思っていた。中学生で芸能界デビューし、彼が所属するバンドは瞬く間に日本のトップクラスに仲間入りした。

だけど、その栄光も、名声も、才能も彼は失ってしまった。そのバンドは彼の復活を信じ活動を休止、彼は……何も言わずに私達の前から、いいえ、この街からすら出て行ってしまった。

私は……彼に言いたいことがあったのに……。

それは今から2年前、中学3年生の時の出来事だった。

その出来事も関係してしまい、……あたしは日菜を必要以上に拒むようになってしまった。

それでも、願わくば彼ともう一度だけ会いたい。あの日のことを全て話させてほしい。だって、あれは……、

~~~~~

あたしとお姉ちゃんには、大切な人がいた。一緒にいるだけですごくくるんっ♪てする人だったし、唯一のあたしの理解者だった。あたしも、そんな彼の理解者でありたいと思っていた。それしか返せるものがないって思ってたから。

あたし達はいつも一緒だった。小学校に通ってたときは、双子だとクラスが別れちゃうから彼の争奪戦みたいなことになってた。1年生の時はお姉ちゃんと彼が同じクラスになって、それであたしが大泣きしたっけな。それで先生たちを困らせちゃって、結局彼があたしの方のクラスに変更つてなりかけた。

なりかけただけで実際には違ったよ？そうなりかけたら、今度はお

姉ちゃんが大泣きしたから。「そんな変更はおかしい！」って正論を言って大泣きしてた。最初からあたしと彼が同じクラスだったら拗ねるだけで終わってたんだろうね。最終的に1年生の時だけ3人同じクラスにしてもらっちゃった♪

：そう、いつも一緒だったんだ。一緒に登校して、一緒に下校した。数え切れないぐらいお互いの家に泊まりに行ったりして、どこに何かあるかも把握してた。

だけど、彼は突然いなくなった。

何も特別な日だったわけじゃない。ただの平日での出来事だった。突然何も言わずに彼はあたし達の前から消えた。何が起きたのか理解できなかつた。だって、あたしはまだ<sup>彼を</sup>理解者になれてなかつたから。

ただ分かったのは、彼がお姉ちゃんを泣かせたということ。彼のせいでお姉ちゃんが傷ついたということだけは分かった。だからあたしは彼が許せない。2年経っても未だに許せない。

あたしがこの世で一番大好きだった人は、あたしがこの世で一番大嫌いな人になった。

だから、

「みんな席に着いてるなー？転校生を紹介するぞ！喜べ女子！イケメンだー！」

『きゃあああー!!♡』

(どうせまた下心丸出しな人でしょ。：どうでもいいや)

「初めまして。今日からこのクラスでお世話になります。藤森雄弥です。よろしくお願いします」

(：へー？よくもまあノコノコと帰ってこれたね？ユウくん♡?)

その張本人が目の前に現れた時は、いい度胸してるなーって思った。

## 1話

「藤森の席はあそこな、一番後ろのやつ」

「わかりました」

「毛利の後ろになるんだが…、たしか毛利とは知り合いだったか？」

「はい。クラスで唯一の知り合いですわね」

「なら丁度よかったな」

…へへ、そんなこと言うんだ。たしかにあたしはユウくんのこと嫌いになったし、ユウくんは人の悪感情には凄く敏感だから、それを感じ取って関わらないようにしたのかな。

ユウくんが軽く教室内を見回してみんなの顔をザツと見る。あたしと目が合うと一瞬固まって、アイコンタクトで「ごめんね」って言うてきた。

(気づいてなかったただけなんだね…)

あたしはそのことにガクツてなったし、同時に今でも言葉無しでユウくんと思疎通できちゃうことに腹が立った。嫌いな人と簡単に意思疎通できちゃうのって嫌だよな。

ユウくんは毛利くんと軽く言葉を交わしながら席に着いた。どうやら教科書類は間に合ってるみたいで、漫画とかでよくある”隣のひと”なんてことにはなってるなかった。…なんでこんなところまで目で追ってるんだろ。イライラするよ。

「1限目は…あー、現代文だったな。お前ら眠くなっても意地で起きとけよ！」

「先生、みんなが寝る前提で話を進めないでくださいよ」

「…だつてなー、1学期の時に最大で20人寝ただろ？あれ、先生がこつぴどく怒られたんだぞ？あの人話長いから怒られたくないんだよなー」

「…あの時は、ねー?」

「体育の後だったし、授業の内容も眠くなるやつだったし」

「不可抗力的な?」

「いいからもうあの惨状はやめめくれよ…。それじゃあ日直、号令…」

そんなこともあったな。あの時はあたしも寝ちやつてた気がする。リサちーですら起きとくのがやつとだったっけな。薫くんは起きてたらしくて、みんなが寝て授業崩壊みたいになったら先生との朗読劇が始まったらしいよ。起きとけばよかった。

HRが終わったらすぐに1限目が始まるんだけど、転校生なんて珍しいからみんなすぐにユウくん質問攻めを始める。…まあ、イケメンだしね。他の男子みたいに下心がある人でもないし。あたしがそれを横目に見てると後ろから背中をポンポンって叩かれて呼ばれた。

「ヒーナっ!あの転校生が気になるの?」

「リサちー…、別にそんなんでもないよ」

「ありや?珍しくドライだね。またヒナの”ダメ男センサー”に引つかかる人なの?」

「それは全然だよ。…そういう人じゃないからね」

「…もしかして、知り合い?」

「昔に…ちよつとね」

「…喧嘩別れでもしたの?」

リサちーは人間関係には鋭いよね。人のことをよく見てるからなのかな。察しのいい人で、気さくで誰とでも仲良くなれる。ギャルっぽい見た目なのに、実際には超家庭的な女の子で心は純粹な乙女。それが男子には魅力らしくて結構告白されてる。全員断ってたけど。…というかそうさせた。だって全員下心が丸見えだったから。リサちーは気づいてなかったみたいだけどね。

「そうでもないよ。…そんな生易しいもんじゃない」



「えっ？」

「ううん。なんでもなーい。…リサちーこそ、気になるなら話しかけてみたら？別に下品な人じゃないよ。たぶんリサちーからしても、初めて見るビビビツてくる人だから」

「へっ!?うーん、たしかに良い人そうだけど…、話しかけるのは今日じゃなくてもいいや。…というか今日は無理そう」

「…たしかに無理だろうね。初日から人気者だなく」

さつきから黄色い声がよく上がってる。ユウくんがいたあのバンドは、一瞬でその業界を登りつめて、すぐにいなくなっただから話題性はあつただけど、案外みんな知らないみたいだね。…毛利くんもそのバンドの一員だったわけだけど。毛利愁くん、キーボード担当だったかな。

リサちーと「漫画みたいだね〜」なんて言いながらその光景を先生が来るまで眺めてた。クラスの男子（毛利くん以外）はそれを面白くなさそうに見てたね。人の妬みほど醜いものつてないよね。それを分かりやすく晒すからみんな彼女できないんだよ。どうでもいい人たちだからそのことは教えてあげないけど！

~~~~~

昨日うちのクラスに来た転校生の人気は凄かった。普通、自分の席を囲うように人に集まられて質問攻めにあつたら辟易するだろうに、みんなの話を聞いて一人一人に答えてた。ヒナが言うには人付き合いが好きな人らしい。授業でも難しい問題をスラスラ答えてたし、体育でも運動神経抜群なのを発揮してた。…あれってヒナと同じ天才側の人間だよな。

（うーん、ヒナとどういう関係なんだろう…）

ヒナに彼のことを聞いてもヒナはつまらなさそうに、いや…それよ

りも酷い感情で、答えてくるだけだった。ヒナは彼のことをよく知ってる。それはつまり彼とそれだけ仲がよかったということだ。

しかも、ヒナは基本的に周りを、人間関係を気にしない人間だ。仲がいい人やヒナにとって興味深い人とは接するが、そうじゃない人にはなんの感情も抱かない。つまり、人を嫌わないのがヒナの特徴なんだ。

(だけどヒナは藤森くんのことを嫌ってる。しかも相当…、いや何よりも嫌ってる)

ヒナは彼のことを「いい人」だとあたしに教えてくれた。それは客観的な評価だけど、ヒナの主観的な評価で言うところ「最低な人間」らしい。あたしはなんでヒナがそんなことを言うのかわからなかった。

「リサ、思い詰めた顔をしてどうしたんだい？」

「薫…。藤森くんのことでき、なんであのヒナがあれだけ嫌ってるのかなーって。ほら、ヒナって興味あるかなかなかで、人を嫌うことってなかったじゃん？」

「言われてみればたしかに…。ふむ、興味深いね。…ただ」

「ただ？」

「私の目からすれば彼は仮面を付けている」

「仮面？映画でよく見るスパイのマスクみたいなの？」

「ふふつ、それはそれで儂いが…、そうじゃない。昨日彼は席につく前に一度だけ全員の顔を見回していたのを覚えているかい？」

「え？…ああ、うん」

たしかに見回してた。でもあれってすぐにクラスに馴染むためのことじゃないの？クラスの人の顔を少しでも早く覚えるためー、みたいな。

「その時に一瞬彼の表情が強張ったのを気づいたかい？」

「……へ？」

「気づかないのは無理もない。本当に一瞬だったからね。気づいたのはおそらく、私とムツシユ毛利と、…日菜だけだろう」

「あの2人も…」

「ああ。そしてそのタイミングは、ヒナと目を合わせた時だ」

「…どうということ？…なんで薫はそこまで分かるの？」

「全てを分かっているわけじゃない。…今もほぼ全てを話している。

…私は役者だからね。人の表情の変化にはよく気づくんだ。彼は日菜と目を合わせた時に表情を強張らせた」

「つまり藤森くんもヒナもお互いに距離を取りたがってる？…でも、なんで…」

「それは本人達に聞くしかないね。少しはお役に立てたかい？子猫ちゃん」

「うん！ありがとう薫♪」

「礼には及ばないさ」

薫って真面目な時はとことん真面目だよ。普段からもっとそういうのを見せたらいいのに。…あー、でも薫のファンが多すぎるからそれも無理な話かー。

教室のドアが開いて、ヒナが戻ってきた。それも藤森くんと一緒に。2人で戻ってきたから教室がざわめいたけど、ヒナの機嫌の悪さが滲み出でて、みんなそれじゃないと理解してすぐに黙った。

「…リサ、分からないかもしれないが、彼は今も仮面をつけているよ。

…他の子猫ちゃんたちと話している時は素のようだがね」

「ヒナと話すときだけ仮面をつけてるってこと？」

「正確にはヒナと接触した後に、だね。…こういう理由かは推測の域を出ないね」

「ふーん。…ヒナ、2人で話してたの？」

「…まあ、言いたいことがあったからねー」

「そ、そっか。…あたしも2人で話してきていいかな？」

「へ?…別にいいんじゃない?というかあたしの許可なんていらなくない?あたし、あんなのと付き合ってるわけじゃないしさ」

「そ、そうだよね。あはは…」

(あんなのつて、ええ…)

「?…変なりサチー」

もうお昼休みは終わっちゃうし、放課後に時間作ってもらうしかないかな。今日はバイトもRoseliaの練習もないしね!部活はあるけど、そこまで時間かからないだろうから十分間に合うね!

たしか次は英語の授業で、あの先生はよくコミュニケーションの練習って言って席を立ってクラス中で思い思いに英語を話させるから、その時に伝えればいいかな。

~~~~~

転校して初日は、担任の先生が言っていたとおり質問攻めにあつた。結構大変ではあったが、おかげで早くクラスの人たちの顔と名前を一致させれそう。日菜と同じ学校で、同じクラスになるとは思ってたなかったけどな。

(日菜には相当嫌われてるし、…それだけのことを俺はしたわけだからな)

2日目にもなれば質問攻めをされることもなかった。話しかけてくれる人達がいなくなつたわけでもなく、わりと過ごしやすい状態だった。だが、昼休みに日菜に呼ばれて屋上で少し話をした。

『あたしはもう君のこと大っ嫌いだから、名前呼びも辞めよう。  
藤森くん』

『っ!…日菜が…いや、…氷川がそう言うならそうするよ』

(覚悟してなかったわけじゃないが…だいぶくるな、これ)

初対面のフリをしよう。今までのことを全てなかったことにしよう。築き上げてきた友好関係も何もかもゼロにしよう。…そういうことなんだ。日菜は言葉が足りないことが多いが、俺はそれを汲み取れる、汲み取れてしまう。だから日菜がどれだけ俺のことを嫌っているのか、それを正しく理解できてしまった。

その後にあつた英語の授業で、まだ話したことがなかったクラスの子の一人である今井に声をかけられた。話がしたいから放課後に時間を作れないかと、そう聞かれた。部活に入ってなくて、バイトもまだ探してない俺はもちろん時間を作ることにした。

「お待たせ〜。掃除が思ったより長びいちゃったよ〜」

「気にするな。大して待ってない。俺も少し職員室に用事があつたからな」

「そう?それならよかつた☆…つて職員室?」

「ああ。なんか書類がどうかでな。後日提出すればいいらしい」

「へ〜。転校してきてからもやることあるんだね」

「いや、本来は何もないぞ。なんか学校側で不備があつたらしい」

「なるほどね〜」

「それで話ってなんだ?たしか部活があるんだろ?」

「そうだった。部活があるから手短にするけど…藤森さんとヒナとこのことを聞きたいんだ」

(おい日菜!初対面のフリをするんじゃないのか!?!早速俺達のこと知ってるやつがいるんだが!?)

## 2話

『藤森くんとヒナとのことを聞きたいんだ』

(…何をどこまで話すべきか、…いや最低限のことだけでいいか)

目の前にいるこの子、今井リサが日菜と仲良くしてるのは知ってる。普通に友達なんだろうな。わざわざ聞いてきたってことは、相当お節介な性格をしているんだろう。真剣な顔で聞いているから興味本位ではないということとはわかる。

「…俺と氷川のごとはどこまで知ってる？」

『昔にちよつとね…』とだけヒナから聞いてるよ。ヒナって基本的に周りを気にしないじゃん？だから好きになる人がいても嫌いになる人なんていないと思ってたんだけど、どうやら藤森くんのごとは…、その…』

「嫌ってるからその理由を知りたい、か？」

「あ、あははく…。うん、そうなんだ。あんまり友達がギクシヤクしてるのなんて見たくないしさ」

「お節介なんだな」

「自分でも思うよ…。でも、生半可な気持ちで聞きに来たわけじゃないよっ…」

「それは分かってるさ。…悪いが全部は言えない。氷川がそれしか言っていないなら俺がベラベラ喋るわけにはいかないからな」

「…律儀だね。それに優しい」

…そうか？あー、表面上だけで言えばそうなるんだろうな。本当に律儀で優しいならあんなことはしないっていうのに。…まあ今井は何も知らないから仕方ないか。

「そんなことないさ。本当にそうなら氷川に嫌われてないだろ」

「あ、あはは…、たしかに。…でも、ヒナは良い人だって言ってたよ？」

少なくとも他の男子達よりも。あたしも話してみた感じそう思うし」  
「…そうか。…：さてと、一個だけ教えてやるよ。俺と氷川の間係を」  
「へ?…あ、うん」  
「俺と氷川は、幼馴染だった。…家族ぐるみの付き合いをするぐらいには仲良かったよ」  
「え!?!それならなんで!」  
「これ以上は教えれないな。…俺にはこれ以上話す権利がないから。あとは氷川から聞き出せ」

足元に置いといたカバンを担いで帰ろうとしたら今井に呼び止められた。…部活あるんじゃないか?聞いたら合わなくなるぞ?

「まだ何かあるのか?遅刻するぞ」

「聞きたいことはもういいの。…知ってると思うけど、あたしは今井リサ。リサって呼んで☆」

「いきなり名前呼びって…誰にでもそうなのか?」

「女子にはそうだね。男子相手だと藤森くんが初めてだよ?というか名前呼びをお願いした男子も藤森くんが初めて」

「はあ。単純なやつならそれで勘違いするぞ」

「ほえ?」

「…：分からないならいい。藤森雄弥だ。俺も名前呼びでいいぞ、リサ」

「…：!」

「…：なんで照れてんだよ」

「い、いやー、思ってたよりこそばゆいと言うか…」

「ならやめとくか?」

「それこそナシだよ!」

「…えー」

「あたしはゆ、ゆうやと友達になりたいの!友達なら名前呼びでしよ?」

「全員がそうってわけでもないが…：まあいいや。…慣れるまでは呼び

捨てにしなかったらいいんじゃないか？」

「…そうします」

「それじゃ帰らせてもらおうぞ。部活に遅れるなよりサ」

「う、うん！雄弥くん、また明日ね！」

「…：…ああ、また明日」

…また明日、ね。こんな言うなんて久しぶりだな。それこそ2年ぶりだろうか。

『雄弥くん、また明日』

…っ、…：…あー、そうだった。名前にくん付けは、紗夜だけだったな。俺が傷つけたあの子だけだった。会うべきなのか、会わないようにするべきなのか…、難しいところだな。

くくくく

雄弥くんと別れて急いで部室に向かう。今日はダンス部の練習があるから、ダンス部の部室に行ったんだけど、その前に立ってる人がいた。…遠目からでもわかる。あたしの大切な友達の一人のヒナだから。

ヒナは部室のドアに背を預けながら鼻歌を歌ってたけど、あたしが近づいたら鼻歌もやめてドアから離れてあたしと向き合った。

「ヒナ？パスパレの練習は？」

「言わなかったっけ？今日はいいよ。天文部の活動をしてもいいんだけど、まだ明るいから特にやることなくてさ」

「そうなんだ。…あ、それならダンス部の練習見にくる？実際に踊ったりしてるヒナの目から見てもらうのも良い経験になりそうだし、ヒナも退屈しないと思うよ？」

「るんっ♪てする話だけど、また今度でいいかな。今日はちゃんと指摘できそうにないしね」

「そっか…。ならまたの機会にお願いしよっかな☆」



「予定が合えばね。…それでさ、リサチーは藤森くんと何話してたの？」

「っ!!…大した話じゃないよ?」

「本当にそうかな。リサチー、あたし達のこと探ろうとしてるでしょ?」

「なっ!?まさかそこまで見通されてるなんて…、いや、隠すようなことでもないか。ここは正直に話した方がいいよね。ヒナは興味を示したことに對しては驚異的な能力を発揮するから。」

「探ろうとしてるってのは言い方に語弊があるかな。あたしは単純に気になったから話をしてみただけだよ?」

「気になる?」

「うん。ヒナってさ、興味ないことには無関心になるし、周りを気にしないじゃん?だから日菜が嫌いになる人なんていないって思ってたんだけど…」

「あー!そういうことか!良かったよかった!リサチーが変に首を突っ込んできたのかと思っちゃってたよ。安心した」

「…っ!…なに…今のヒナの表情…。今まで機嫌が悪くなってもあんなの見たことない。踏み込み過ぎてたら…あたしでも…?」

「け、結局全然雄弥くんのことわかんなかったよ。ヒナの言うとおり”良い人”って感じが強かったし」

「…へー?リサチー、もう名前呼びなんだね?この短時間で随分と仲良くなったみたいじゃん?」

「へ、変な意味はないよ?友達になれそうだなって思って名前呼びになっただけ」

「ふーん?…ま、たしかにリサチーは友達のこと絶対に名前呼びだしね」

「うん…あ、」

「あちやー、チャイム鳴っちゃったか」

あーあー、部活に遅刻だよ。そこまで厳しくないから急いで行けば特に言われることもないけど、後輩達に示しがつかないな。それに、あこがこのことを紗夜に言ったら説教されそう。

「ごめんねリサちー。あたしも謝りに行くから」

「へ？いいいいいよー！」

「ダメダメ！あたしがリサちーを引き止めたから遅刻になっちゃったわけだし。…藤森くんとも結構話してたみたいだけど」

「うっ…」

た、たしかに雄弥くんともいっぱい話し込んだけど、結局あたしが悪いわけだし。…とりあえず服を着替えないとね。

「あ、そうそう。絶対にお姉ちゃんから話を聞き出そうとしないでね？」

「へ？」

「それしたら、…リサちーでも許さないから」

「わ、わかった」

「うん♪」

あたしは部室に入って急いで服を着替えた。あたしが脱いだ制服をヒナが畳んでくれたおかげで時間を短縮できて、結局ヒナもついてきて一緒に謝ってくれた。みんな『氷川さんなら仕方ないね』って納得してくれたけど…。

(なんで紗夜から聞いちや駄目なんだろ…。…というかこれで聞き出せる相手がヒナだけになったんだけど。ヒナは教えてくれないだろうし…あれ？あたしこれもう手詰まりなんじゃ?)

~~~~~

リサちーをダンス部に送り届けて、一緒に謝ってからあたしは天文部の部室に移動した。別に活動するためじゃない。元々は天文部の活動をしようと思っただけで、なんかそんな気分にもなれなくなっちゃった。

麻耶ちゃんは演劇部に行ってるし、他のメンバーは学校も違うしな。……あ！そういえば彩ちゃん今日はバイトって言ってたっけ！よーし！彩ちゃんのとこに遊びに行こーっと！

(それにしても、リサちーがね？……まあこれ以上は踏み込んで来ないだろうし、あたしがその辺はコントロールしたらいいや。：お姉ちゃんが話したらそれはもう仕方ないし、その時はその時だよ！)

お姉ちゃんをあれだけ傷つけた人なのに、あれだけ泣かせた人だというのに、お姉ちゃんは未だに「彼ともう一度だけでも会いたい」なんて思ってる。そんなことしてもまた傷つくだけじゃん。裏切り者に会ってどうするのって話だよ。

あたしがそんなことさせないようにしなきゃ！あたしがお姉ちゃんを守るんだ。勘違いしてるお姉ちゃんを守ってみせる。もう二度とお姉ちゃんのおんな姿見たくないし、傷つけさせたくないから。

「いらっしやいませー！って、あれ？日菜ちゃん？天文部の活動するって言っただけじゃなかったっけ？」

「やつほー彩ちゃん！気が変わったから彩ちゃんに会いに来たよー！」

「あ、会いに来たって…。嬉しいけど恥ずかしいよおー。えっと、お客さんとして来てくれたわけじゃないの？」

「これで晩御飯食べれなくなったらお姉ちゃんに怒られちゃうからさ」

「あ、それは嫌だね」

「でしよ？」

「なら飲み物とポテトだけにしたら？サイズを小さくして、喉も渴くだろうから飲み物買おう！どうかな？」

「彩ちゃん商売上手く、でもないね！」

「あうっ！…わりと自然に勧めれたと思うんだけどな」

「たしかにMCよりはできてたね！あっちもできるよにな…らなくていいや。トチってる時の彩ちゃん面白いし」

「ひどいよ！…もー、MCもこなせるようになるもん！」

「そうなたらるんっ♪てしないな」

「応援してよ!？」

「あはは！じょーだんだよじょーだん！半分はね」

頑張って練習してるのにトチって慌てるときの彩ちゃんって見てるんっ♪てするんだよね〜！練習して練習して、できるようになったと思っても本番でトチるんだ〜。それでもめげないで努力してる彩ちゃんが好き！あたしとは一番違うからね！

「今最後に何か呟いてたような…」

「気にしない、気にしない！」

「それで、結局どうするの？」

「そうだな〜。彩ちゃんに免じて、彩ちゃんがさっき言ったやつにするよー」

「ご注文ありがとうございます！飲み物はコーラでいいの？」

「いいよ〜」

「了解！ポテトとコーラ入りまーす！」

「ありゃ？今日は花音ちゃんいないんだね」

「うん。ハロハピの練習だったかな」

「へー」

お客さんも全然いないから、あたしは注文が出てくるまで彩ちゃんと話すことにした。彩ちゃんといると全然退屈しないんだ〜♪

気分を切り替えれたし、ポテトも美味しいし、あとは帰るだけだね

！彩ちゃんに一声かけてから店を出て帰路につく。ユウくんが戻ってきた時はどうしようかと思っただけど、ま、なんとかなるでしょ！

(問題はリサちゃんの行動がなく。…仲良くなりすぎないようにしてほしいね)

あたしは失念してることがあった。ユウくんが帰ってきてるってことは、もう一人帰ってきてる人がいるということに。

### 3話

「〜♪〜」

私こと藤森結花<sup>ゆか</sup>は、藤森雄弥の姉で、学年は同じ高校2年生。学校は違って、私は花咲川女子高校に転校してきた。なんで違うかと言うと、”女子校に通いたかったから”!ほら、なんかお嬢様感あるじゃない?女子校ってだけで謎の特別感、みたいなの。

まあ、別にお嬢様になりたいわけじゃないんだけどね。私はA組に入ったわけなんだけど、居心地がいいのなんの!だって窓際の席で一番後ろだよ!プリント回収は絶対にやらされるポジションだけど、おかげで同じ列の子の名前はすぐに覚えれたし仲良くなれてる。

それに一番後ろってことは、後ろに誰もいないわけで、広々とできるじゃん?開放感があつて気楽なんだよね。

窓の外を眺めながら鼻歌を歌つてると、隣の席の子が登校してきたようで、声をかけてくれた。

「おはよう、今日もご機嫌だね」

「あ、花音!おはよ〜!今日もよろしくね!」

「あはは…いいけど、早く荷解き済ましたほうがいいよ?」

「積んでるダンボールの一番下のところに教科書類があるみたいでさ〜。中々たどり着かないんだよね〜」

「弟君は1日で片付けたんじゃないかな?」

「男子と女子じゃ荷物の量が違うじゃん?」

「そういうものなの?」

「そういうものなの!」

「そっか。それなら仕方ないね」

(純粹過ぎるよ!?!言い訳に等しいこと言ってるのに受け止めちゃうの!?)

この子大丈夫?悪い男に引つ掛けられたりしない?そんな心配に

なつちやう、保護欲をそそられるような小動物系女子である松原花音ちゃん。雰囲気からして可愛さが出てて、どこか放っておけないような、そんな気にさせる女の子。

もちろんそれは狙ってるわけでもなく、そういう性格というか人間性なんだよね。共学だったら男子が言い寄ってきそうな子。……あー、だから女子校にいるのか。

「?どうかしたの?」

「あ、ううん。…花音って共学だったらモテそうだなーって」

「ふええ!?!:そ、…そんなことないよ:わたし、こんなだし」

「いやいや、花音は十分可愛いよ。ね?千聖」

「そうね。花音、あなたはもつと自信を持っていいのよ」

「へっ?ち、千聖ちゃん!?!いつ来たの!?!」

「おはよう花音、結花。今来たところよ」

「おはよう千聖。私は向いてる方向がドアの方だから気づけたってわけだよ☆」

「そ、そうなんだ…。おはよう千聖ちゃん」

「それで、なんの話してたのかしら?」

「え?千聖ちゃんは聞いてたんじゃなかったの?」

「最後のとこだけよ。話を振られたから肯定したのだけど」

千聖ってアドリブに強いよね。花音なら絶対に無理だよ。…そんなムツて顔されてもなく、実際問題アドリブには弱いじゃん?というか心を読まないでほしい。

「なんとなく花音って共学ならモテそうだなって話をしてたんだよ。さつき思いついたことだけどね」

「そうなのね。…たしかに、花音なら男子に狙われてもおかしくないわね」

「そ、そんなことないってば!…わたし、こんなだし…その、男の人…苦手だし」

「たしかに」

「…うー」

「いやいや、花音が自分で言ったことじゃん」

「そうよ。それに、否定する材料が見つからないわ」

「…そうだね」

「んー?…:くんくん」

「…結花ちゃん?何してるの?」

「花音の匂いを嗅いでる」

「だからなんで!」

「またおかしなことを…」

千聖は失礼なこと言うなく。まあたしかに、昔からの付き合いだし、お互いそれぐらいの軽口を言い合える仲なわけなんだけどさ。

私は花音にハグして匂いを嗅いでる。あ、別にレズじゃないからね?男の人を好きになるからね。それにこんなのってスキンシップの内に入るじゃん?同性だったら。異性はだめ。私でも速攻で通報する。あ、雄弥ならいいよ?

「あ、あの結花ちゃん。みんなの視線が恥ずかしいからそろそろ離れてほしいんだけど…」

「……」

「結花ちゃん?」

「…すやすや」

「寝ちやったの!」

「落ち着きなさい花音。寝言でも『すやすや』なんて言う人いないわよ」

「そ、そうだよね。…結花ちゃん!」

「あはは、ごめんごめん!花音の反応がいいからつい」

「ついて…」

「よつと…:。花音さ」

「うん?」



「男いるでしょ」

「は？」

「ふええ!!？」

「えええー!!!」

「松原さんに!？」

「彼氏がいたの!？」

「どんな人!？」

「紹介して！」

「結婚して！」

「合コンに呼んで！」

あちやー、まさかクラスの人達みんなが聞き耳立ててるとは思ってたよ。というか、食いつきがすごいね。その中でも一番食いついたのが親友である千聖なわけなんだけど…。それと、なんか途中からおかしな発言飛んでなかった？

「いや…あの…彼氏じゃなくて…ふえええ…うつ」

「花音?!すっかりしなさい！」

「あ、花音のキヤパ超えた」

「元はと言えば結花の発言のせいでしょ！」

「あはは！ここまでするとはね。花音は私が保健室に運ぶから、千聖は先生に言っというて」

「花音なら私が…」

「芸能界入ってるから学校への出席自体限られてるでしょ？来てる時ぐらい最初からいないと。別に千聖が問題児扱いされてるとは思わないし、成績が悪いとも思っていないけどさ」

「…印象づくりのためにいろってことね」

「ぶっちゃけたらそうだね。現実主義の千聖なら、そうするよね？」

「…わかったわ」

「よろしくね」

私は花音を背負って教室を出ていった。保健室の場所はちゃんと把握してあるから、迷うことなく足は真つ直ぐにそこに向かう。階段を降りようとしたら反対に登ってくる生徒がいた。…いや、まあそりゃあ学校だから生徒が多いんだけど。その子は知り合いだった。

「紗夜じゃん久しぶり〜」

「結花?…やはり隣のクラスの転校生はあなただったのね」

「名前からして私だけでしょ〜」

「名字しか聞いてなかったから、もしかしたら別人かもって思ってたのよ」

「紗夜らしいね。それで、真面目な紗夜は何してるの?もうすぐHRが始まるはずだけど」

「私は生徒会に入っていて風紀委員をしているの。その見回りが終わったところよ」

「なるほどね〜。堅物風紀委員ちゃんだね☆」

「…そうね。みんなにそう思われてるわね」

「そんな紗夜が遅刻したら示しつかないね」

「あなたは何してるのかしら?」

「友達が気絶しちゃってさ〜。保健室に連れてく〜」

「…本当に何したのよ」

「あっはっは〜!」

私は止めていた足を動かして階段をおりていく。紗夜も階段を登ることを再開して、すれ違いざまに昼休みに会おうと誘っておいた。私はあのことを特に気にしてるわけでもないんだけど、紗夜は気にしてるみたいだからね。落ち着いて話をした方がよさそうだ。

「それじゃあまたね〜」

「…ええ。またあとで」

花音を保健室に連れて行って、ベッドに寝かせてから先生に事の経

緯を話した。先生はすつごい呆れてたけど、人それぞれ限界は違うからねー。まあ先生も花音に呆れてたんじやなくて、私に呆れてたんだらうけどさ。このまま付き添いって言って保健室に滞在するのも面白そうだけど、千聖が怒るだろうし、戻ろっかな。

(教室に入る時になんかしよつかないかな?……あー、今大した小道具もないし普通に戻る。うん、普通が素敵っていうもんね)

~~~~~

昨日からそんな予感はしていた。隣のクラスに來た転校生の名前が”藤森”だったから、もしかしたら彼女なんじやないかと。そして、彼女が帰ってきたということは、彼も：雄弥くんも帰ってきたということなんじやないかと。

結花の行動力の高さから、一人暮らしの可能性もあったのだけど、雄弥くんのことを何よりも大切にしている彼女ならそれはありえない。それに：、昨日、日菜の様子がおかしかったから。どこか警戒してるような、帰ってきた時だけだったけど、そんな雰囲気があった。だから、結花と雄弥くんの2人が戻ってきたんじやないかと思っただし、違ってほしいとも思った。

(雄弥くんとはもう一度会いたい。会ってちゃんと話をしたい。だけど……それが怖い。会いたくないという思いも同じぐらい強い。：私は、今になっても弱いままなんだわ)

だけど、今日結花に会った。会ってしまっただけなのに、現実から目を背けようとした私を、現実に向き合わせるには十分な出来事だ。

彼女は昔と同じ明るい笑顔を向けてくれて、何も変わらずに接してくれた。だから平常心を保つことができたけど、私の心は穏やかじゃなかった。

(本当は私のことが許せないんじゃないか?)

そんな思いが心の中で渦巻いていたから。そんなことまで見透かされたのか、すれ違いざまに昼休みに会う約束を取り付けられた。いや、こんな言い方をするべきじゃないわね。取り付けてもらえたと言うべきだわ。だって、結花は向き合っている、前を見て歩めているのに、私は停滞しているのだから。そんな私に手を差し伸べてくれたのだから。

「お邪魔しまーす!」

「ひやつ!?…あの…えと、…どうか…されました?」

「あ、ごめんごめん!驚かせちゃったね☆私は隣のクラスに転校してきた藤森結花っていうの。あなたは?」

「あ……あなたが。…わたしは…白金燐子…です。よろしく…お願いします…」

「燐子ね。私のことは結花でいいよ」

「え…でも…」

「結花でいいよ」

「あの…」

「結花でいいよ」

「結花…さん」

「うん!」

…何をしているのかしら。いえ、知らないふりをするわけにもいかないわね。結花は私と話をするためにこちらの教室に来たのだから。私はお弁当を持って白金さんと話<sup>に絡んでいる</sup>している結花の下へと向かった。

「来るのが早いわね。てつきりお弁当をいただいてからだと思ったわ」

「せっかくの再会なんだから一緒に食べようよ!屋上で」

「構わないわよ。…白金さん。結花が失礼しました」

「い、いえいえ…話せて…楽しかった…です。…氷川さん、お知り合い…なんですか?」

「ええ。…昔から」

「所謂幼馴染なんだ〜♪前にちよつと引つ越しちやっただけど、また戻ってこれてね。そしたらまさか同じ学校とはね〜」

「そうなん…ですね。…再会…できて、良かった…ですね」  
「うん!!」

「…行きましようか」

「はーい。てあれ?紗夜つてば照れてる?」

「照れてません」

「あはは!照れてんじやん!私に敬語になつてるし」  
「〜〜〜!知りません!」

「あ、待つてよー!それじゃあ隣子またねー!」

「は、はい」

(氷川さん…なんだかんだで…嬉しそう…だったな)

## 4話

私の周りを走りながらついてくる結花に、呆れながら足を進める。行き先は屋上。誰もいない…とまではいかないだろうけれど、そこまで人も多くないはずだから。

「屋上に行くのかな〜?」

「ええ。今日は天気もいいし、暑さもましになってきてるから」

「そうだね!屋上で食べるにはもってこいの日だね☆」

「そうね」

「……疲れた」

「ずっと私の周りをグルグル走るからよ」

「でもテンション上がるじゃん?親友と再会できて、同じ学校なんだからさ☆」

「っ!……あなたは今もそう思ってくれるのね」

私が目を伏せるとすぐに結花は走ることをやめた。代わりに横から私にハグをしてきた。驚いて結花を見ると、結花は何も言わずに優しい顔で微笑んでいるだけだった。……私には…それが逆に辛かった。自分の弱さを突きつけられてる気がしたから。

「結花…離れて」

「歩きにくいけど、もうすぐ着くんだしいいでしょ?」

「…仕方ないわね」

「あはは、紗夜は優しいね〜」

「そんなこと…ないわよ」

「じゃあ私が勝手にそう思ってるってことで!」

(結花の方が、優しいのよ。…私は…そんなこと言われる資格なんて…ないわ)

屋上に出るドアを開けるときには結花も私から離れてくれた。屋

上に出ると私たちの他に数人の生徒がいるぐらいで、予想通り人は少ない方だった。

「あー、紗夜。ハンカチは敷かなくていいよ」

「何を言っているの？」

「ジャジャーン！レジャーシート持ってきました〜！」

「…なんであるのよ」

「今日は外で食べたい気分だったからね♪さ、座ろ座ろ！」

「はあ。…お邪魔します」

「はーい♪」

「…なんでくつつくのかしら？」

「いいじゃんいいじゃん！」

「食ベにくいわ」

「なら仕方ないね」

結花は少しだけ私から離れてくれた。というのも、そもそもレジャーシートはそこまで大きくないものだった。2人なら十分使えるけど、3人となると窮屈になるような、そんなコンパクトなものだった。

「今日はどんなお弁当かな〜？…おー！美味しそ〜☆」

「お母様を作ってくれてるの？」

「え？お義母様？」

「結花！」

「あはは！冗談だって。お母さんじゃないよ。これ作ってくれたのは雄弥だよ」

「え？」

「当番制で家事をこなしてるからね〜。…あ、言ってなかったね。私と雄弥の2人で生活してるんだよ」

「…親御さんは？」

「どこに行ってるんだらうね〜。出張ばっかだからさ」

「そう…」

2人の親が、特にお父様の方が忙しい方だというのは知っている。私や日菜ですら顔を合わせた回数が片手で数えられるのだから。けれど、お母様の方も忙しくされてるのね。2人が自立できるようになったから、付きそうようになったのかしら。

「そんなに見つめちゃってどうしたの？」

「…へ？…あー、いえ、何でもないわ。少し考え事をしてただけよ」

「とか言ってる。私が見抜けないでも思ってるの？」

「……そうね。あなたには「このお弁当少し食べてみたいんでしょ？」

「……は？」

「雄弥の手作りだもんね。具材の交換ならお応えしましょう！」

「…あなたが食べたいものがこっちにあるだけでしょ」

「バレちゃった？紗夜とは以心伝心だね。嬉しい♪」

「なっ！」

顔が熱くなるのが分かる。私は、彼女のように真っ直ぐ好意を向けてこられるのが苦手なのよ。…その事自体は嫌じゃない。ただ、素直に受け取れないし、何よりも恥ずかしいのよ。彼女はそんなことも分かっていると言わんばかりに、屈託のない笑みを私に向けていた。

「照れちゃって。可愛いね」

「か、からかわないでちょうだい」

「からかってないよ。紗夜はかわいいよ？私が保証します！」

「そんな保証されても…」

「えー。じゃあ雄弥の保証ならいいの？」

「そ、そういうことじゃないのよ！」

「あはは、紗夜ってばまた顔が赤くなったよ？大丈夫？」

「誰のせいだと思ってるのよ…」



私はこの話を終わらせるためにお弁当を食べ始めることにした。結花もそれで察してくれたのだけど、チラチラとこちらの様子を伺ってくる。

(仕方ないわね)

「ハンバーグが欲しいのでしょ？そちらの玉子焼きと交換ならいいわよ」

「ほんと!?やったー!!紗夜ありがとう!大好き!!」

「これくらいでそこまで喜ばなくても…。って、そんなにがつついてたら喉に詰まらせるわよ」

(あ、この玉子焼き美味しい…。この味付け、私も好きだわ)

「んー!んー!!」

「だから言ったのに…。ほらお茶を飲みなさい」

「んっ、んくっ、…ぷはあー!死ぬかと思ったー!ありがとう紗夜♪」

「当然のことをしただけよ」

「もうー。素直じゃないんだからー」

「…あなたは素直すぎるのよ。…日菜と同じで」

「そうかもね。…日菜と私はよく喧嘩してたけどね」

「お互いに素直に言い過ぎてたからでしょ…。私からすれば仲が良いようにしか見えなかったけど」

喧嘩するほど仲がいい。結花と日菜はまさしくそれを体現しているような関係だった。私が覚えてる限りで言うと、喧嘩せずに1週間を過ごしたことがない。それぐらいに喧嘩の頻度は多かった。だけど、その2人が一緒にいない日がないんじゃないかというぐらい、2人は常に一緒にいた。

「ま、私も日菜もお互いを嫌ってたわけじゃないしね。というか普通に好きだったし、今でも日菜のことは好きだよ」

「……そう。日菜は…今はどうなんでしょうね」

「少なくとも私とは昔と同じ関係でいられるだろうね。紗夜とも変わらぬようにやっぺ一緒にいれるわけだし」

「…そうね」

「…雄弥とは無理だろうね。すぐに引越しちゃったからよくわかんないけど、日菜は雄弥のことすっごい怒ってたんじゃない？それこそ嫌になるレベルで」

「……あのこは……」

「…それだけでもわかるよ。…そっかあ、まあそうだろうね。そういえば日菜ってどこの学校？昨日は雄弥がすぐ寝ちやっぺから学校の話できなくて」

「羽丘よ」

「…まじで？」

「え、ええ。……まさか」

「うん。雄弥も羽丘」

「…やっぺり。…それで日菜は」

「ん？どういうこと？」

私は昨日日菜が帰ってきた時の様子を結花に伝えた。あの日菜があそこまで機嫌を悪くするのはよっほどのことだから、もしかしたらとは思っていたのだけど、…雄弥くんと同じクラスになってしまったのね。

「…まあ、2人とも子供じやないし、日菜の嫌い方を考えたらそこまで深く悩まなくてもいいだろうね」

「けど日菜は、…きつと雄弥くんを傷つけるわよ？」

「チツチツチ。紗夜はわかってないわ。日菜と全然喧嘩してないだろうから知らないのも仕方ないだろうけど」

「…どういふことよ」

「日菜はね、嫌った相手に嫌がらせなんてしないよ？話しかけることもなく、話しかけられないようにする。それが日菜の嫌い方だよ」

「…そうなの？でも、それじゃあ仲直りはどうやってするのよ」

「知らない」

「は？」

「たしかに私は日菜と喧嘩をいっぱいしたけど、それでも嫌すくわれたこと仲直りできたからは無いからね。いっぱい喧嘩したから嫌った時にどう動くのかわかるだけで、嫌ってから2年半ぐらいは経ってるじゃない？”嫌い”で収まらない状態でしょ。そうなたらもう私にはわからないかなー」

…たしかに。日菜が人を嫌うなんてことはなかった。そもそも周りを見ないから。そんな日菜が唯一嫌いになった人物。日菜自身初めてのことだし、何よりもその相手が相手だからずっと頭に残っていたはず。そして時間が経つほどその気持ちは黒く染まり、簡単には治せないものになっている、ということなのね。

「でも…それは…だって、日菜は！」

「そうだね。あの時のことを日菜は知らないからね。…でも、今は言えるような時じゃないよ？」

「わかっているわ。…いえ、…私も…日菜に向き合う覚悟が…できてないわ」

「…そつか。ま、なんとかなるでしょ！」

「なぜそんなに楽観視できるのよ…」

「暗く考えてもいい案は思い浮かばないでしょ？そんなことよりも！」

「そんなことって…」

「そろそろ休み時間も終わるから教室に戻ろ！」

「へ？…本当ね。もうこんなに時間が過ぎてたのね」

「ほら早く戻るよー！」

お弁当を片付けて、レジャーシートもテキパキとしまっていく。その早さから、結花が外でこうやって食べるのに慣れてることが伺える。…ピクニック好きだものね。階段を降りながら今度はバンドの

話になった。私の手を握ってきた結花がそれで気づいたからね。

「へく。紗夜もバンドに入ったんだ」

「ええ。Roseliaというバンドよ。白金さんもメンバーで、彼女はキーボード兼衣装担当ね」

「え!? 燐子衣装作れるの!?!」

「ええ。私も知った時は驚いたわ。けれど彼女が作る衣装は素晴らしいものばかりだわ」

「紗夜がそこまで言うなら本当に凄いだろうね。…よし、ライブ見に行こっかな!」

「あなたなら歓迎するわ。是非その後に感想とアドバイスをほしいわね」

「普通に楽しませてよ!?!ま、どうせそういってこ見ちゃうんだけどさ」  
「ならいいじゃない」

「うん。引き受けました! 次のライブ決まったら教えてね!」

「もちろんよ」

「ありがとう♪それじゃあねく」

~~~~~

教室に戻って自分の席に座る。花音は2限目から戻ってきてたから今は私の隣の席に座ってる。ちなみにノートは千聖が渡してた。2人分を同じ時間に書くのはしんどいからね。それに本人が映しなから覚えたほうがいいし。

「結花ちゃんおかえり。外で食べてたの?」

「外っちゃ外かな。屋上で食べてた」

「屋上か。たしかに今日なら屋上で食べてたら気持ちよさそうだなね」

「気持ちよかったよ♪今度は花音も屋上で食べようよ!」

「うん。いいよ」

「やった☆千聖も来るよね？」

「ええ。構わないわよ。それより貴方、誰かと食べてたの？」

「隣のクラスの氷川紗夜ちゃんと食べてたよ。紗夜とは幼馴染だからね！」

「そうだったのね」

「へへ。同じ学校になれてよかったね！」

「うん！」

紗夜とは今まで通りの関係でいられそうでもよかったよ。…けど、正直な話日菜はどうなるか分からない。だっていつも日菜は予想の斜め上に行くから。日菜相手に先回りするのがどれだけしんどいことか。

「結花ちゃん？どうかしたの？」

「え？ううん。ちよつと考え事」

「…力になれるかわからないけど、悩み事なら聞くよ？」

「ほんと？花音は優しいね。それじゃあ頼らせてもらおっかな」

「う、うん。頑張るよ！」

「ありがとう♪…実はね、結構悩んでることなんだ」

「そ、そうなの？で、でも力になるよ！」

「バイト先紹介してくれない？」

「…ふえ？」

（今回のこの件については、残念だけど私は大して介入できない。だってその時私はその場にいなかったから。…日菜と一緒にいたら、私は関係ないってことを日菜は知ってる。だからこそお節介を焼くことができない。最悪のことにならないようにするしかないね）

花音はどうやらバイトをしているようで、私も花音の紹介という形でそこで働かせてもらえないかという流れになった。面接に行かないとどうにもならないことだけだね。

(∴紗夜、タイミングを逃したら最悪のことにはかならないんだからね？急がなくてもいいけど、遅くなりすぎてもダメだから気をつけてね)

## 5話

放課後、結花に頼まれて商店街へと買い物に来ているのだが、商店街というものはその姿があまり変化しないから懐かしさを覚えやすいな。帰ってきたという実感がよく湧く。

買い食いでもしようかと思ひ、匂いにつられてパン屋へと入ったのだが、何やらパン屋の様子がおかしい。

「お父さん無茶だつてばー！」

「何言つてんだ沙綾。俺が働かなくてどうする。…男がやる力仕事だつてあるんだ」

「腰痛めてちや無理だよ！店を閉めて病院に行こー！」

「あの一ー」

「む、お客さんか。すまないな。見苦しいところを見せてしまった」

「いえ。仕事なら俺が代わりにしましょうか？力に自信もありますし、特に予定があるわけでもないですし、なにより、今日無理して今後足腰が使い物にならなくなるより良いと思いますよ」

「…たしかに。だが仕事の内容は…」

「それは私が教えるから。お父さんはお母さんと一緒に病院に行つて来て」

「むう、しかしだな。お客さんに店の中を把握されるのも気が引けるというか」

「あ、それなら雇ってもらつていいですか？ちょうど何かバイトないかと探してたので」

一軒家でパン屋をしてるということは、このパン屋と一家が生活してる建物は同じなのだろう。わかりやすく繋がってるわけじゃないだろうが、他人に中を見られたくないのは分かる。しかし従業員なら関係ないだろう。家の中に入り込む気もないし…バイトを探してるのも事実だしな。

「フフツ、ハツハツハツハ！君面白いな！よし、採用！あとは沙綾と君に任せた！……ところで名前はなんだい？」

「お父さん順番がおかしいから……」

「藤森雄弥です。よろしくお願いします」

「雄弥くんか、よし覚えた！俺は山吹剛たけら。分かっているとと思うが、ここにいる沙綾の父親で、この店の店主だ。これからよろしくな！」

「はい」

「うしっ！じゃあ病院に行ってくるから、あとは2人でよろしくなく。……いてて」

腰に手を添えながら店主こと剛さんは奥に消えていった。奥さんと病院に行くのだろう。残された俺たちは互いに目を合わせて、苦笑した。俺が言うのもなんだが、流れが急だからな。

「えっと……一応自己紹介しますね。山吹沙綾です」

「さつきもしたが、藤森雄弥だ。高2で羽丘に通ってる」

「あ、やっぱり羽丘なんですね。私は高1で花女に通ってるんですよ」

「花女なのか。1つ上の学年に転校生来ただろ？」

「あ、はい。たしか来てましたね。お知り合いの方なんですか？」

「俺の姉だ」

「……え？」

「だから、姉だよ。姉」

「……なんで違う学校なんですか？」

「女子校に通いたかったらしい」

「なるほど？」

「ま、そうなるわな。……さてと、そろそろ仕事を教えてもらうか。店長が言ってた仕事ってどれのことだ？」

「そうですね。ついてきてください。教えますから」

沙綾の案内に付いていき、仕事を教えてもらう。……なるほど、たしかにこれは力仕事だな。パン屋の仕事ってパンを作って販売する、ぐ



らしいにしか思ってたが、それだけじゃないんだな。

~~~~~

雄弥さんは、教えたことをすぐに覚えてテキパキ動いてくれた。やっぱ男の子は凄いなー。たまに羨ましいって思うことがあるよ。男に産まれたかったー、とまでは思ったことないけど。

「ふうー、これで全部か？」

「はい！ありがとうございます！」

「いやいや、仕事だからな。教えてくれてありがとう」

「よかったら夜ご飯も食べていってください！もうこんな時間ですし」

「いや、さすがに夜ご飯までお世話になるわけには………ん？……夜ご飯？」

「？どうかしました？」

「…ちよつと電話させてもらうな」

「はい。…？」

雄弥さんは焦るように携帯を操作して誰かに電話し始めた。親御さんかな？電話に出た人は、私にも聞こえてくるぐらいの声の大きさで電話に出た。

『もしもし!!雄弥なにしてるの!!無事なの!?!』

「とりあえず話すから落ち着いてくれ」

『警察に電話したほうがいいかな!?!』

「無事だからな!?!話聞けって!」

『私心配だよ…。お姉ちゃんにできることある!?!』

「だ・か・ら!話聞けって言ってんだろ!」

「こういう一面もあるんだ…。ずっと落ちついた感じの人なのかと

思ったけど、お姉さんが相手だからなのかな？忙しそうにツツコミしてるのが、ちよつとだけ有咲っぽい。

お姉さんを落ち着けさせた雄弥さんは、お姉さんに事情を説明してこれから帰ることを伝えてた。

（：お礼したかったんだけどなあ。お姉さんが待ってるなら仕方ないかー）

「んじや、買い物して帰るから、ご飯も2人で作ればすぐにできるだろ」

『そうだね！それじゃあ待ってるから早く帰ってきてね〜』

「ああ。：悪いな沙綾、そういうことだから帰らせてもらう」

「あ、いえいえ。またの機会にでも」

「：食べさせたいのな」

「ふふっ、お礼したいですから♪」

「ま、その時がきたらな」

「はい！」

今日はいつもより少し早くお店を閉めて、2人で作業を始める。雄弥さんは本当に要領が良く、とても初日とは思えなかった。明日の朝も来てくれるみたいで、来てほしい時間を伝えておいた。お店を出て帰っていく雄弥さんを見送っていると、弟の純と妹の沙南が出てきた。

「ご飯にしよっか」

「うん」

「おねーちゃん。さっきのおにーさんは？」

「今日からお手伝いしてくれる人だよ。藤森雄弥さん。お姉ちゃんより1つ年上の人」

「あしたもくるの？」

「来てくれるって言ってたよ。その時に挨拶しようね」

「うん！」

利口な2人の頭を撫でてあげてから家の中に入っていった。お母さんがご飯の準備してくれてたから、すぐに用意することができた。3人でご飯を食べて、今日は2人を先に寝かせることにした。

くくくく

「さあ雄弥。言い訳を聞いてあげましょう」

雄弥が帰ってくるやいなや、私はリビングで雄弥を正座させた。本当は全然怒ってないんだけど、こういうことはなあなあにしちやいけないと思う。社会に出た時に忘れちゃいけないことでよく言うじゃない? ”ホウレンソウ” って。報告、連絡、相談。これは忘れちゃいけないよね。

さてさて、雄弥はと言うと…反省はしてるようだけど、私の目を真っ直ぐに見ていた。

「言い訳をする気はない。連絡しなかった俺が悪いんだからな。でも、山吹さんのところを手伝ったのは後悔してない」

「よろしい!」

「いいのかよ!」

「だって怒っても仕方ないじゃん? 心配したのは本当だけど、雄弥なら大丈夫だろうなって思いもあつたしね。それに、雄弥がやったことは褒められることだもん。…連絡がなかったところ以外は」

「本当にごめん」

「うん。それじゃあご飯作る?」

「そうだな」

雄弥が買ってきてくれた食材を冷蔵庫に片付けつつ、これから使うものは残しておいた。雄弥と2人で料理をするとすぐにできちゃう。凝った料理は私しか作れないけど、簡単な料理だったら雄弥の方が手

早くできちやう。今日はちよつと遅くなっちゃったから簡単なもの。それを2人で食べて、食器を洗って順番にお風呂に入って、リビングでくつろぐ。

「ゆーや♪」

「…なんか楽しいことがあったか？」

「まあね。1つは、私もバイトしよっかなって。同じクラスの子に紹介してもらうんだ」

「へー。その人はどこで働いてんだ？」

「ハンバーガー屋さんだったかな」

「…つまみ食いするなよ」

「しないですー。するならアレンジしてからだよ」

「するなって…。で、他には？」

もう一個は…私にとっては楽しいことなんだけど、雄弥にとってはどうなんだろうな…。でも、言つといた方がいいよね。…たぶん。

「隣のクラスに紗夜がいたことかな」

「…同じ学校なんだな」

「うん。雄弥も日菜と同じ学校なんだってね？紗夜から日菜が通つてるのは羽丘だつて聞いたけど」

「まあな。俺の方は同じクラスだ。そうそう、愁とも同じクラスだったぞ」

「あ、愁も羽丘なんだね！…懐かしいなあ」

「たしかにな。…ごめんな、結花」

「…それはもういいんだってば、馬鹿。…あ、そうだ！」

「ん？」

「紗夜がRoseliaっていうバンドに入ってるんだってさ！それで今度のライブ見に行くんだけど…雄弥はどうする？」

「…考えとく」

「うん☆今日は一緒に寝ようね」

(ま、しばらくはライブ来ないだろうね)

「断る」

雄弥の部屋に入ろうとしたら追い出されて、私は渋々自分の部屋で寝ることにした。

…と、思わせといて、夜中のうちに雄弥の布団に潜り込んだいたけどね!

朝起きたら雄弥が家のどこにもいなくて、さすがに泣いた。

~~~~~

あたしはちゃんとノックをして、返事をもらってから部屋の中に入った。お姉ちゃんは机に向かっていて、勉強してたみたい。

「…お姉ちゃん」

「日菜?どうしたの?」

「知ってると思うけど、ユウくんが帰ってきたよ」

「…ええ。知ってるわ。結花が隣のクラスに転校してきたもの」

「っ!?…あー、そっか。結花ちゃんそっちの高校に行ったんだね」

「ええ。今日知って、結花と話したのだけれどね」

そうだった、そうだった。あのユウくん大好き結花ちゃんが一緒に帰ってこないわけないもんね。前とは違う家に住んでるみたいだし、街中でバツタリ会うことも少ないと思うけど、学校が近いからそこは分かんないなー。

「お姉ちゃん。ユウくんと会わないようにしてね」

「!?…どうしてあなたにそんなこと言われなといけないのよ」

「お姉ちゃんが心配だから。お姉ちゃんが好きだからだよ?」

「…心配って、別に会うぐらい…」

「嘘だね」

「…なんですって?」

「だってお姉ちゃん。ユウくんに会うの怖がつてるじゃん」

「そんなこと、ないわよ」

「体が震えてるのわかってる?」

「!?…な、なんで…わたしは…彼に…会うぐらい…」

あたしはお姉ちゃんを抱きしめた。怯えてるお姉ちゃんを安心させるために。お姉ちゃんから恐怖心をなくすために。

「おねーちゃん。大丈夫だよ」

「ひな…」

「怯えなくていいよ。…今日はもう寝よ?」

「…そう、するわ。…でも日菜…私は彼と会わないといけないのよ。

…じゃないと、前に進めないから」

「…っ…ならせめて会うのはもつと後にしようよ。今のお姉ちゃんが会ったって意味ないよ」

「それも…そうね。おやすみなさい、日菜」

「うん。おやすみ、おねーちゃん」

(…なんでそこまでして会おうとするの?意味がわからないよ。…でも、大丈夫。大丈夫なんだよ、お姉ちゃん。お姉ちゃんのこととは、絶対にあたしが守るからね♪)

あたしは部屋を出る前にお姉ちゃんを見て、改めてそう決心した。大切なお姉ちゃんなんだもの。

(それにしても結花ちゃんのことを頭から抜けてたや。…厄介だなー。リサチーとは別の意味で厄介だよ。結花ちゃんのこととは嫌いなれないし、お姉ちゃんと仲良くするだろうしなー。そこは嬉しいけど。…結花ちゃん相手に先回りするのって本当にしんどいんだよね。…とりあえず警戒するのは、リサチー、結花ちゃん、ユウくん  
の順番かな)

## 6話

パン屋の朝は早い。そしてその時間にその場にいるためには、さらに早く起床しないといけない。朝起きたらなぜか結花が布団の中に潜り込んでできていたが、気にせずを起こさないようにベッドから出た。制服に着替え、学校の用意も済ませたらすぐに家を出た。もちろん鍵は閉めた。

まだ日が登り始めてるぐらいに外を出歩くのは、なかなか無いことだ。新聞を配り終えたであろう人とすれ違いながら、一味違った雰囲気を出す街を歩いていく。商店街の一角にある山吹家のパン屋こと”やまぶきベーカリー”に到着し、店の中に入る。

「雄弥さんおはようございます」

「おはよう沙綾、こんな早い時間なのによく起きれてるな。慣れか?」  
「そうですね。さすがにこの時間から手伝うのはあまり無いんですけど、起きれちゃいました」

「すごいな…」

「そんなことないですよ。雄弥さんもよく起きれましたね?」

「眠りは浅い方だな」

「それでも限度があるような…」

沙綾が用意してくれたエプロンを着る。「腰を痛めたが教えるぐらいはできる」と言った剛さんに仕事を教えてもらいながら開店準備をする。沙綾はお母さんこと千紘さんと一緒にパンを作っている。：  
ところであの人本当にお母さん?お姉さんじゃなくて?

「…昨日沙綾も言ってたんだが、本当に仕事を覚えるの早いし要領もいいんだな」

「ははは…まあ、そうなれるように努力しましたからね」

「ふーん?…ま、そのへんは聞かないでやるよ」

「すみません」

「謝るなってーの！話したくないことの1つや2つあるだろ。俺だつて千紘には言えないようなことがあるわけだしな！」

「あら？そうなの？」

「まあな……………ん？」

「お互い隠し事はなしにしようって約束は？」

「あ、あの…千紘さん？」

「なあに？剛さん？」

（…あーあ、やらかしてるなー。…よし、見ないようにしよ。なんか聞こえてくるがBGMってことにして、掃除を始めよかな）

ダスターでレジ周りやパンを並べる台などを拭いていく。それが終わったら別のを用意して窓も拭き、最後に箒で店内を掃き、店の周りも掃除する。それが終わる頃には沙綾もパンをこね終わったように、沙綾と一緒にパンを焼く。

「パン作りって難しいか？」

「うーん、初めは難しいかもですね。シンプルなパンなら全然簡単なんですけど、慣れていけばどれも楽しいですよ」

「そうなのか」

「はい！…そういえば朝ご飯はどうされるんですか？」

「あ…、まあ、食べなくても死にはしないだろ」

「駄目ですよ。…うちで食べていってください。昨日言ってたお礼もありますし、朝早くから来てもらってるのでこれくらいはさせてください」

「けどそこまで厄介になるわけには…」

「…ダメですか？」

「…わかったよ。朝ご飯も食べさせてもらうよ」

「やった♪お父さんとお母さんに言ってきますね！タイマーがなったらパンはオーブンから出してくださいー！」

「了解」



嬉しそうに小走りしながら指示を飛ばす沙綾を見送り、焼けていくパンを眺める。タイマーがなったら言われたとおりパンをオーブンから出し、美味しそうな匂いに軽く感動した。

俺や沙綾は学校に行かないといけないから、パンを陳列させたらすぐに朝ご飯をいただくことになった。沙綾が朝ご飯を作るらしく、手伝おうとしたら「お客さんだから待っててください」と断られた。

「いただきます」

「沙綾は大変だな。家の仕事の手伝いだけじゃなくて、家事も下の子の世話もしてるんだろ？」

「うーん、よくそう言われるんですけどね。私は別に大変とは思ってなくて、やりがいもありますし、何より楽しいんです！」

「そうか。…沙綾は将来いいお嫁さんになるな」

「ふえっ!?お、およ…およめじゃん…」

「…そんな動揺するのか。ごめんな、変なこと言っちゃって」

「いや、あの、謝らないでください!その…嬉しい、です」

「あらあら沙綾顔が真っ赤よ?雄弥くん、沙綾を貰ってくれてもいいのよ?..」

「俺も雄弥くんなら意義ないぞ!いい男だからな!」

「会って2日目の男に大事な娘さんを勧めないでくださいよ」

「そういうところが評価上がるのよ♪」

「もう!2人ともお店の方に行きなよ!..」

沙綾に言われても両親は笑みを崩さずに楽しそうに戻っていった。少し変な空気になってしまったな。…俺の発言のせいなんだが。

朝食を取り終えたら食器を洗い、登校する時間まで2人で店番し、時間が来たら途中までだが、2人揃って登校した。家を出る前に、弟の純と妹の沙南に会い、挨拶を交わした。2人とも沙綾と同じでいい子だった。朝のバイトに入る時はこれが当たり前になるんだな。

「それじゃあ雄弥さん、私はここで」

「ああ。行ってらっしゃ「ゆるーやー!!」ごぶっ！」

「ゆ、雄弥さん大丈夫ですか!？」

「…久々にタツクルなんてくらったな」

「ひどいよ雄弥! パン屋さんでバイトなら朝いないのも納得だけど、書き置きするなり携帯に連絡入れるなりしてよ!」

「はあ? なにを…」

(目が赤くなってる。…泣いたのか)

「ごめん結花。考えなしだった」

他に人がいるからなのか、腰に手を当てて怒っているという風に見せているが、今も目には涙が溜まっている。俺は結花の頭を撫でて落ち着かせることしかできなかった。

「えと、雄弥さん。この方は? 花女の人みたいですけど」

「ああ、俺の姉で藤森結花って言うんだ。一応沙綾の先輩ってことになるな」

「あ、この方が」

「ん。ありがとう雄弥。もう大丈夫だよ」

「わかった」

「ご紹介にあずかりました! 藤森結花です! 趣味は旅行とかピクニックとか、とりあえずお出かけすること! よろしくね!」

「あ、山吹沙綾って言います。趣味はカラオケとか野球観戦とか、あとヘアアクセ集めですね。こちらこそよろしくお願いします!」

「んじや、そろそろ行くか。せっかくだから2人で登校したら?」

「そうだね。そうしよつか! えと、名前呼びでいい?」

「いいですよ。私も結花さんって呼ばせてもらいますね!」

どっちも人当たりがいいからすぐに仲良くなったな。さっそく女子トークが始まり、俺は道が違うから2人と別れて学校に向かった。

学校の下駄箱に行くところちょうど愁も登校してきたようで、2人で教室に向かうことにした。昨日までは席が前後なのにあまり喋れな

かったな。

「雄弥は人気ものだね？」

「転校生だからだろ。高校で転校生ってあまりいないだろうしな」

「それもあるのかな」

「もってなんでもって」

「雄弥は実際に人気者だよ？クラスの男子が羨むぐらいには」

「妬む、の間違いじゃないか？」

「あはは！違うね！気をつけなよ？そのうち追い掛け回されたりしそっだしさ」

「めんどくさいな。：いや、それはそれで面白いか？」

「：僕は関与しないからね」

「だろうな」

愁と他愛もない話をしながら教室に入り、自分の席に座る。そんな遅くに来たわけでもないのだが、ほとんどのクラスメイトは登校していた。：小テストってわけでもないが、これが普通なのかな。

自分の机に教科書やノートをしまっていくと、1人の女子が話しかけてきた。知り合いというか、昨日仲良くなったリサなのだが。

「おはよう☆雄弥くん」

『っ!?!』

「おはようリサ」

『!?!?!』

(さつきからなんだ？あの反応は)

「あれー？リサちーと藤森くんいつの間そんな仲良くなったのー？」

「いつの間になって、昨日ヒナには言ったじゃん？普通に話してて友達になったって」

「本当にそれだけー？」

「それだけだってば」

「…そういえば藤森くん。今朝からお楽しみだったみたいだね？」  
「…へ？」

『今朝からお楽しみ』？…別に何もしてないような。まあたしかに山吹家でのバイトは楽しくさせてもらってるが、その時間のことは日菜は知らないはずだし…。沙綾と歩いてるとこでも見てたのか？それと、どこかリサの表情が暗くなったような…。

「花女の女の子と2人で途中まで登校してたの見たよ？すっごい仲良くしてたね」

「…それって…どういう…」

「あー、やっぱり沙綾のことか」

「この朴念仁。それは失言になってるよ」

「(ズキツ)…さあや？雄弥くんはその子とどういう関係なの？」

「どうって言われてもな『藤森死すべし！』あぶねっ！」

シャーペンが真っ直ぐ飛んで来たんだが!?こいつら無駄に身体能力高いんだな。近くにいたりサと日菜には当たらないようにコースも配慮されてたし、シャーペンが壁に刺さってるし。

「今井さんと名前で呼び合う仲のくせして」

「花女の子とも関係築いてるってかあ？」

「別にそういうわけじゃ…」

「じゃあ遊びだ?!」

「この女の敵め！」

「と、いうことにして俺たちの鬱憤をはらさせてもらう！」

「ぶつちやけ妬みをぶつけさせてもらう！」

「君たち馬鹿でしょ。…ま、雄弥頑張ってるね」

「出口は…両方のドアを塞がれてるか」

「雄弥くん。あたしもちよっと話を聞きたいかな」

「リサ…」

逃げようと立ち上がった俺にリサが詰め寄る。他の男子たちも流石に予想外みたいで、動きが止まっていた。壁に追い詰められた俺は、とりあえず男子たちからの追撃も避けないといけなかったため、この場は逃げの一手を取ることにした。

そうは言ってもリサ相手に力技に出るわけにもいかない。だから、俺はリサの頬に手を添えて、話を聞いてもらうことにした。リサはビクツと体を震わせて動きが止まった。俺はそのまま顔を近づけ、耳元で囁く。

「リサ、昼休みに話をしよう。だから今は待つてくれないか？」

「……ふあい」

「…氷川、リサを頼む」

「…女誑しだね」

「そんな気はないんだがな。んじや、また後で！」

「こいつ窓から逃げやがった！」

「逃がすな！」

「追え追え！」

「包囲して捕まえるぞ！」

クラスの男子たちからの追跡をまいて、俺はちゃっかりHRのときには席についてた。他の男子たちは騒ぎ立てた上に戻ってこなかったために全員反省文を書かされていた。

## 7話

4限目が終わって昼休みになる。朝約束したとおり、昼休みにリサと話をするわけなのだが、クラスのバカ達は学習しない。

「俺達が大人しくすると思うなよ！」

「今度こそしばいてやらー！」

「隣のクラスの奴らも手を貸してくれるしな！」

「めんどくせえー。あ、愁これ頼む」

「はいはい。ちゃんと時間作りなよ？」

「わかってる」

「こいつ！また窓から！」

「クソツ！窓際の席だからそれは防げねえ！」

「だが先に教室を出てる奴らもいる！」

「今回は逃さねえぞ！」

(この団結力の高さ…。体育祭とか盛り上がりそうだなあ)

窓から飛び降りて、監視の目の死角に逃げ込む。死角に入れば監視たちも移動するから、そこをついて逆走。壁に付いてるパイプを利用しながら一気に屋上まで登りきるとしよう。

~~~~~

「：男子たちは懲りないねえ。捕まえられるわけがないのに」

「凄い人数で追いかけてるみたいだけど、ヒナがそう言うならそんなんだろうね」

「今井さん、はいこれ」

「毛利くん?…これは？」

「雄弥のお弁当だよ。話をするんでしょ？持って行ってあげてよ」

「いいけど、どこに行けばいいの？」

「さあ？それは聞いてないからね。僕は図書室行くから、またね」

そう言った毛利くんは、自分のお弁当を持って教室から出ていった。結構図書室には行ってるらしくて、たまに先生に管理を頼まれたりしてる。

「…屋上に行けばいいよ。そこに逃げ込むから」

「へ?なんで屋上ってわかるの?ヒナ」

「男子たちの動きと藤森くんの考え方でわかっただけ。あたしは麻耶ちゃんにご飯食べるから、リサちゃんーは屋上に行きなよ。…もうそろそろ着いてる頃だから」

「そんな早い?!」

あたしは自分のお弁当と水筒も持って急いで教室を出た。あたしが時間を作ってもらったのに、待たせすぎるわけにはいかないからね。

屋上に行くと、ヒナが言ったとおり雄弥くんは屋上にいた。地面を気にせず、気持ちよさそうに寝転んで青空を眺めてる。あたしはそれを見て思わず固まってしまった。なぜか、邪魔しちゃいけない気がして…。

「お、意外と早かったな、リサ。弁当も持ってきてくれたのか。ありがとう」

「へ、…あ、うん。ヒナのおかげだね。お弁当は持って行ってあげてって毛利くんに言われて受け取ったから」

「…:…そっか。それでも持ってきてくれたのはリサだろ。だから、ありがとう」

「い、いいってば。お礼言われるほどの事じゃないし、なんか照れくさいし」

「はははっ、リサって世話焼きな性格してるのに褒められるの苦手なんだな」

「…もう、そんなに笑わなくてもいいじゃん」

「わりいわりい。さてと、とりあえずお昼にするか」  
「そうだね」

体を起こして、今度はフェンスに持たれるように雄弥くんが座った。あたしはその横にハンカチを敷いて座って、お弁当を手渡した。…なんか、こうやってお弁当を渡すのもいいな…なんてね！

「雄弥くんのお弁当、美味しそうだね♪」

「そうか？自分でやっているとわからないな」

「え!?自分で作ってるの!?!」

「まあな。姉と2人で家事を当番制にしてるから。今週は俺が弁当を作ってるんだよ」

「そ、そうなんだ…」

「リサは料理できるのか?」

「うん、できるよー。趣味はお菓子作りだけど、料理も一通りはできるかな。今度お弁当を作ってあげよつか?」

「んー、じゃあ再来週にでも作ってもらつていいか? 来週は俺の姉の担当の週だから、食べなかつたら泣かれる」

「あ、あはは…怒られるんじゃないんだ」

「まあな」

雄弥くんのお姉さんってどんな人なんだろ。今の情報だと、申し訳ないけどブラコンなのかなーって思っちゃうんだけど。

雄弥くんの好みの食べ物を知ったり、食べれないものがないか聞いたりしながら箸をすすめる。ほら、作るなら喜んでもらいたいしね!

お弁当を食べ終わって一息ついたところで今朝の件を教えてもらうことにした。

「それで、沙綾っていうのは、パン屋さんの子であってる?」

「…知ってたのか?」

「まあ顔見知り程度だけだね。仲はいい方だと思うよ」



「どっちも人付き合いがよさそうだからな」

「あはは、ありがとう♪…それで、なんで沙綾って呼んでるのかな？雄弥くんって基本的に名字呼びだよな？」

「昨日から成り行きで、あそこで働かせてもらうことになってな。ほら、一家で経営してるからみんな山吹さんだろ？それで名字呼びだよやよこしいから、名前で呼んでるんだよ」

「なるほどね〜」

たしかにそれだと名前呼びじゃないとややこしいね。山吹さんって呼んだらみんな反応するってことだもんね〜。…でも、それで朝一緒なのはなんでだろうね？

「一緒に登校してたってのは？」

「それは朝もバイトさせてもらったからだな」

「ふーん？…あたしのところも来る？コンビニでバイトしてるんだけど」

「掛け持ちってことか？」

「うん」

「…でもなー。今店長が体壊してるから、できる限り店を手伝いたいんだよ」

「じゃあ店長さんが治ったら来てよ！」

「…なんか強引なような。なんか理由があるのか？」

「へ？…いや、あの…そういうわけじゃないけど、一緒に働きたい、から。…あ、あたし何言ってるんだろ！ご、ごめんね。やつぱりいいよ！」

「…店長に相談してみるよ」

「え…？」

「一緒に働きたいんだろ？相談してみる」

「う、うん」

うわあー、あたし何してるんだろ。…迷惑かけちゃってるよね。あ

たしの我儘のせいで。

「何もリサが気に病む必要なんてないぞ」

「…なんで？だって、迷惑でしょ？入ってすぐに掛け持ちなんて、誰も良い顔しないことじゃん」

「リサはあくまでも誘っただけ。俺がリサと働いてみたいと思ったから店長と相談するんだ。だからリサが気にすることなんて何一つないんだよ」

「でも…」

「でもじゃない。…つと、そろそろ戻らないとな。そんなわけでこの話は終わり。教室に戻るぞ」

お弁当を片づけた雄弥くんは、そそくさとドアの方に歩いていく。あたしはそれを慌てて追いかけることになり、追いついたら次の授業の話になった。さっきの話は打ち切りってことだね。…ほんと、優しいんだから。

~~~~~

「…はあ」

「ん？どうした沙綾。疲れてるなら休んでいいぞ？一人で捌き切れなくなったら呼ぶから」

「あ、いえいえ！そういうわけじゃないので、大丈夫ですよ！」

「そうか？無理するなよ？沙綾って自分のこと疎かにしそうだからなあ」

「あ、あはは、そう見えます？」

「俺からしたらそう見える。他の人はどうか知らないけどな」

す、すごいなー。まだ会って2日目なのに、私のこと見抜いちやってるよ。…私は結構自分のことを抑えちゃう性格だから。それでお父さんにもお母さんにも心配されたし、香澄たちが引っ張ってくれな

かったら今の私はいなかったしね。

「どうやら今も何か隠してるみたいだしな？」

「…っ！…そこまで見抜かれちゃうんですね」

「…色々あったからな。相手の小さな変化にも気づけるようになったんだよ。それはともかく、何かあったのか？」

「…いえ、これは自分でどうにかするものですから」

言えないよ。絶対に言えない。特に雄弥さんには言えることじゃない。

—————

今朝、雄弥さんと別れて、私と結花さんが2人で花女に向かつてる時のことだった。

「へー、沙綾ってパン焼けるんだ。凄いね！」

「いえいえ。お父さんたちの手伝いをしてたら、いつの間にかできるようになっただけですよ」

「謙遜しちゃって。いくら家で作ってるからって、覚えようとしなかったら覚えれることじゃないよ。それを覚えた沙綾はやっぱり凄いやー！」

「そ、そうですか？ありがとうございます。…あはは、ちよつと照れくさいですけど」

「雄弥がパンを焼けるようになったら家でも出来たてのパンが食べれるのかな」

「一応、オーブン機能がある家電があればできると思いますよ」

「うちにあったかな。…無かったら今度買おっかな」

そこまでして食べたいんだ…。うちに来てもらえば出来たてのパンを少しぐらいは渡せるけど、たぶんそれじゃあ駄目なんだろうね。

「ふふっ、結花さんって面白い方ですね。一緒にいてて元気になります」

「んー？さつきまで元気なかったの？」

「あ、そういうことじゃなくて。結花さんと一緒ならどんな時でも楽しいんだろうなーって」

「あー、そういうことね。それもそっか。さつきまでは雄弥と一緒にだったもんね☆」

「なっ！わ、私は別に、そういうつもりはなくてですね！」

「そういうつもりってどういうつもりー？私はただ仲良くしてるなーって思ってただけだよ？」

「え……あ……っっ！！」

「あはは！かわいい♪」

完全にからかわれてる。たしかに結花さんは、ただ仲良くしてるっただけのニュアンスだっただろうに、私ってばなんで……。

「……ごめんね、沙綾。酷いこと言うよ」

「え？」

「もし、雄弥のことを良いなーって思ってるなら、諦めた方がいい」

「なん……で？」

「別に沙綾に意地悪したいわけじゃないんだよ？ただ先に言つとした方がいいかなって思っただけで……。もし、雄弥の気持ちが変わってなかつたら絶対にその子以外とは付き合わないからさ……。それと、姉の勘だけど、雄弥の気持ちは変わってない。だから、諦めた方がいいよ」

「けど……私は……ただ、知りたいだけなんです」

「なにを？」

「雄弥さんのことを。……雄弥さんのことを色々知りたいだけなんです」

「……そっか。それなら止めないよ。……ホントに。ごめんね？意地悪で」

酷いことを言っちゃって」

「…いえ」

「さーやだー！おっはよー！」

「わっ、香澄!?ビックリしたー」

「えへへー」

結花さんが私のことを思ってたのがすごくわかる。さつき結花さんは本当に辛そうに話してたから。私と結花さんの間で流れた変な空気は、私のバンドのボーカルの香澄の登場のおかげですぐに飛んでいった。私たちは、また明るい空気に戻って学校に向かって行けた。

(本当にごめんね、沙綾。沙綾は分かってくれないかも知れないけど、雄弥のことをもつともつと知りたいて思ってるその気持ちは…)

—————

なんてことがあって、雄弥さんと一緒にいるのは楽しいのに、どこか心が寂しい。私はただ知りたいたいだけ。雄弥さんとそういう関係になろうってことじゃなくて、知りたいだけなのに…。

私が考え事してたら腕を引っ張られて、優しい温もりに包まれた。端的に言うとう、雄弥さんに優しく抱きしめられていた。

「あ、あの…」

「なんか沙綾が辛そうにしてたから。…俺に話せないことなら話さなくていい。けど、必ず誰かには話せ。絶対に1人では抱え込むな。1人で抱え込み続けても潰れるだけだからな。…ちゃんと誰か話せる相手いるか？」

「…はい。います」

「そうか。それならよかった。沙綾には笑顔でいてほしいからな」  
「ふえ!?!」

「…大丈夫か？顔赤いけど」

「だ、大丈夫れふ。…これ恥ずかしいです」

「それもそうだな。ごめんごめん」

「…あ、もうちよつとお願いしてもよかったかな」

(私、自分で言つて離れてもらったのに、何言ってるんだろ)

雄弥さんと一緒に店の手伝いをしながらいろんなことを話した。学校がどうだとか、友達のことを話したり。…雄弥さんの話の”他の男子との追いかけて”って絶対私の想像超えるやつだね。話はどんどん広がって行って、バンドの話になった。

「バンドやってるんだな」

「はい！Poppin' Partyって言つて、学校の友達と組んでるんですよー」

「へー。沙綾は…この手ならドラムか」

「わ、わかるんですか？」

「まあ、俺もバンド組んでた時があったからな。一年半も経たずに活動は終わったが、…あー、一応休止中ってことにしてるんだっけな」

「なんで今はしてないんですか？」

「え!？」

「意外か？」

「…はい」

「喧嘩して活動休止とかじゃないんだがな。…それぐらいしか教えれないけど」

「そう…ですか」

全部は教えてもらえないんだ…。まだそこまで教えてもらえないほど信頼関係がないのかな、それとも話したくないことなのかな。…どっちにしても私からグイグイ聞くのは失礼だね。私だって香澄たちにすぐに打ち明けられたわけじゃないし。

「沙綾はバンド楽しんでるか?」

「え…あ、はい!もちろんですよ!みんな仲いいし、一緒にいてすごい楽しいんですよ!私ポピパに入ってよかったって、ポピパが好きだって心から思えるんです!」

「そっか…。それはよかった」

「あ!雄弥さん、ライブ見に来ませんか?今度のライブハウスでのライブにポピパも出るんですよ」

「ライブか…。…ま、いいか。見に行くよ」

「ホントですか!?やった!きつと雄弥さんもポピパが好きになるようなライブにしますから、楽しみにしてくださいね!」

「わかった。楽しみにしとくよ」

## 8話

放課後となり、最近はすぐに荷物を纏めて”やまぶきベーカリー”へと足を運ぶのだが、今日は違う。最初はそのつもりだったのだが、愁に呼ばれてどこかへと連れて行かれるらしい。場所は着いてからのお楽しみだそうさ。

今朝も”やまぶきベーカリー”で働いていて、その時にバイトの掛け持ちのことを相談してみた。「いいぞ!」とあっさり了承してくれたし、理由も「元からバイトを雇っていなかったから」らしい。剛さんはやりたいようにやれと言ってくれたが、沙綾はどこか機嫌が悪くなくなってしまった。

「ゆうーやくん♪今から帰るの?」

「リサか。いや、今日は愁にどこぞへと連れてかれる」

「場所知らないんだ…」

「まあな。リサは?」

「あたしはこれからバンドの練習だよ!」

「なるほどな。それでその指なわけか。…ベースを指弾きしてるのか?」

「そ、そこまでわかるの?」

「…まあ、一応経験者だからな」

「それでもそこまでは分からないような。…それはともかく、それも詳しくは教えてくれないの?」

「いや、今度教えるよ。軽くだけならな」

「やった♪」

リサは両手を握って喜びを表していた。狙ってやってるわけでもなく自然とそういう仕草になるから、他の男子たちからの人気が高いんだろうな。なんてことを考えていたら愁が正門までやってきた。

「お待たせ。先生に頼み事されちゃってね」



「気にしてない。それでどこ行くんだ？」

「んー、懐かしい所、かな」

「…そうか」

「今井さんはこれからバンドの練習？」

「そうだよ」

「途中までなら道が同じだから一緒に行く？」

「お邪魔してもいいのかな…、なんて」

「別にいいだろ。それじゃあ案内してくれ」

「おっけー。けどもう1人呼んでるからちよつと待っててね」

「もう1人？」

俺とリサが首を傾げていると、猛スピードで走ってくる人影が見えてきた。それで誰が来るのか悟った俺は、真っ直ぐに突っ込んでくるその人物を躲した。

「危なっ!?…もうー、ちゃんと受け止めてよ雄弥」

「ああやって突っ込んでくる奴を受け止めたくねえよ」

「じゃあ次はスピード落とすね☆」

「…そういうことじゃないんだよ」

「えつとく、雄弥くん。この人は？」

「あ、そっか。まだ会ったこと無かったな。こいつが「雄弥の姉です

！」…そういうわけだ」

「藤森結花って言うんだ。あなたは雄弥の彼女？」

「ふえ!?!や、あの…あらひは…しよの…」

「あ、結花。今井さんは純粋な乙女だからね」

「…みたいだね。ここまで顔を真っ赤にしてたらわかるよ」

これが茹でダコ状態とでも言うのだろうか。顔を真っ赤にして目を泳がせているリサを落ち着かせようと頭を撫でたらリサはさらに悪化してしまった。げせぬ。

「雄弥どいて」

「そうは言うがな…」

「私がこうしちゃったから私が落ち着かせる。それに雄弥じゃ逆効果だから」

「…わかった」

「見た目はギャルっぽいのに乙女なんだね。…えい」

「ひゃっ!?!…え?なにになに?」

「おかえり。改めて自己紹介お願い♪」

何が起きたのかさっぱり分かっていないようで、リサは困惑した様子で俺の方を見てきた。…え、今の言わないといけないの?あんま言いたくないんだけど。

「真っ赤になって何やらトリップしてたあなたを戻すために、私がほっぺをペロリンと舐めさせて貰いました☆」

(言うのか/んだ!?)

「うえ!?!」

「あ、やっぱりやだよ。ごめんね?お詫びに同じ場所に雄弥にキスさせるから」

「なんでだよ!?!」

「きしゅ!?!」

「…結花、話が進まないから」

「ごめんごめん。楽しみすぎちゃった♪ほら、雄弥早くキスして。話が進まないから」

「だから何でだよ!?!リサの意思は無視か!?!」

「雄弥のキスほしい?ほしくない?」

「え、えと……。……」

リサはさつきよりかはマシだが、また顔を赤くしていて、そのまま瞳を閉じた。…え、まじでキスしないといけないの?結花に目線を送ると早くやれと急かしてくるし、愁に助けを求めても諦めろと首を横

に振られるだけだった。

(こいつら…憶えてろよ!)

なにか仕返しをしようと思ひし、じつと止まってるリサに向き合う。不安になっているのか、閉じられている瞼が震えている。俺は腹をくくって、リサの頬にキスをした。

「…これでいいだろ？」

「お姉ちゃんは満足です…。ぐふっ」

「はいティツシュ。…まったく、やらせといて鼻血出すって何なのホント」

「愁。止めなかったお前も同罪だからな」

「…え？」

「それで、リサだっけ？」

「……」

「おいリサ」

「…はっ!…なに?」

「自己紹介」

「あ、そうだった。雄弥くんと同じクラスの今井リサって言います。

Rose liaっていうバンドに入ってるベース担当です」

「同じ年だから敬語じゃなくていいよ。それにしてもRose liaか。紗夜と一緒にんだね」

「同じ年なんだ…。それに紗夜のこと知ってるの?」

「同じ学校だし、幼馴染だからね!」

…紗夜とリサは同じバンドなのか。そう思いながら2人を眺めていたら、リサがこっちに視線を送ってきた。俺も紗夜と幼馴染なのかを知りたいのだろうか。なにを思っていたのかよく分からなかったが、なぜか俺は視線を逸らしてしまった。

「…そろそろ行くか」

「…そうだな」

(雄弥くん…?)

~~~~~

結花がリサになにか言ったのか、それともリサが察したのかはわからないが、あの後リサからあの反応に対して聞かれることはなかった。さも気にしてないように振る舞ってくれた。リサと途中で別れて、愁に連れて来られた場所は…。

「…たしかに懐かしいな」

「でしょ?」

「けど私たち入っていいの?愁は大丈夫だろうけどさ」

「大丈夫大丈夫。2人とも辞めたってわけじゃないし、僕の方から事前に言ってるしね」

「なるほど」

愁に連れて来られた場所は、前にバンド活動していた時に所属していた事務所だった。バンドは活動休止ということにしてあるし、たしかに事務所に退職願を出していなければ、首を切られたわけでもない。

愁の後ろを付いていくように事務所の中を進みながら中を見渡す。さすがに大して変わっていないようで、記憶に残っている通りだ。違いがあるとすれば従業員だったり、所属している人物とかだな。

「それで?なんでここに連れてきてんだよ」

「それはね…ってあれ?丸山さん」

「あ、毛利くん。今日は休みじゃなかったっけ?…ってあれ、後ろの2人は…」

「うん。仕事じゃないよ。それでこの2人は「いや、いい」…雄弥?」

「久しぶりだな彩」

「え、…覚えて…くれて…」

「私も覚えてるよ☆目標のアイドルになれたんだってね？パスパレのボーカルやってるんでしょ？おめでとう、彩」

「結花ちゃん…も。…：…あり、がとう…：ううう」

「よしよし、すぐ泣くのは変わってないんだね」

「…知り合いだったんだ？」

「まあな。時期的には入れ違いみたいなものだったけど」

結花に慰められてる彩に目を向ける。出会ったのは2年ほど前だったか、あの件が起きる少し前に偶々知り合ったのだ。たしか、必死に自主練習をしていた彩に結花が声をかけに行き、俺がそれに付き添っていたんだっただけだ。

「それにしても、そんなんでMCとか大丈夫なのか？」

「うぐつ…それは…：今後の課題ということだ」

「雄弥知らないのー？彩がトチるのって人気なんだよ？」

「そんな人気ほしくないよー！」

「贅沢言わないの！受け入れられてるだけいい方だよ？バツシングされるより断然いいよ？」

「そ、そうだけど…」

「まあ、彩の場合何度失敗しても諦めないからな。みんなもそれが分かっているから応援してくれてるんだろ」

「そ、そうかな？…：そうだったらいいな」

「はあー。雄弥はすぐそうやって彩を甘やかすんだから」

別に甘やかしてるわけじゃない気がするんだが、そこらへんの結花の感性をツツコんでも仕方ない。流しとくとしよう。

「それより彩はどうしてここにいるんだ？打ち合わせか？」

「あ！レッスンがあるんだった！ごめんね、もう行くね！」

「行ってらっしゃい。こけちゃ駄目だよ」

「こけないよ!!」

「…慌ただしいな」

「あはは、丸山さんらしいとも言えるけどね」

彩も不本意な評価を付けられてるな。仕方ないっちゃ仕方ないんだが。止めていた足を動かして目的の部屋へと向かう。愁がドアを開けて俺たちを中へと招く。俺と結花はそれに従って中に入ると、懐かしい顔があった。

「久しぶりだなー! 2人とm」「うるさい」「ガハツ…」

「あー、これ見るのも久しぶりだね」

「再会して…最初に…:…なにすんだ…:よ」

「いや、ノリで」

「そうそう。大輝相手にはこんなもんでしょ?」

「2人同時に蹴るとか…:…白か」

「は?」

「~~~~っ!!? この、変態!!」

結花が顔を真っ赤にして制服のスカートを抑える。結花は相手にならノリノリで仕掛けるが、こんな感じで自分に被害が来ると瞬間で乙女になるんだったな。涙目で俺の方を見てくる結花に頷き返して、ずっと静観していた俺達のリーダーである疾斗にアイコンタクトを送るとゴーサインが出た。よし、やるとする<sup>殺る</sup>か。

「えっと…雄弥さん?」

「どうしたクズ」

「クズ!」

「喋っていいとは言っていないだろ」

「そこまで扱い酷いんすか!?!ちよっ、待って待って!!謝るから…イタタタ!!腕はそっちに曲がらな…!」

「雄弥、さすがに折るなよ」

「なら落とすとするか」

「う、腕がイカれるかと…あのー、雄弥さん？」

「止めるとは言っただろう？」

「首はどうかと…ぐっ…」

「ふうー。いっちょあがりっつと」

「大輝をすぐに落とせるのって雄弥ぐらいだよな」

「疾斗でも無理だもんね」

「あいつの馬鹿力は俺じゃ抑えれないからな」

なにをとぼけたことを言ってるんだか…。疾斗が本気を出せば大輝を気絶させれるだろ。しかも俺がこうやってすぐに落とすてるのも、ある種のネタとしての流れだからな。大輝もそれが分かってあまり抵抗しないし、すぐに目を覚ます。

「結花、これでいいだろ」

「…雄弥…ん」

「…なにを期待してる」

「ん！」

「…：はあ。ホント、姉なのか疑うんだが」

「そう言いながら雄弥って結花の要望聞くよね」

「愁。雄弥もシスコンだからに決まっ、だはっ！」

「…消しゴムってこんな威力出せるんだね」

なにやらおかしな事を言ってた疾斗をとりあえず黙らすことに成功した。結花の様子は…：もう少しかかるか。今何してるかと言うと、ただ単にハグしてるだけだ。嫌なことがあったり、機嫌を悪くしたりしたら必ず結花はこれを要求してくる。こうやって体を触れ合わせる。と安心するんだとか。ちなみに、結花は”充電”って言うる。

「ああー、久しぶりに落とされたあ」

「相変わらず軽い反応だね」

「まあな。雄弥もうまい感じで落とすからよ」

「：君たちホントは馬鹿でしょ」

「勉強できるバカってやつだな!」

「雄弥と大輝を一緒にしないでよ」

「お、結花も復活か」

「そういう疾斗もな。んで?なんで集まってんだ?」

「お前らが帰ってきたっていうのを聞いたからな。それが1つで、もう1つは、まあちよつとな」

また疾斗が何やら考えていたらしい。大方の予想はつくし、それは結花も同じなようだ。：やれやれ、頑張らないといけないな。

~~~~~

「今日の練習はここまでよ。みんな家に帰っても少しは復習するように。：ライブも近づいてるのだから」

「分かってますよー!今度のライブはお姉ちゃん達も出るから、あこ気合十分です!」

「頑張ろうね：あこちゃん」

「うん!」

「あたし次の予約してくるから、片付け始めといてね。：散らかしちゃだめだよ?」

「わかってるわよ。そんな醜態1回だけで十分だわ」

みんながそれぞれ道具を片付けていく時に、あたしは次の予約を取りに行く。これはいつもあたしがやってること。だから今日も1人で受付まで来たんだけど。

「今井さん。この後少し時間をもらってもいいかしら?」



「紗夜？別にいいけど珍しいね？」

「あなたに…いえ、あなただけにしか話せないから」

「あたしにしか？」

「ええ。日菜と同じクラスということは、彼のことは知ってるのよね？藤森雄弥くんのことを」

「っ!!…うん、知ってるよ。…そっか。Roseliaならあたしと紗夜しか知らないもんね。友希那は話しかけに行くタイプでもないし」

「そういうことよ。…少し気持ちの整理がしたいの。それに付き合ってくれないかしら？」

「もちろんいいよ！友希那にはあたしから言っとくね☆」

「ありがとう」

「どういたしまして♪」

紗夜からこんなお願いされるなんてね☆あたしは気持ちが高ぶるのを自覚して、紗夜と話をするまでにはなんとか落ち着かせた。

友希那には少し待ってもらおうことにして(夜暗いし)、あたしは紗夜の話真剣に聞いた。力になってあげたいって思ったから。

その思いは達成できたと思う。だって紗夜が柔らかく微笑めてたから。

本当によかった。

…なのに。

「リサ：私には2人が話してたことを想像することもできないわ。でも、話せないことだとしても頼ってほしい」

「ゆきな…」

「…今は胸を貸してあげることしかできないけど」

「ありがとう…うう…」

なのに

なんで、あたしの心は

こんなに締め付けられるように悲しんでるんだろ…

## 9 話

『もういーかい?』

『まーだだよ!』

『僕はこつちに隠れるね』

『あたしはこつちー!』

(…あー、これが明晰夢ってやつなんだね)

小さい頃に誰でもやったことがあるよね。鬼ごっこぐらいに人気だったと思う。あたし達はこの時かくれんぼをしていた。この日はお姉ちゃんと結花ちゃんは一緒じゃなかった。あたしとユウくんのみでいつもの公園に来て、そこにいた他の子たちと一緒にかくれんぼをすることになったんだったかな。

『もーいーかい?』

『もーいーよー!』

あたしとユウくんはこの時勝負してたんだよね。どっちの方が長く隠れられるかって。あたし達を含めて5人で遊んでただけど、あたしとユウくんは全然見つからなかった。あたしもユウくんも、お互いどこに隠れたのかは知らない。だから勝負がどうなってるか分からないくて、あたしは負けたくなかったからずっと隠れてた。

だけど、なかなか鬼の子は見つけてくれない。だんだん日が沈んで暗くなり始めたら、みんな帰らないといけない。だからあたしも、隠れるのをやめたらよかったんだ。…でも、あたしはユウくん勝ちだった。この日の前日に結花ちゃんに『ひなちゃんは、いつもユウくんにだけぜったいまけるよね!』って言われたから、ムツとしたあたしは『あしたぜったいかつもん!』って意地を張ってたんだ。

そんな意地を張らなければよかったのに、あたしはずっと隠れ続けた。鬼以外の子たちもあたしを探し始めたけど、帰らないといけない時間になって、帰って行っちゃった。ユウくんがどうしてるのかわか

らないし、あたしは1人取り残された気がして、周りの暗さも相まって怖くなった。

実はみんなまだ探してくれてるんじゃないか、見つけれたらユウくんにもた負けちゃうんじゃないか、そんな思いもあって、声を押し殺しながら涙を流した。

見つけてほしい。だけど、見つけてほしくない。

自分の気持ちグチャグチャになって、じっとその場で泣き続けた。

『おねえちや…ゆう…くん。…うあ…あああ』

『ひなちゃんみーつけ！』

『ふえ…？』

『よかったー。みんなでひなちゃんさがしてたけど、なかなかみつけれなくてビックリしたよ。…はじめてひなちゃんにまけちゃったね』

『あ、ああ…ゆう…くん』

負けたことの悔しさ以上に、あたしを見つけたという安心が強かったんだらうね。ユウくんは満面の笑みで、あたしのことを抱きしめてくれた。

あたしはその安心感もあって、声を押し殺すのをやめた。喉が張り裂けるんじゃないか、つてぐらい声をあげて、ユウくんにしがみついていた。泣いた。ユウくんはあたしの背中に手を回してくれて、ポンポンって優しく叩いてくれた。

『ぐすっ、…こわ、かった』

『ぐらいもんね』

『ずっと1人になるとおもった！』

『ひなちゃん、かくれるのうますぎるよ。…でも、だいじょうぶだよ、ひなちゃん』

『えっ…』

『ぼくは—————から』

『ほんと?』

『うん!やくそく!』

『じゃあゆびきりしよ!』

『いいよ!』

この日ユウくと約束した。あたしはそれがすっごい嬉しかったのを覚えてる。この日のことは色褪せずに覚えてる。あたしが初めてユウさんに勝った日で、初めて外で大泣きした日で、そして、とても大切な2つの約束をした日だから。

今のが1つ目で、あたし達は手を繋ぎながら公園を出て家に帰っていく。その道中で2つ目の約束をする。

『それじゃあひなちゃん!またあしたね!』

『…ゆうくん』

『どうしたの?』

『やくそく…』

『やくそくなら…、…うん。いいよ!もういつこやくそくしたいんだよね?』

『!!…うん!あのね!』

☆☆☆

「つ!!…はあ、はあはあ…夢って…わかっててもしんどいね」

飛び起きるように体を起こしたあたしは、乱れてる呼吸を整えながら時間を確認する。まだいつもなら寝てる時間だけど、かといつて二度寝したら寝坊しそうな、そんな時間だったから起きることにした。

幼い頃にした大切な2つの約束。あたしはその事を忘れたことがないし、ユウくんが裏切ったあの日以降、どれだけ忘れたいと思っても忘れることができなかった。いつまでもあたしの胸の中に

刺さってるからだね。

「こんな夢見るの…リサちーと彩ちゃんのせいだよ」

喉を潤すために冷蔵庫からお茶を取り出して、コップに注いでそれを一気に飲み干す。汗も酷いし、服も着替えとこつと。

昨日あった出来事が原因だと決めつけて、思い出したくないのに蘇ってくる記憶に苛立ちを覚える。

「どうせ結花ちゃんのからかいのせいだろうけど、ユウくんもユウくんだよ。…あんなところでリサちーにキスするなんて」

全然人がいなかったから、噂にもならないだろうけど、それでもあんな目立つところでやるなんてどうかしてるよ。リサちーも拒まないし。

そんなことを思いながら事務所にレッスンしに行ったんだけど、彩ちゃんは彩ちゃんです。ユウくん達に会ったことを嬉しそうに話す。レッスンでいつも通りあたしはミスしなかったけど、「らしくない」なんて言われて、なんか強引だった彩ちゃんのせいで話さないといけなくなっただよ。

『日菜ちゃん…それは日菜ちゃんが『違う!!』っ！』

『何も知らないくせに…。ちよつと話を聞いたからってズカズカ踏み込んでこないでよ！あたしのことを勝手に彩ちゃんが決めないで!!』  
『お、おふたりとも、喧嘩は…喧嘩はやめてください!』

『日菜さんも落ち着いてください。彩さんも、これ以上は踏み込まないというごことになってください』

『…そう、だね。…ごめんね…日菜ちゃん』

『あ…ーっ！』

『ヒナさん!』

『イヴさん! 追いかけては駄目です!』

『なんでですか!!ヒナさんはパスパレの一員なんですよ!?!』

『今は…そつとしてあげてください』

『マヤさん…。わかりました…』

(千聖さんがいてくださればもう少しマシになってたんでしょよね。  
…ジブンはまだまだ未熟すぎます)

なんてことがあったんだったね。それで、帰って不貞寝したらこんな夢見て…。なんなの、ほんとに。

「あら日菜。起きてたの?早いわね」

「あ、お姉ちゃん。おはよう♪」

「ええ、おはよう。昨日は随分早く寝たのね」

「まあね〜」

「…日菜、昨日何があったの?丸山さんから『日菜ちゃんを怒らせちゃった』ってメッセージが届いたのだけど」

「…彩ちゃん、そんなことしたんだ。…気にしないで、ちよつともめちゃっただけだから」

「もめたの?あなたが?…日菜、ちゃんと丸山さんと話をしなさいよ。あなたにとつて、大切な居場所でしょ?」

「うん、わかってる。…ありがと、お姉ちゃん」

お姉ちゃんは最低限しか踏み込んでこない。それはお姉ちゃんも踏み込まれたくない人だから。人にされたくないことは、絶対に人にしない。そんな人で助かったよ。今踏み込まれたら、大好きなお姉ちゃん相手でも怒鳴ってたと思うから。

「私の方でも少しだけ丸山さんと話はしておくわね」

「…うん」

~~~~~

学校に行くと、今日もまた男子たちがユウくんを捕まえようと躍起になってた。日に日に追いかける男子の人数が増えていくし、真剣味が増していくんだけど、なにか理由でもあるのかな？

大して興味もないことだけど、あそこまで必死になってると流石に気になる。近くにいたクラスの子に聞いてみたら納得のいく答えが返ってきた。

「あ、リサおはよー!」

「おはよ☆…まあた男子たちはやってるの？懲りないねえ」

「リサちーが絡んでるからね〜」

「へ？なにそれ？」

「リサ知らないのー？なんでか知らないけど、藤森くんを捕まえた男子はリサと付き合う権利を貰える、なんてことになってるんだよ？」

「ええ!? あたしそんなの知らないんだけど!? そんなの勝手に決められても…」

「そういえばそれって期限決めてあるの？」

「たしか今月末の体育祭までだったかな。誰も捕まえられなかったら藤森さんとリサのカップルを正式に認めるんだとか」

「自分勝手な勝負だね。どうせ男子たちが勝手に決めて、藤森くんもそれに巻き込まれたってところでしょ？」

「よくわかったね〜。そんなところしいよ」

本当にうちの学校の男子たちってるんっ♪てこない人たちばっかだよな。まああたしはそれを傍から見ただけなんだけど、勝手に巻き込まれたリサちーは「…か、カップル？あたしが？そんな、ええ？」なんてブツブツ言つときながら満更でもなさそうに頬を赤く染めてるし。

(ほんと、るんっ♪てこないことばっかだよ。前まではもつと面白いことが多かったのに)



未だにトリップしてるリサちーを席に座らせて、あたしも自分の席に座る。まあリサちーの前なんだけど。周りに人がいないのを軽く確認したらリサちーを現実に戻す。

「えつと…あれ？」

「リサちーに聞きたいことがあるんだけどさ」

「え？なにになに？」

「ユウくんキスしてもらってどうだった？」

「ふえ!?!にや、にやんれ!?!」

「あはは！リサちー動揺しすぎ！…あんな目立つとこでしてたら嫌でも見えちゃうよ。ま、あたし以外に人はいなかったから、そこは安心して」

「ヒナに見られただけでも恥ずかしいんだけど…」

「で、どうだったの？リサちー受け入れてたよね？」

「き、緊張しすぎてよく分かんないよ…」

「リサちーほんとウブだよね。あれでしょ、手を握るだけでもるんっ♪とするタイプでしょ」

「か、かな。あ、あはは」

そうやって誤魔化せてない誤魔化しをするリサちーだったけど、ユウくんが男子たちを振り切って教室に戻ってきた時に変な反応をした。今まで通りならキラーンって感じなのに、どこかシューンって感じ。

引っかかりを感じたあたしは、リサちーの頬を両手で挟んで目を覗き込むことにした。いきなりなこと目泳いでたけど、少ししたら真っ直ぐ見返してくれた。…いいね、そうしてくれる方が助かるよ。

「ヒナ、なにしてるの？」

「リサちー、あたしの質問に答えてね」

「え？」

「昨日あの後、藤森くんと何かあった？」

「何もなかったよ？途中まで一緒の道で、別れてからはあたしスタジオに行っただし」

「じゃあ…お姉ちゃん何話したの？」

「っ!?!」

(これか)

ユウくんとは何もなく、その後 Roselia の練習だけなのに今日そんな反応したってことは、ユウくんのことを誰かと話したということ。そして Roselia メンバーならお姉ちゃん以外ユウくと接点がない。

リサちゃんがお姉ちゃんから話を聞き出したとは考えにくいから、お姉ちゃんの方からリサちゃんに声をかけたのかな。……お姉ちゃん、いったい何を考えてるの？いや、それは話の内容を知ってからじゃないとね。

「あ、あたしは特に何も話してないよ？」

「目が泳ぎまくってるよ？リサちゃん」

「け、けど本当だから」

「じゃあお姉ちゃんの話聞く役になってたわけだ。…お姉ちゃんは何をリサちゃんに話したの？リサちゃんは何を知ったの？答えてよね」

「あ、あたしは…」

「氷川、リサをいじめてやるな」

「…別にいじめてないよ。友達をいじめるわけ無いじゃん。あたしはリサちゃんから話を聞きたいだけだから。藤森くんは関係ないでしょ？」

「たしかに関係ないが、リサはそれで困ってるだろう？それと、もうすぐ HR が始まるぞ」

「…わかったよ。ごめんねリサちゃん」

「ううん。大丈夫だから」

あたしはリサちゃんから手を離して、謝ってから前を向いて座った。

ユウくんも自分の席に戻ったから、あたしはそれを見てからリサちーに小声で話しかけることにした。

「絶対に話してもらおうからね」  
「っ！」

逃さないよ、リサちー。これも必要なことなんだからね。

## 10話

「今日の内容はここまでだ。授業の復習ちゃんとしとけよ。来週に小テストやるからな」

「だってさ、雄弥」

「別に問題ないだろ」

「さすがだね」

「お前もだろうが」

「あはは、なんのことやら」

「オツシヤ！昼休みだ！」

「藤森、覚悟しやがれ！」

「何回でも挑んでやらあ！」

こいつらはこの情熱を他に向けることはできないのか？今日も今日とて窓から出ようとしたが、電話がかかってきたためそれはやめることにした。

「誰から？」

「結花」

「そうなんだ。どうしたんだろうね？」

「さあな。とりあえず出るか」

「こいつ…今井さんがいながら他の女と」

「この前の子といい、いったい何人彼女作れば気が済むんだあー！」

「その子はたしか山吹さん！」

「そうその子だ！」

「それはともかく！これは捕まえるだけでは生ぬるいわ!!」

「裁判じゃあ！」

「死刑じゃあ！」

うるさい奴らだな。……あ、スピーカーにでもしとくか。それで黙るだろうし。ってか、電話が終わるまでは動かないって、変なところで

律儀だな。

「もしもし?どうした?」

『お姉ちゃんの特製弁当どう? いい出来でしょ!?!』

「いや、まだ見てないからわからないんだが…」

『ええー!早く食べてよ!』

「お、お姉様、だと」

「声しかわからないが、美少女なのはわかるぞ」

「俺…紹介してもらおうかな」

「抜けがけだど!?!」

「そんなの許さねえぞ!」

「テメエら表出やがれ!!」

「」「ウオオオー!!」「」

『…元気なクラスだね』

「特殊なだけだ」

(誰が紹介なんぞするか)

『あ、そうそう。朝伝え忘れてたんだけど。私今日バイトあるから、ご飯は何か食べといてね。…食べといてね!!』

「2回も言うな。ちゃんと食べるから。それに俺も今日バイトあるし」

『お姉ちゃんそれ聞いてないよ!』

「俺も伝え忘れてたからな。お互い様だな」

『むうー。あ、でも雄弥と一緒に過ごしたことだしいつか♪』

「はいはい。…それじゃあ切るぞ。弁当食べたいしな」

『感想言ってからにしてよ!』

「…わかった。ちよつと待ってろ」

鞆から弁当を出して机の上に広げる。今日は男子たちが勝手に消えたから、教室で食べることができなのだ。久しぶりに教室で食べるなあ、なんてことを思いながら弁当を見ると、なんとも女の子らしい弁当だった。

『どうどう?』

「…可愛い弁当だな」

『でしょ!雄弥に喜んでほしいなって思ってたさ。あ、でも栄養とかカロリーも考えてるからね!まだまだ成長中の体なわけだし、ボリュームも多めだよ!』

「そうだな。…ありがとう結花」

『どういたしまして♪味の感想も欲しいかな』

「…美味しいよ。結花が作ってくれる料理の味、好きだよ」

『えへへ♪そっかあ、そっかあ♪』

「そろそろ切るぞ。ずっと電話ってわけにもいかないし」

『うん!それじゃあまたね!』

「…2人って付き合ってたっけ?」

「愁、お前頭がおかしくなったのか?俺達姉弟だぞ?」

「いやあー。今の会話はね。ま、なんでもいいけどさ」

変なことを言ってくる愁を軽く流し、結花が作ってくれた弁当を味わう。結花が時間をかけて作ってくれたのがよくわかる。結花に感謝しながら味わうも、箸はよくすすんでいたようで、すぐに食べ終わってしまった。

弁当をしまい、帰ってきた男子に姉を紹介してくれと頼まれたのを一蹴すると、結局逃げ回る羽目になった。…：：：：そういや今日リサと食べてないな。

~~~~~

…：今日、雄弥くんとお昼を食べられなかったなあ。まあ日菜に捕まっていたからなんだけどね。紗夜からどんな話を聞いたのかを全て話すことになった。紗夜から聞いたことは、雄弥くん達とどういう仲だったのかについて、紗夜が過去にどう想っていて、今はどうなのかを聞いた。…いや、聞かされた、かな。だって、その話を聞いてあたしの

胸は……こんなに苦しいんだから。

「…最近浮かれてたからその罰なのかな」

「リサさーん。おはよーございま〜す」

「モカ、おはよう☆」

「……?…そういえば今日新しい人来るみたいですよ〜」

「え、そうなの?そんなの言われてたっけ?」

「言われてないですよ〜。モカちゃんも昨日のバイトで知りまし  
たし〜」

「そうなんだ」

新しい人、か。いったいどんな人なんだろ。今日のメンバー的に教えるのはあたしになりそうだし、話しやすい人だったらいいな〜。

順番に着替えてからタイムカードを押してバイトスタート。新人さんが来るのは1時間後らしいし、今のうちに何を教えるか考えとこ  
かな。

「そういえば藤森先輩っていい人らしいですね〜」

「あれ?1年生の方でも話題になってたりするの?」

「そりゃあなりますよ〜。転校生ってだけでも話題になるのに、あの  
人となりですし、最近はよく走り回ってますし」

「あー、アハハ!たしかに話題にならない方がおかしいね!」

「今話題なのは、リサさんと付き合ってるんじゃないかってこと  
ですけどね」

「っ……。なんでそんな話になるのかな〜?」

「…よく一緒にお昼食べてるじゃないですか〜。屋上に行った子とか  
も、『甘酸っぱい雰囲気がい〜』とか言っていましたし〜。少なくとも、  
うちのクラスではお似合いだ〜ってなってますよ〜」

「そ、そうなんだ…。あたし達は付き合ってるわけじゃないんだけど  
ね」

「……な〜んだ〜。ざ〜んね〜ん」

…モカは優しいよね。絶対あたしの様子がおかしいってことに気づいてるのに、踏み込んでこないし。話の内容も当たり障りないようにしてくれてる。今だって話題を変えてバンドの話になってるし。

あたしは……、なんだろうね。…苦しいや、紗夜の話聞いたから？日菜にありーいう風に詰め寄せられたから？…わかんないや。わかんないよ、雄弥くん。あたしに教えてよ。どうしたらいいの？

「おはようございます」

「おはようございます。って、わく、噂をすればなんとやらですね。まさか藤森先輩が来るなんて〜」

「……え」

「ん？なんか話してたのか？」

「それは乙女の秘密でーす」

「ならいいや」

「おー。追及してこないのは好評価ですよ〜」

「ありがとう」

モカとすぐに打ち解けちゃった。モカって内向的ってわけでもないけど、そこまで社交的でもないのに…。雄弥くんとは相性がいいのかな。……あたしって必要なのかな？

「リサ、どうかしたのか？」

「へ？ううん。なんでもないよ」

「……そうか」

「うん。…それじゃあ早速だけど、やること教えるね」

やっぱりモカとは相性良さそうだね。お互い踏み込むタイプじゃないから、すぐに距離感を掴めたんだろうね。…あたしのことも聞いてこないし。



「とりあえず今日はレジ打ちでも覚えてもらおっかな。すぐに覚えれるならレジ打ち以外にもその都度教えるってことで！」

「わかった。よろしく頼む」

「うん！」

不思議だなあ。雄弥くんのことを考えたり、昨日今日あったことを思い出したりすると苦しいのに、雄弥くんとかうやって一緒にいるとすごい気持ちがおもしろい。嫌なこと何かも忘れられる。…ほんとに…どうしようもないね。

「それじゃあ3人も上がってー」

「「お疲れ様です」」

…もう終わっちゃった。いつもより終わるのが早く感じたよ。それと、終わるのが嫌だな。雄弥くんとももうお別れってことだもんね。

「それじゃありささん、雄弥さん、お疲れさまです」

「お疲れ様々…ってモカ、いつの間にか呼び方変わったの？」

「わりとすぐですよ？すぐに打ち解けれちゃうのもモカちゃんの魅力ですかね」

「あー、そうだね」

「むうー。ま、いいでしょう。それじゃあまた明日」

「またね☆」

モカが先に帰って、次にあたしが着替える。雄弥くんは何やら結花と話してるみたい。内容は聞かないようにしてるからわかんないけど。

「雄弥くんおまたせー。着替えなよ」

「わかった。それじゃあ結花またな」

「なんの話してたの？」

「何時頃に帰れるかって話だよ。…リサ少し待ってもらっていいか？」

「え？うん、いいよ。元からそのつもりだったし」

「悪いな。すぐに着替える」

雄弥くんは更衣室に入って、本当にすぐに着替えた。2人揃って店を出て並んで歩いていく。…雄弥くんの家の場所は知らないんだけど、方向一緒なのかな？

「雄弥くんの家の方向ってこっちななの？」

「いや違うぞ」

「…ええ!?!」

「言ったら？リサに待っていてほしいって。少し話でもしようかと思っただけ。…それはそうとリサ。いつもより距離近くないか？」

「…そ、そうかな？そんなことないと思うんだけどなあー」

「…もしかして暗いの駄目なのか？」

「あ、あはは、…うん。実は」

「…そっか。それなら、これでいいか？」

「！…うん」

雄弥くんがあたしの手を握ってくれて、あたしは心がすっごい暖かくなった。それと同時に寂しさもあるんだよね。…だって、あたしのこの気持ちは報われないものなんだから。

「…雄弥くんはさ、…なんでそんなに優しくしてくれるの？」

「？…そう言われてもな、これが素だから」

「でも、嬉しいけど…だけど…紗夜がいるでしょ？」

「!!」

「…付き合ってるわけじゃないのは聞いている。過去に何があったのかは知らないから、今なんで距離を取り合ってるのかわからないけど。

…雄弥くん、紗夜のこと、…日菜のことも好きでしょ？」

「…まあな」

「…っ」

「でも、今はわからない。いや、わからなくなった、だな。話すことはできないけど、あのことがあったから…日菜とは距離を置くことになったし、紗夜に会うのも怖いな」

「…ぎ…いで」

「リサ？」

「ふぎけないでよ!!」

「っ!!」

あたしは思わず叫んでた。もう限界だ。紗夜の話聞いて、日菜に詰め寄られてただけなのに、意外とあたしは弱いんだね。一度口を開いちやったらもう止まらない。すべてを吐き出そうと言葉が続いていく。

「なんなの!?!みんなそうやって距離を取り合って!全然向き合おうとしないで!逃げ続けて!あたしの気持ちも考えてよ!あたし…あたし…雄弥くんのが好きなのに!そうやって3人で固まっちゃってさ!あたしにどうしろっていうの!」

「…リサ」

「もう知らない!あたしにもう関わらないで!これ以上あたしを苦しめないでよ!!」

「リサ!」

あたしは走ってこの場からすぐにいなくなろうとした。けど、そうはならなかった。

雄弥くんに止められたから。

「離してー」

「リサ…ごめん」

「…なんなの、ほんと…さ…みんな…なんで」

あたしの目から涙が溢れてくる。雄弥くんに後ろから抱きしめられて、その優しさも温もりも、今じゃ…辛いよ。

「リサを追い詰めることになってるとは思ってたなかった。…ごめんな、リサを巻き込んでるよな。…ほんとにごめん」

「あたしは…」

「リサが嫌なら、明日から距離を置くから」

「ちが！…あたし…あたしは」

「俺の我儘を聞いてもらえるなら、これからも変わらずにリサといたいんだが、…強要はしない」

「…わかんない。わかんないよ…、あたしも雄弥くんと一緒にいたいけど…でも」

でも、どれだけ一緒にいても、あたしは紗夜に勝てる気がしない。2人が一緒のそこを見たことはないけど、想像しただけでもお似合いなのがわかる。そこに日菜と結花もいて、4人で過ごしてる姿を簡単に想像できるし、それが自然な感じがするから。

…うん。わかってる。あたしのこれは絶対に実らない。だから、あたしは今のこの昂ぶりをひとまず鎮めるとしよう。体の向きを変えて雄弥くんと向き合う。心配してくれて、申し訳なさそうにしてる雄弥くんのその顔を見つめる。

瞳を見つめて、それに吸い込まれる感覚に陥る。あたしはその感覚に従って、顔を近づけて…

「……リサ」

「…えへへ…やっぱ恥ずかしいね。…でも、あたしの初めてだからね？」

「破壊力ある言葉だな…」

あたしの顔はきつとすごい真っ赤になってるんだろうね。…でも、雄弥くんも赤くなってるし、なんか嬉しいね♪

「リサ。ありがとう」

「え？キスのこと？…くっくっ」

「照れるなら言うなよ…。いや、そつちじゃなくて、リサのおかげで決意ができた」

「…あたしのキスは安いつて？」

「そんなこと言っていないだろ？そんなホイホイ他の男にもしてたら引くぞ。それにそんなことしてほしくない。…つて話がそれだな。…Roseliaのライブが今度あるんだろ？行くよ」

雄弥くんにそうやって言われると、彼女になった気分だよ♪…それにしても、そつか。ライブに来てくれるんだ。紗夜と向き合うためなんだろうけど、それでもあたしの姿を見てほしいって思っちゃう。良くも悪くも、次のライブはいつもとちよつと違うね！

……気持ちを鎮めるためのキスだったのに、全然逆効果だったよ。

## 11話

「沙綾、雄弥くん。結花ちゃんが来たことだし、2人とも朝ご飯食べて学校に行きなさい」

「はい。雄弥さん、行きましょ」

「そうだな。剛さん、千紘さん、それでは失礼します」

「おう！」

俺が朝から”やまぶきベーカリー”でバイトしている時は、山吹家で朝食を食べさせてもらっている。結花が「寂しいから」と言い、千紘さんも「それなら朝ご飯をうちで食べなさい」と言ったことで、結花も一緒に食べるようになった。

沙綾と一緒にリビングに行くと、結花が純と紗南と一緒にご飯をついでいた。すぐに打ち解けたらしい。特に紗南のなつき具合がすごく、沙綾が嫉妬したほどだ。

「あ、おねーちゃん、ゆうおにーちゃんおはよー！」

「おはよう紗南。結花さんのお手伝いしてたの？偉いね！」

「えへへ〜」

「純もありがとう」

「うん！」

「雄弥おっはよー！」

「いきなり抱きつくくなって言ってるだろ」

「えへへ〜、ゆうや〜♪」

「聞いてねえし…」

「あ、あははー。とりあえず、ご飯食べましょっか」

沙綾の言葉に頷き、強引に結花を引き剥がして椅子に座る。沙綾の横に座るのが定位置となっていて、向かい側の正面に結花、その横に純と紗南が座る。5人でいただきますを言って食べ始める。

食べながら純や紗南の話を聞くのが定着し、今日も2人の話を聞か

せてもらう。年の離れた兄弟は世話が大変と思っていたが、こうやってると沙綾の気持ちもわかってくる。全然しんどくない、むしろ元気を貰える。

「ごちそうさま」

「にーちゃん食べるの早いよー」

「時間が来るまで話は聞くから、純も慌てずにご飯食べるよ」「ぜったい待ってて！」

「ああ」

「ふふっ、純は雄弥が好きだねー」

「うんー！」

「けど、私のほうが雄弥のこと好きだからね？」

「うん…？」

「何張り合ってたんだ…」

10歳近く離れてるのになんで張り合うんだ…。半分は冗談のつもりだろうが、半分はガチで言ってるからなく。

沙綾も結花も食べ終わり、純と紗南が食べ終わるのを待つ。俺はその間に食器を洗う。沙綾も学校の準備は終わってるようで、話の輪に加わっている。しばらくしたら純と紗南も食べ終わり、食器を洗う。その後はまた5人で会話を楽しみ、時間が来たので家を出た。

「年が離れてる姉弟もいーねー！」

「あはは、あげませんよ？」

「ちえー。…ま、私には雄弥がいるから十分…ううん、十二分だよ！」

「純と紗南だつて負けてません！」

「…なにを言い合ってるんだ？」

「雄弥（さん）は黙ってて（ください）！」

「…わけわからんな」

軽く止めに行ったら逆効果だった。こんなことあるか？……………あ

るか。まあ、止めると言っても、2人はこの会話自体楽しんでいるようにだし、本気で止めるってわけじゃないんだけどな。

「2人が大きくなれば、一緒に沙綾のライブ見にいけるのにね〜」

「私も来てほしいって気持ちはありますけど、ちよつと恥ずかしいなあー…なんて」

「身内がいるってなると、緊張の仕方変わるよね〜。その気持ち分からないけど」

「わからないのかよ」

「だって身内が見に来たことくない？強いて言うなら紗夜と日菜ぐらいじゃん」

「たしかにそうだな。…結花って緊張することあるのか？」

「あるよ！雄弥は私をなんだと思ってるの！」

そう言われてもな、俺が知る限り結花は緊張することないし。…あ、俺にこうやって思われること自体がプレッシャーになるのか。気をつけないとな。

俺と結花がじゃれていると、沙綾が目を丸くして固まっていた。そんなに驚くようなこと、今の会話であったか？俺がバンドを組んだことは前に言ったはずだし。

「沙綾〜、どうしたの？」

「へっ、や…あの、結花さんってバンド組んでたんですか？」

「あれ？前に言わなかったか？」

「雄弥さんがバンドを組んだことは聞きましたけど、結花さんのことは聞いてないですよー！」

「そう……だったな。たしかに言っただけだったな」

「私達はね、同じバンドだったんだよ？Augenblickっていう5人組のバンドで、私がボーカル、雄弥はベースだったの」

「そうだったんですね。…聞いてみたいです」

「…映像化してたっけ？」



「いや、あの時はまだ中学だから、映像とかはないな。CDなら探せばあるんじゃないか?」

「やっぱそんなとこだよね」

「え、雄弥さん達って自分では持ってないんですか?」

「ないな」

…沙綾が驚いているが、持ってるもんなのか? いや、待てよ、たしか原曲というか、1番最初に焼きこむやつは持ってたはず…。とりあえず、今度それを貸してみるか。

「私は持ってるけどね!」

「持ってるのかよ!」

「当然でしょ? というか、雄弥が持ってないのも私が買うからっていう理由じゃん」

「…そうだったか?」

「そうですー」

「えと、今度お借りしてもいいですか?」

「いーよー。明日には渡すね!」

「ありがとうございます♪」

とりあえず、CDは結花が渡すつてことで解決だな。…懐かしいな。5人で練習して、本番じゃあ止められることがないからって好き勝手にやってた。その度にスタッフにも会社にもライブの後に言われるけど、それをマネージャーが豪快に笑い飛ばして黙らせた。

(あいつには助けられてばっかだったな。今はどこで何してるんだろうか…)

「雄弥?」

「ん?」

「どうかしたの?なんか考え事?」

「いや、懐かしいなって思ってただけだ」

「…そうだね。私が雄弥を引つ張り回して、芸能界にも同じバンドにも入ってもらったんだもんね」

「そういう経緯なんですね。他の方とは後から知り合ったんですか？」

「うん。芸能界入つてすぐにギターの子と知り合つて、私と気が合つたから誘つたんだよ。それで、その子がドラムとキーボードの子を連れてきて、結成されたんだ」

「へ〜」

あのマネージャーの手のひらの上で転がされてる気しかしてなかったがな。それで、嫌がらせでもしてみるかってなってライブで好き放題したら「最高だな！もっとやれ！」って言われて、その時に敵わないと判断したんだつたな。

「話し込んでるとこ悪いが、俺はこっちだから」

「あ、もうここまで来たんだ。雄弥、行つてらっしゃい☆」

「ああ。結花も沙綾も行つてらっしゃい」

「はい！行つてきます！」

「…あ、そうだ。結花」

「なにになにー？寂しいって？」

「言つてないだろ…。…今度のRoseliaのライブ、行くよ」

「……………え…………？」

~~~~~

「結花ちゃんおはよう」

「おはよー、花音」

「…？何かあつたの？」

「へ？なんで？」

「え、ううん。なんか結花ちゃんが悩んでそうだったから…。何かあつたのかなつて、勘違いだったらごめんね！」

「…ううん。合ってるよ。ちよつと弟の発言にびつくりしちゃって」「弟くんの？…もしかして、好きな人ができた…とか？」「ううん、全然違う…はず…あれ？…まさか、え？…いや、でも…え？」

「ゆ、結花ちゃん？…お、おーい」

雄弥に好きな人が？…いや、だってあの2人が…：紗夜と会うのを気まずく思ってるはずなのに見に行くことは、Roselliaのメンバー？…でも…

「おはよう花音。…結花は何してるのかしら？」

「それがね？ー」

「ーなるほど、結花！」

「んー？あ、千聖じゃん。おはよー」

「ええ、おはよう。何をそんなにブツブツ呟いてるのよ」「だってー」

「この年頃ならおかしなことじゃないじゃない」

「それはそうなんだけどさー」

「その真偽は本人に聞くしかないんじゃないかしら？」

「…それもそうだね。帰ったら聞いてみるよ」

Roselliaのメンバーで雄弥と知り合いなのって…、いやでも、紗夜が言うにはボーカルの子も同じ学校だし…。いやいや、雄弥は自分から輪をグイグイ広げるタイプじゃないし…。

あーもう！考えるのヤメヤメ！帰ってから聞けば分かることなんだから！…それよりも、このことを紗夜に伝えるかが問題だね。言ってライブに影響出ちゃうのは避けたいし、かといって何も知らないで、ライブ中に知ってもそれはそれで…。…難しいなあ。

別のことを考えようとして、結局別のことでも悩んじゃってたらいつの間にか授業が始まった。内心慌ててたけど、いかにも「ボーツとしてませんよ」という風に教科書とノートを机に広げた。…千聖は

なんか言いたそうな目で見てくるし、花音にはなぜか心配そうな顔された。失礼だなあ、もう。

「結花ちゃん、今日はお昼どうするの？」

「あ、今日は紗夜と食べるって約束してるから、また2人で屋上かな。話したいこともあるし」

「そうなんだ。うん、わかったよ。それじゃあまた後でね」

「うん。明日は一緒に食べようね！」

「ふふっ、もちろんいいよ♪」

紗夜がいる隣のクラスに行つて、一緒に屋上へと向かう。そういえば燐子も Roselia のメンバーなんだし、今度は燐子とも一緒に食べようかな、なんて考えながら。

「いっただつきまーす☆」

「いただきます」

「んく♪やっぱり雄弥の料理は美味しいなあ〜♪」

「結花も美味しそうに食べるわね。あなたがそうやって食べてると、雄弥くんも作り甲斐があるんじゃないかしら？」

「そうなのかなー？」

「きつとそうよ。結花も雄弥くんが美味しいって言うってくれるともっと頑張ろうってなるでしょ？」

「たしかに！…あ、でも今日は私の分しかなかったなあー」

「え？そうなの？」

「うん。今日は作ってきてくれる人がいるから〜って言うててさ」

「…そう」

「なにになにー？焼きもち？」

「なっ！…ち…違うわよ!!」

そんな反応されたら全然信用できないよ。羽丘の方で、雄弥とそんなやり取りする人物の心当たりが1人しかないけど、…紗夜はそ

こまで頭が回ってないし、黙つと。」

「……信じてないわね？」

「そりゃあそんな顔に顔を赤くされたらね？」

「うっ、…違うのよ」

「はいはい。そういうことにしときます」

「もう…」

昼休みの時間を使って、紗夜を色々といじってみたけど、…これはライブのことは黙っておこうかな。この判断が正しいとも思えないけど、言うのもベストって思えない。…雄弥に押し付けるってことにだけはならないようにしましょう。私は雄弥のお姉ちゃんなんだし、なによりも…。

もう二度と雄弥が一人で抱えこまないようにしなくちゃ。

## 12話

教室に入って荷物を片付け、今日も追いかけられるかと様子を見ていたが、妙なことに今日はそういうことはなさそう。平和でいいのだが、肩すかしをくらった感じがするな。…いかん、毒されてきてる。

「おはよう雄弥。今日は追いかけられることもなさそう。良かったね」

「おはよう愁。それは平和でいいんだが、…あいつらの様子がなんかおかしい気がするんだが……」

「ああー。それは今日体育祭の種目が発表されるからだ。体育祭つてある意味アピールポイントなところもあるし」

「夢見すぎじゃね?」

「そこは気にしないでいいんだよ」

「…そうか。それで、種目が発表されるってのはどういうことだ? 体育祭でやることって毎年大部分が一緒だろ?」

「普通はね。けど、今年は4割方変わるらしいよ」

「は…?」

4割? それってもう改革と一緒にやねえのか? リニューアルと書いてもいいレベルだぞ。…てか、そもそもそんなに変わるほど種目を思いつくのが凄いな。

「今年の生徒会がイベントの改革に力を入れるらしくてね。1学期の終わりにも案を募集してたんだよ。…採用されるのがあるかは別として」

「…変なの入れてるやつが多かったのか」

「欲望を丸出しだったね…」

馬鹿ばつかなのか? ……馬鹿しかいなかったな。ま、そのことは、もうどうでもいいでしょう。ひとまず、男子たちが落ち着かずにソワ

ソワしてる理由はわかった。4割を変えられるとなると、自分が得意なやつがあるか分からないからな。

「全員席につけー。HR始めるぞ〜。そして、周知のことだろうが、体育祭の種目も発表する」

「「ウオオオオーー!!」」

「待ってました!」

「1億年と!」

「2000年前から!」

「「待ってました!!」」

「うるせえー!!!次騒いだらこっちで勝手に決めるぞ!!!」

「先生、HRを始めましょう」

「……まったく、現金な性格してるよな」

いやいや、先生も先生で今の楽しんでたでしょ。騒ぎ出すの分かっててわざわざ体育祭の話出したでしょ。今日は先生の授業が最初にあつて、いつもその用意も持ってきてるのに、今日は持ってきてない。つまり、HRと授業の時間使って体育祭のこと決めるってことだな…。

「……愁」

「どうしたの?」

「体育祭のを決めるの、早くないか?まだ先だろ?」

「それは生徒会の都合だね。改革しすぎなせいで、ほぼ全部生徒会が準備するんだよ。人手が足りないから、それなら決め事を先にやっちゃおうって」

「…なるほど。それにしても詳しいんだな」

「ん?言ってなかったっけ?僕生徒会の副会長だよ?」

「…初耳だわ」

そりゃ詳しくて当然だな!それで全然知らなかったら何してん

だって話になるからな！…で、愁がここまでの改革をするとは思えないし、言い出しつぺは会長で、他のメンバーも賛同したってどこか。

「では！これより種目の発表を行う！各自一覧を載せたプリントを見て、出たいものを決めろ！」

「…先生張り切ってんなー」

「イベント好きな先生だからね。それに…」

「優勝すればビュツフェだぞ！今年の景品はビュツフェ！しかもいい値段するようなどこだ！」

「マジっすか先生!!」

「これは負けられねえ!!」

なるほどな。それなら、たしかに先生がやる気出すのも分かる。こう言っちゃあ聞こえが悪いが、生徒の頑張りで先生は美味しい食事になりつけるからな。それで、この景品を聞いて男子だけじゃなくて女子もやる気を出してるってわけか。

「それじゃあプリントを配るぞー」

さてと、どんな競技があるのやら…。

~~~~~

昼休みになり、俺はいつものようにリサと弁当を食べるために屋上に来た。リサが先に屋上において、場所を指定するのもここ最近で定番となっているパターンだな。そんな「いつも」の中でも今日は少し違うことがある。それは、

「はい！雄弥くんのお弁当！口に合うといいけど…」

「ありがとうリサ。大丈夫だろ、リサは料理が得意って聞いたことあるし」



「あ、あははー、得意ってわけでもないんだけど…。それにハードルが上がったような…」

「そうなのか？…見た感じでも、料理が上手い人つてのが伝わってきてるが…」

「そ、そう？」

照れが半分、緊張が半分って具合にはにかむリサを横目にさっそく一口いただくことにした。弁当と言えば定番の卵焼き…。

「ど、どうかな？」

「…美味しい。味も好みのやつに近いな」

「そうなんだ。よかったあ♪」

「リサも自分の分食べろよ」

「うん！美味しいって言ってもらえて安心したから食べるね☆」

本当に、リサが作ってくれた弁当が美味しい。お世辞なんて一切ない。リサの料理をもっと食べてみたいぐらいだ。

味付けのことを聞きつつ箸をすすめる。どうやらリサは味付けにも拘ってくれていたみたいで、食材を活かした料理になっていた。リサと料理の話をしていたら、リサが「自信無くしそう…」なんて言っていたが、どうか自信を無くさないでほしい。さっきも思ったことだが、リサの料理は本当に美味しいのだから。

「ごちそうさま。ありがとうリサ」

「お粗末さま♪いい食べっぷりだったね？」

「美味しかったからな。また食べたいぐらいだ」

「そう？ならまた作ってくるよ？」

「…うーん、何度も作ってもらうのは気が引けるんだが…」

「ならさ！お弁当を交換ってのはどう？」

「お互いに相手の分をつくってくるってことか？」

「そうそう！それならやつてもらうだけ、ってことにはならないわけ

「だしさー！」

「…そうだな。ならそうしてみるか」

「うん♪さっそく明日ね！」

「ああ。わかった」

弁当の交換か…。これは今までやったことがないな。…どういう弁当にするか悩むなあ。リサも悩みながらやってくれたってことか。頭が上がらないな。

「…そういやリサ」

「ん？なあに？」

「よくあの競技を引き受けたな」

「あの競技って…あー、仮装競争のこと？」

「そう。仮装競争自体はいいんだが、リサがやることになった仮装が、な…」

「たしか…さ…さくばやす？だっけ？」

「サキユバスだな。…ほんと…よく引き受けたな」

「え？だって仮装するだけだし…」

「…サキユバスを携帯で調べてみる。男子たちが熱狂してた理由が分かるぞ」

リサは首を傾げながら携帯を取り出して調べ始めた。しばらく動かしていた指が止まった。顔を見てみるとリサの顔が見る見るうちに赤く染まっけいき、目も泳ぎ始めた。

「リサ大丈夫か？」

「こ、こりえって…」

「だから言っただけだ…」

「うう…こんなの…ムリだよお」

「やっぱりな」

「…雄弥くん、たすけてえ。あたし…これは…」

「…競技の変更は原則できないって言われたろ？」  
「でもお……こんなの…ヤダよお」

目に涙を貯め始めたりサを落ち着かせるために頭を撫でる。それでもリサは落ち着かないみたいで、瞳もずっと揺らいだままだ。

「…なんとかしてみる」

「え…」

「仮装競争自体は俺も出てるからな。変更はできないだろうが、本番でどうにかしてみる」

「どうにかって…?」

「リサには、そのまま少しの間恥ずかしい思いをさせてしまうが、…少しだけ堪えてくれるか?」

「…うん。…信じていい?」

「ああ。任せろ」

「うん…」

安心できたからか、リサは瞳を閉じて肩にもたれかかってきた。当然ながら結花とは違う温度、髪の毛の匂いに少し戸惑ったが、こうやって信じてくれたのならそれに全力で応えよう。そう決意を固めながらリサのフワリとした柔らかな髪を、時間ギリギリまで撫でることにした。

~~~~~

「雄弥くんまたね〜!」

「ああ。また明日」

「……2人って付き合うことにしたの?」

「何言ってるんだ愁?」

「いや…どこことなく2人の距離が縮まってる気がしたんだけど…、違うの?」

「付き合っていないぞ」

「…ふーん？」

なんだその「察してます」みたいな反応…。付き合っていないのが事実なんだけどな。妙な反応をする愁スルーして商店街へと足を運ぶ。今日はこつちでバイトだからな。

…リサと付き合うなんて、俺にはおこがましいことだ。前にリサに気持ちをぶつけられた時に、リサの想いも聞いたわけだが、結局有耶無耶にしてるんだからな。こんな半端な状態で答えを出すなんてしちやいけない気がする。

「それじゃ、僕はここで」

「ん？こことって…」

「羽沢珈琲店」だよ。頻度は少ないけど、たまにここの手伝いをしてるんだ」

「そうだったのか。また今度行かせてもらう」

「うん。ぜひ来てほしいね。良いところだから」

「そうなのか。期待しとくよ」

愁が店に入っていくところまで見届け、扉が開いたときに少し中を覗き込む。…なるほど、雰囲気もいいな。結花を誘って行くとしよう。

「あ、雄弥さん」

「お、沙綾か」

「この喫茶店に興味あるんですか？」

「少しな。一緒に帰ってた奴が今日ここで働くらしくてな、それで少し見てたんだよ」

「あー、なるほど〜」

沙綾と肩を並べて歩き、やまぶきベーカリーへと入っていく。ここ

はフランクな場所で、制服とかはない。だから学校の制服の上からエプロンをつけて仕事をしている。

「今日は練習ないのか？ライブもうすぐだろ？」

「そうなんですけどねー。実はリーダーの子が補習になっちゃったのと、ギターの子が急用できたとかで無くなったんですよ」

「そうなのか。…補習って…」

「あ、あははー、いつもは大丈夫なんですけど、抜き打ちだったのでそれでやられちゃったみたいですよ」

「つまり、いつもは直前に詰め込むのか…」

「そうですね。でも、凄いい子なんですよ？いつも元気でいてくれて、私たちを引っ張ってくれてるんです！」

「へー？沙綾がそこまで言う子なら会ってみたいけど…」

「それはライブの日のお楽しみということですよ！」

「だよな」

明るくウインクをしながらそう言った沙綾が、その子やメンバーのことを大切に想っているのがよくわかった。以前少し気分が沈んでいたようだが、どうやら今は大丈夫らしい。

「そうだ！ライブのチケットがあるんですよ！後で渡しますね！」

「ありがとう沙綾」

帰り際に渡してもらったチケットは2枚。これなら結花と一緒に見にいけるな。沙綾もそこまで考えてくれてたらしい。…良い子過ぎるな。

## 13話

「雄弥なにしてんのー！早くしないと間に合わないよー！」

「何時だと思ってるんだよ…。ポピパがやる時間まであと2時間はあるぞ」

「何言ってるんの雄弥…。こういう時に差し入れを持っていくのは当たり前でしょ？」

「…そうかよ」

結花はこういう時いつさい引かないからな。こっちが折れるしかない。そんなわけでライブを見に行くための準備を済ませる。と言つてもチケットと財布と携帯ぐらいだがな。差し入れは結花が持つようだしな。

「それじゃあライブハウスに向かってシュツパーツ！」

「元気だな…」

「ポピパのもそうだし、Roseliaのも楽しみなんだもん♪」

「…そうだな」

「なにより、こうやって雄弥と2人でライブを見にいけるって思ってたからね☆」

それもそうなのだろうが、それ以外にも理由がありそうな気がする…。それもきつと俺関係の理由なのだろうが…。何だろうな。記憶を掘り返していき、思い当たるものがあることに気づいた。それはたしかに結花がここまで楽しそうにする理由だ。それがわかった俺は、鼻歌を歌い一歩先を歩いていった結花の横に行き手を繋いだ。

「どうしたの？」

「初めてだな」

「え…」

「ライブを見に行くこと自体、これが初めてだったなって。合ってる

だろ？」

「……。うん♪」

そうだ。思い返してみても、俺たちは一度だって観客側でライブ会場にいたことなんてない。いつだってステージの上に立って演奏する側だった。今日は、人生初の観客側だ。楽しませてもらうとうとう。

「雄弥はポピパのライブが終わったらどうするの？Roseliaのは最後まで」

「さあな。沙綾と話してるか、他のバンドのも見てるかだな」

「ま、そんなとこだよね」

「結花は？」

「ずっと見てるかな。気が変わったらRoseliaの控室に行ってるかも」

「自由だな」

「まあね♪」

結花らしいな。この自由奔放さにどれだけ助けられることか。それでいて他の人のことをしつかり見ているんだから、いよいよ非の打ち所がない。ま、こんなべた褒めなんて絶対に口にしないがな。調子に乗ることが分かってるから。

「いらっしやいませー。…ん？お客様の入店はもうしばらく後になるんですけど…」

「すみませーん。出演者に知り合いがいるのでその差し入れをと思いまして」

「あー、そういうことならいいよー。ちなみにどのバンドか聞いていいかな？」

（一気にフランクになったな…）

「ポピパとRoseliaです」

「そうなんだ。えと、これが店の地図になって、ポピパちゃんはこので、Roseliaはここだよ」

「ありがとうございます☆」

「リハーサルとかするだろうし、長居はしないであげてね」

「はい！」

(……んん!?今の2人つてもしかして!?)

教えてもらった部屋の場所を覚え、先にポピパの部屋へと向かう。扉に「Poppin' Party」と紙が貼つてあるし、ここで間違いないな。扉をノックすると中から元気な返事が聞こえ、すぐに勢いよく扉が開けられた。

「…雄弥大丈夫？」

「…なんとか」

「わわっ!ごめんなさい!」

「だからいつも勢いよく扉開けるなって言ってるだろ!」

「だってえー、お客さんが来てくれたって思うと嬉しくて…」

「それで怪我させたら元も子もねえだろ!」

「香澄ちゃんも有咲ちゃんも落ち着いて…。お客さんが来てるんだよ?」

「あ、そうだった!ホントにごめんなさい!」

「いいよ、怪我したわけでもないし。悪気がなかったのもわかったし」

「ホントですか!?!やったー☆有咲!許してもらえて!」

「その言い方だとアタシがやったみたいになるじゃねえか!」

「初めまして花園たえです」

「何自己紹介始めてんだ!」

「とりあえず中に入ってもらったら?」

「そうだよ有咲。お客様に立たせっぱなしなのは失礼だよ」

「このっ、くっ!!」

なるほど、沙綾がこのバンドを好きになるのがよくわかる。こんな



に明るいとところだと、嫌なことなんてすぐに吹き飛ばしてくれそうだしな。

中に入れさせてもらい、用意してもらった椅子に結花と並んで座る。沙綾が驚いてたんだが、俺たちだとわかってなかったのか…。

「お2人は私たちのファンですか!？」

「質問がおかしいだろ! こういう時は自己紹介からだろ!」

「あ、そっか」

「チョココロネって美味しいですよね…」

「りみ! なんの話してるんだ!」

「沙綾とはどういう関係ですか?」

「おたえも変なこと聞くな! ……って、え?」

「ええ!」

「? みんなどうしたの?」

「どうしたのって…おたえお前何言って」

「え? だって沙綾の知り合いの人でしょ?」

「そ、そうなのか?」

「あははー、…うん。そうだよ」

「もしかして彼氏さん!？」

「香澄! 目を輝かせるな!」

あの子、さつきから一人でツツコミしてるけど、タフだな。香澄って子とおたえ(たえって言ってたからあだ名かな?)がボケ側だし、りみはマイペースになると手に負えないんだけど、ちゃんと相手してるの凄いな。

「あはは、残念だけど彼氏じゃないよ。この人はうちの手伝いしてくれてる、藤森雄弥さん。お隣がそのお姉さんの結花さん」

「よろしくね♪香澄ちゃんとは会ったことあるよね」

「あ! 覚えててくれたんですか! ありがとうございます!」

「どういたしまして」

「香澄ちゃん。いつ知り合ったの？」

「うーん、結花さんが沙綾と一緒に登校してて、その時かな」

「よくそこに入れたな…」

「えー？結花さんいい人だよ？私たちと同じ花女だし」

「え？そうなんですか？」

「うん。2年A組だよ」

あ、女子トークが始まった。こうなると俺は会話に混ざれないし、傍観に徹するか。そう思っていると沙綾と目が合い、アイコンタクトで外に出ようと誘われた。ここにおいても話に混ざれないし、もちろん承諾した。

「結花、ちよつと外に出てくる」

「うん。行ってらっしゃい。あ、ついでに飲み物買つといてー」

「炭酸か？」

「よくわかつてるね」

「じゃ、行ってくる」

「香澄、私もちよつと出てくるね」

「ならわたしも！」

「香澄、ダメだよ」

「えーなんでー？」

「私は香澄と話したい」

「わかったー！わたしもおたえと話すの楽しいし！」

…へー？あの子、ただの天然かと思ってたけど、意外と凄い子なのか？…あ、でも香澄が単純っていうのもあるのか。ま、なんでもいいや。

先に部屋から出ておき、後から出てきた沙綾と一緒にスタジオの外に出る。ちよつとしたカフェもあるから、そこで飲み物を買って椅子に座る。

「悪いな沙綾。気を使ってもらって」  
「いえいえ、雄弥さんとこうして過ごすのも楽しいので♪」  
「そう言ってもらえると気が楽だよ」  
「ふふっ、どういたしまして？」  
「なんで疑問形なんだよ…」  
「なんとなくですよ♪」

両肘をテーブルにつき、両手の上に顎を乗せ、笑顔でほんとに楽しそうにしてる沙綾を見てると、こつちも気持ち明るくなる。気が沈んでたってわけじゃないんだがな。紗夜と向き合うとは決めたが、会ってどう話すかがまったく分からない。そこが引つかかっているんだ。

「…雄弥さん、何か悩みごとですか？」  
「え…」

「分かりますよ？雄弥さんが私を見てくれるのと同じだけ、私も雄弥さんを見てるんですから」

「ははっ、短い期間なんだけどな」

「そこは私の実力ってことですかね？お姉ちゃんだから細かいところまで見るようにしてるんです」

「そうなのか。…立派だな」

「ありがとうございます♪…それで、話してくれますか？」

「…沙綾はさ、約束を破った相手と会うときってどうする？もちろん謝るってのは決めてるんだが、…なんか一歩踏み出せなくてさ」

誰とのことかは伏せさせてもらおうとしよう。流石にそこは、な。言葉にしてみると何やらチンケな悩みな気がしてきたが、俺からしたらそうでもないんだよな。

肘をつくのをやめた沙綾は、目を瞑り背もたれに体を預けた。沙綾なりに真剣に受け止めてくれてるようだ。

「……気持ちは何となく分かりますよ。…私も仲間を…友達を……裏切ったことがありますから」

「……え？……沙綾…が？」

「えへへ…、詳細は今伏せさせてもらいますけど、…気まずくて話すことなんてできませんでした。でも、香澄がそれじゃ駄目だって…、お互いの気持ちをぶつけなきゃ駄目だって。たしかに怖かったですよ。絶対に嫌われてるって、恨まれてるって思っていましたから。でも…結局は怖がってちや何も分からないですよ。勇気を持って、例え傷つくのだけど、向き合うと決めたのなら……ってすみません。私なんか雄弥さんに、こんな…」

「いや、いいよ。…ありがとう沙綾。…沙綾は強いな」

「そんなことないですよ。私はみんなが背中を押してくれたから、それで向き合えたんです。…なんなら私が雄弥さんの背中を押してあげますよ？…なんて…えへへ」

「十分だよ。もう十分沙綾には背中を押してもらってる。…本当にありがとう」

「ーっ。その笑顔はズルいです」

なぜか頬を赤くして目をそらす沙綾を不思議に思いつつ、そろそろ戻るべき時間になっていくことに気づいた。急いで結花に頼まれた飲み物を買って、沙綾と一緒に控室へと戻り、結花に飲み物を渡した。どうやらリハーサルはしないらしく、ライブを楽しむために今から精神面を調整するらしい。……さつきまでと何か変わったのか？

「結花…紗夜には最後に会うよ」

「…そっか。なら、差し入れもライブの後だね」

「ごめんな」

「ううん。逃げないってことはわかってるから。タイミングは任せるよ。…私も何か手伝ってあげたらいいけど」

「大丈夫だ。結花が側にいてくれるだけでも心強いから」

「ならよかった」

ポピパのライブはもちろん、その後の他のバンドのもいくつつか見るとしよう。そして、Roseliaのライブも。

紗夜に会う時間は刻々と迫っている。もう逃げたりはしない。俺は傷つけてしまった人に、ある意味日菜以上に傷を追わせてしまった人に、正面から向き合う。

## 14話

ポピパの子たちと別れて、私と雄弥は客席に潜り込んだ。前の方でもいいんだけど、雄弥の希望で後側にいることにした。

「前でもよかったんじゃない？見えにくいと思うよ？」

「いや、こつちの方がいい。あの子たちの演奏だけじゃなくて、ライブ全体を見たいから」

「なるほどね。…もう、純粋にライブを楽しんでもよくない？」

「そういう結花も細かなとこまで見るんだろ？」

「まあね。職業病ってやつかな」

「今は違うがな」

たしかに、今は職業病って言い方は当てはまらないね。じゃあ…癖かな、…：…一気にシヨボくなつた感じだよ。

そんなこんなで雄弥と取り留めもない会話をしていたら、ポピパのライブの時間になった。ステージ幕が上がるのと同時に始まるポピパの演奏。技術面はまだまだ課題がたくさんつとこだけど、そんなのを抜きにしても盛り上がる演奏だね。

「楽しそうに演奏してるな」

「うん。それがポピパの魅力だろうね。あんなに笑顔で演奏してたら、こつちも楽しくなっちゃうよ♪」

そう。ポピパの魅力はライブをしている本人たちだ。バンドが好きで、メンバーが好きで、ライブが好きで、一緒に楽しんでもくれるお客さんが好きで…、そんな溢れんばかりの”好き”という気持ち伝わってくる。プロだろうとアマチュアだろうと関係ない。この”好き”って気持ちがとても大切で、この気持ちがあるからこそ活動をすすめるんだ。

忘れちゃいけない、誰しものがこれを胸に刻んでないといけない。技

術の向上を目指そうとも、根源にはこの気持ちがあるのだから。これを忘れなかつたら何度だつて壁を突破できる。

「みなさんこんにちはー!! 私たち”Poppin’ Party”ですー!」

「香澄ってこういう時でも元気なんだね〜」

「ポピパの原動力らしいしな」

「私たちだつたらやっぱり疾斗かなー」

「そう思ってるのは結花だけだぞ」

「あれ?」

えー、絶対疾斗だよ。いろんなイベントの情報をかき集めて、私たちをいろんなところに連れてつてくれてたんだから。ライブの段取りもだし、野良でやるときもだし、遊びに行く時だつて、…ほら、やっぱり疾斗が中心だよ。

(結花のやつ、こんなこと思ってたんだろうな。我が強いというか、キャラの濃いメンバーが纏まつたのは、リーダーの疾斗以外が中心だったからなんだがな…。ま、いいや)

「沙綾もノリノリだね〜。うんうん、お姉さんは嬉しいよ」

「保護者か」

「沙綾はもう妹みたいな感じだよ。それに、雄弥も気にかけてたんでしょ?」

「…さあな」

「あはは、素直じゃないね☆」

沙綾も沙綾で抱え込んじゃうタイプみたいだしね、だからこそ雄弥も気にかけてるんだよね。…抱え込みすぎると心が疲弊しちゃうってことを知ってるから。

「りみもライブでなら自分を出せるようになったんだな」

「みたいだね。これはゆりさんも喜んだだろうな」

「そうだな。それも…あの子の影響か。みんなを引っ張って、それでいて支えてもらう。…いい関係性だな」

「だね」

うんうん、あの子たちもお客さんも盛り上がりすぎていいライブだね。技術が高いバンドとかはもちろん好きだけど、こうやってライブを全力で楽しむバンドも好きだな。

…あ、そうだ。帰る前に沙綾にCD渡さなきゃ。

~~~~~

ポピパのライブの後、感想を言い再度ポピパの控室へと足を運んだ。あとで電話するなり、明日話すなりでいいと思ったのだが、結花が「こういうのはすぐに行かなきゃ！沙綾だってその方が喜ぶから！」と押し切られた。ちなみに結花は今も他のバンドの演奏を見てる。…俺も見たかったんだが…。

「あ！雄弥さんだー！わたし達のライブどうでした!?!」

「香澄落ち着け！そんなグイグイ行ったら迷惑だろ！」

「いや、気にしないでいいよ。ライブ、良かったよ。みんなが楽しそうにライブしてるから、こっちも楽しくなった」

「そうですか？…えへへ」

「香澄ちゃんが…」

「おとなしくなった!?!」

「それより雄弥さん、沙綾の演奏どうでした？」

「ちよ！おたえ！」

「え？だって沙綾気にしてたじゃん」

「それも言わなくていいってばあ…」

おたえって、人のことをよく見ているんだろうが…、天然だから



ぶつ込むんだな。今だって、よくわからないが、沙綾が恥ずかしくつてるのを気にせずに沙綾のことを聞いてきてるし。

「それで、どうでした？」

「おたえは鬼か！」

「何言ってるの有咲。私は人間だよ？」

「例えで言っただけだな!？」

「沙綾の演奏、カッコよかったよ。大変なパートが多かったのにしっかりと叩けてたし、それでいてみんなと一緒に笑えてたし、…うん、素敵だった」

「ふええーありがとう…ございましゅ」

「あれ？沙綾どうしたの？真っ赤だよ？」

「香澄ちゃんやめてあげてー!」

「え?え?」

「りみの言うとおりでだよ香澄。沙綾のことを考えてあげなきゃ」

「おたえが言うのか…」

ポピパ内での話もあるだろうし、長居しても仕方ないと判断して俺は部屋を後にした。出る前に改めてライブの感想を言い、沙綾にチケットをくれたことのお礼を言っておくのは、もちろん忘れてない。ライブはあまり再入場ができないのだが、ここはそこらへんも自由らしい。なんともオープンな店だ。

客席に戻ろうしたら、見たことがある…いや、決して忘れることができない髪色をした女子がこちらへと歩いていった。場所を考えたら控室へと向かうのだろう。ま、そんな分析せずともわかるのだが…、

なぜなら…向こうから歩いてきているのは、

大切な幼馴染の1人

日菜の姉であり、Roseliaのギターを担当している

氷川紗夜なんだから。

~~~~~

思いがけないことが起きた。

私は今日のライブに出演するためにライブハウスへと来ており、用意していただいている控室へと向かっていた。そうしたら、向こう側からよく知っている…昔からとてもとてもよく知っている、藤森雄弥くんが歩いてきたのだから。

私は彼を認識した瞬間頭が真っ白になった。

(なぜ彼がここへ…?)

(そもそもなぜバンドの控室から…?)

(彼は私のことをどう思っているのだろうか…)

(いえ…、きつと嫌われてるわ)

(きつと彼は私を拒絶しに来たんだわ)

纏まらない思考では、よくない方へと考えが及んでしまう。彼の性格、人柄からすればそんなことはありえないのに、脳が正常に働いていない私はそのことを忘れてただただ恐怖を感じている。

体が震え、足取りが覚束なくなり壁へと体を預けた。目を閉じて現実から逃げようとする。だけど、彼は歩みを止めずにこちらへと近づいてくる。すぐそばで人の気配がした。きつと彼が私の目の前にいるのね…。

そうわかっていても、私は未だに目を閉じて現実から逃げていた。だって、

彼が私に優しくしてくれるのは、過去のこと…!

今の私には嫌悪感しか抱いてないはずなんだから!

彼は…私のせい…!!

「紗夜大丈夫か？具合が悪いなら無理しないほうがいいぞ」  
「…………え？」

耳を疑った。彼にそんな言葉をかけられるなんて思ってたから。私は恐怖を堪えて目を開けることにした。

今度は目を疑った。目の前には、心配そうな顔をしている彼がいたからだ。

（わからない…………わからない！…………なんで…………なんであなたはいつも…………！）

「…………俺を拒んでるよな。…………ごめん、Roseliaのライブを…………紗夜の演奏を見ようと思っただが、止めといたほうがよさそうだな」  
（…………え…………そう…………雄弥…………くんが…………わた…………しの？）

「紗夜がバンドを組んで、ギターを弾いてくれて嬉しいよ。結花も来てるから、どうだったかは家で聞くことにする。…………ごめんな紗夜、極力会わないようにするから。鬱陶しく思ってるかもしれないが、応援してる。じゃあな」

（あ…………）  
「…………紗夜？」

私は横をすり抜けて行くように歩いていく雄弥くんの服を、無意識のうちに掴んでいた。気にしなければ簡単に振り払えるような弱々しい力だったのだけど、雄弥くんは立ち止まってくれた。

困惑している彼の顔を見て、私もどうしたらいいのかわからないでいた。だって、気づいたら服を掴んでいたのだから。とりあえず何か話さなきゃ。

「…………いって」

「ん？」

「…………ライブを…………見ていって」

「…………え？」

「だって、雄弥くんは…ライブを見に来てくれたのでしよう?…なら、見ていって。最後まで…私たち Roselia を、そして…私の演奏を見てほしい」

「紗夜はそれで大丈夫なのか?」

「…っ!…:きつと大丈夫よ。ライブが始まれば、彼女たちとなら大丈夫なはず」

「そうか、なら見させてもらうよ」

「ええ」

「…それにしても…ははっ」

「…なによ」

「いや、悪いな。…紗夜が曖昧なことを言うなんてな。Roselia に入って紗夜も変わったのか?」

「かもしれないわね。Roselia に入って良かったと思ってるもの。…:大切な居場所だわ」

「そっか」

…不思議だわ。会うまでの時も、会ってすぐもあれだけ取り乱していたのに、会話をしたらそれまでの重荷が無くなったわ。肩の荷が降りたというか、胸がスッキリしたというか、とにかく私の気持ちは前向きになれたようだわ。

「それじゃあまた後で。紗夜の演奏も、Roselia の演奏も楽しみにしてる」

「ええ。私たちにしかできないライブをするから、一瞬も目をそらさないで」

雄弥くんの後ろ姿を見送りつつ、心が温まっていることを実感する。…恐れているだけでは駄目なのね。彼は私のことを嫌っていなかった、怨んでいなかった。彼の態度からそれは伝わってきた。改めて、あの時の話をしないといけないけれど、今日はライブに集中するとしましよう。

「あれ〜？紗夜なんかご機嫌じゃーん？何かあったの〜？」

「そんなことないわよ。私はいつも通りだよ」

「えー、絶対に今日の紗夜超機嫌いいよ〜。ね？友希那もそう思うよね？」

「そうかしら？リサの気のせいよ」

「えー！」

「紗夜今日も最高の演奏を頼むわよ」

「湊さん……。ええ、もちろんです」

湊さんが今井さんを抑えてくれたけど、…湊さんにまで気づかれるだなんて。詳しくは聞かないでいてくれる湊さんには、感謝しないといけないわね。もちろんお礼は演奏で。

「絶対今日の紗夜いつもより機嫌いいと思うんだけどなー。燐子もあこもそう思うよね？」

「うーん…、あこもそんな気はするけど、友希那さんが違うって言うてるからやっぱり違うんじゃない？りんりんはどう思う？」

「…え……。えつと〜……、わたしには……いつもと…同じに見える…かな」

…今井さん、諦めてくれないかしら。

## 15話

「やっと戻ってきたー！遅いよー！」

「ごめん。ちよつと紗夜と話しててな」

「そつかく。それなら仕方な……んん!？」

「どうかしたか？」

「どうかしたかって……え!?紗夜に会ったの!？」

目を丸くした結花に肩を掴まれ前後に揺らされる。ただ紗夜と会って話しただけなんだが、一大事件らしい。……まあ……そりやそうか。あとで会うって言って避けてたのに、ちゃっかり会って話してきただだからな。俺も驚いたことだし、偶然だったということ話を話すと、結花も納得してくれて手を離してくれた。

「そうなんだ……。でもよかつた。いい感じに話せたんだよね?」

「そうだな。……あんなに普通に話せるとは思ってなかつた。日菜みたいに紗夜も俺を嫌ってると思ってたからな」

「だろうね。ま、私は学校で一緒にご飯食べたりにしたから、紗夜の気持ちがある程度は分かってたけど」

「そうだったのか……」

「うん。あえて雄弥には話してなかつたの。……ごめんね」

「謝らないでくれ。むしろそうしてくれてよかったよ。結花に甘えてばっかでもいられないしな」

「お姉ちゃんとしては複雑かな。雄弥には甘えてほしいけど、成長もしてほしいし」

「保護者かよ」

「お姉ちゃんです☆」

あゝ、結花はこういう子だったな。昔つから変わらない。……いや、変わらないでいてくれている。これも俺のせいなんだろうな。気を使わせて、側にいてもらって、ずっと支えてくれて……。

「ゆうーや!」

「むぐっ。なんらよ」

「あはは!話せてないよー?」

「らのせいいらとおもつれる」

「私のせいかな?あ、雄弥のほっぺ一番好きかも♪」

「……」

「…私はね、好きでこうしてるんだよ?」

「!!」

「1人で背負い込もうとしないで。お姉ちゃんが好きでやってることもあるし、過去のことでも私に責任があるんだから。…それでも背負い込もうって言うんなら、それはお姉ちゃんにも背負わせて?家族なんだからさ」

頬をつまむのをやめたと思ったら引き寄せられ、左の頬に口づけされる。少し顔を赤くしながらも破顔させている姉を見て、俺も表情が緩くなった。いつだってそうだ。何でも見抜かれて、本心を伝えてきて助けてくれる。掛け替えのない大切な家族。そんな結花だから、俺も負担をかけさせたくないと思うし、助けたいと思う。

「ありがとう結花。気持ちが楽になった」

「えへへ、どういたしまして♪お姉ちゃんのファーストキスの効果は

絶大かな?」

「…それは嘘だろ」

「あはは!まあね。ファーストキスは中学の時だもんね♪」

「身内をカウントするなよ…」

「雄弥だからカウントするんだけどね?」

「……」

「あれ?照れちゃってる?」

「ライブ始まるぞ」

「露骨にそらすね…」

俺の話題の反らし方に呆れた結花だったが、次のバンドの演奏が始まるのも事実だったためステージへと目を向けた。登場したのは、今日のもう一つの目的である Roselia だ。

リサから聞いた話によると、リサの幼馴染である湊友希那が紗夜に声をかけ、一緒に作ったバンドなのだそうだ。リーダーでボーカルである湊友希那の歌は、圧巻の一言に尽きた。そのレベルの高さなら紗夜が協力する気になったのも納得だ。

「むむっ！見た目だけで言ったら私より雄弥のお姉さんっぽい！」

「何言ってるんだ……。俺の姉は結花だけだ」

「ありがと♪…真面目な話、あの歌声は凄いね。嫉妬しそう」

「他所はよそ、うちはうちだ。俺達のボーカルは結花だけだからな？」

「…今日はやけに恥ずかしいこと言ってくるね？」

「本心を言ってるだけだ」

さて、ステージに意識を戻すとするか、キーボードの子は白金燐子だったか。あの衣装も彼女の自作らしい。デザイナーにでもなったらしいんじゃないだろうか…。それはともかく、（いやそっちも凄いな）キーボードのレベルも高いな。Roseliaの曲は激しいものが多いらしいが、それについていくどころかしっかりと全体を調和している。…大輝なら違うところに目を向けて「レベルたけえー」とか言いそうだな。

「…胸か、やはり胸なのか！」

「結花？頭大丈夫か？」

「雄弥はどうなの！」

「俺か？俺は見た目で判断する人間じゃないぞ。それは結花が一番分かってくれてるんじゃないのか？」

「…それもそうだね。いやー、学校ではツツコまなかつたからさ」

「クラス一緒なのか？」



「ううん。別だよ。紗夜と燐子は同じクラスだけど」  
「へ〜」

それで、ドラムの子が宇田川あこだったな。1人だけ中学生で今3年生だったかな。普通なら受験のことを心配するが、内部進学があるからバンドする余裕があるんだろうな。…それに紗夜がいるから勉強面のことを言ってるだろうし。

小さい身体からは、想像もつかないほど力強くドラムを叩いているな。ツーバスなんて物珍しいが、宝の持ち腐れ…なんてことにはなっていない。全てを全力で叩き、リサのベースと一緒にしつかりとリズムを作れている。素直に賞賛するしかないな。

「…妹属性か」

「いちいち反応するなよ…」

「雄弥も妹ほしい?」

「沙綾が妹みたいな感じって言ったの結花なんだが…、それに純と沙南がいるだろ」

「あ、ほんとだ。じゃあ安心だね」

「なんの心配だよ…」

それで、同じクラスのリサ。一度ベースを辞め、ブランクがあり初心者と変わらないと言っていたが、とてもそうとは思えないな。…ま、他の子たちについていくのがやっとなつていうのは、たしかかなうだが。…あ、ウインクしてきた。実力以上のものが出ているのか。……ふむ。

「…そんな時間作れるの?」

「何も言っていないだろ」

「分かるんだってば☆」

「はあ。…どうなるかは分からないな」

「ま、私は止めないけどね。…不安要素心配な点はあるけど」

「ありがとう」

そして、俺達の幼馴染である紗夜。リサの赤いベースとはある意味対となるような、青いギターを弾いている。紗夜らしい正確な弾き方で、どれだけ練習に取り組んでいるのかが伝わってくる。その反動っぽいものもあるようだが、今日はどうやらそれも小さいようだ。紗夜のギターの音色に感情が乗ってる。…それがいつもの Rose lia と違う点のようだ。それがあからこそ他のメンバーも実力以上のものが出ているようだ。

「…紗夜頑張ったんだね」

「みたいだな。あのレベルになるためにどれだけ練習したことか…」

「紗夜のことだから『これぐらい当然よ』とか言いそうだけどね☆」

「そうだな。……」

「気がかりでも？……あー、日菜…か」

「まあ、な。日菜も紗夜を見てギターを始めたらしいからな」

「雄弥の気持ちも分からなくはないけど、今はそれどころじゃないんじゃない？雄弥は雄弥でやる事があるんだから」

「…だが…」

「紗夜を…そして日菜を信じなよ。あの2人が嫌い合うなんてことは絶対にならないんだからさ。…だから、2人の”強さ”を”絆”を信じようよ」

「!!……ああ。結花の言うとおりでな」

俺が首を突っ込めることじゃないし、こっちから強引に行ってもそれは紗夜と日菜を信じていないって言えるからな。俺は俺で日菜と向き合わないといけないんだ。過去の精算は一切終わってないし、始まってすらいらない。それは紗夜に対しても同じで、贖罪しないといけないんだ。

思考を切り替えてライブに集中する。ポピパのような溢れんばかりの笑顔、というわけではないが、(リサと宇田川は超笑顔) Rose

liaもRoseliaで楽しそうにライブをしている。紗夜と方針が合うということは、ボーカルの湊も音楽に対しては人一倍厳しいんだろうが、その湊も紗夜も白金も笑顔だった。

レベルが高く、それだけでも客を引き寄せ魅了するのに十分なのだが、演奏を楽しそうにしている。今日一番の集客となるのも納得だな。

~~~~~

Roseliaのライブが終わり、私は沙綾にCDを渡してからある場所に雄弥と向かった。ちゃんと合ってるか確認してからドアをノックする。中から返事が来たけど、ドアを開ける前に確認しないとね。

「やつほー紗夜。私だよ☆」

『その声…結花なの!?!』

「うん♪差し入れ持ってきたから受け取って欲しいんだけど、中入っていい?」

『…ええ。構わないわ』

「お邪魔しま〜す♪」

そう言っただアを開けると、紗夜が出迎えてくれて、テーブルを囲うように残りのメンバーが椅子に座ってた。リサと燐子のことも知ってるし、初めまして…になるのは、リーダーの友希那ちゃんとドラムのあこちゃんだね。

「来るなら事前に行ってほしかったわ…」

「えへへ、サプラーイズ☆」

「…まったく、あなたは……」

「紗夜、立ち話もなんだし、座ってもらったら?そこにいる彼も」

「そうですね……え?」

「よ、紗夜。さつきぶりだな」

「ゆ、雄弥くんも来てたのですか!？」

「そりゃあ私たちはセットで動くからね」

「そういえばそうだったわね」

学校では私一人だし、さつきも雄弥と一対一で会ったから忘れてたのかな?ま、なんでもいいや。私と雄弥の分の椅子も用意してもらって席についた。紗夜が自然に雄弥の隣に座って、私も反対側に座ろうとしたけど…。

「なにになにー?リサは雄弥の隣がいいのかなー?」

「なっ!そ、そんなことないから!」

「リサ?どうかしたの?」

「なんでもない!なんでもないから!」

「…そう?」

からかうだけじゃ止まらないよ?もちろんリサを雄弥の隣にして、私はリサの隣に座ることにした。なんかリサが恥ずかしがりながら睨んできてるけど、そんなの可愛いだけだからね?。

「それじゃ自己紹介させてもらおっかな。藤森結花です☆ そっちは弟の雄弥で、私たちは紗夜と幼馴染なんだあ」

「結花は花咲川に、俺は羽丘に通ってる」

「…そう。あなたが最近噂の人物ということね」

「不本意ながらそうなるな」

「あこ、一度お会いしたいなーって思ってたんですよ!」

「あこちゃん…自己紹介…しなきゃ」

「あ、そっか!羽丘の中等部に通ってる宇田川あこです!我が闇の力の前に、ひ…ひ…ひ…あれ?」

「…ひれ伏すがいい」

「ひれ伏すがいい!」

「宇田川さん？」

「ひいっ！ご、ごめんなさい！」

「ははー」

「2人は合わせなくていいのよー！」

えー、こういうのはノリに合わせてあげるもんじゃないのー？雄弥もやったってことは、そういうことでしょ？

「紗夜のいつもと違う面が見れたねー」

「そう…ですね」

「いや、あの…今のは」

「あはは☆まあまあ、それはともかくさ、友希那と燐子も自己紹介しなよ。あたしはもう面識あるけど、2人はそうでもないんじゃない？」  
「そうですね…私は、藤森さ…結花さんとは…会ったこと…ありませんけど」

「ボーカルの湊友希那よ。私も羽丘に通っているわ。あなたの隣のクラスだけど」

「キーボードの…白金燐子…です。よろしく…お願い…します」

「こちらこそ♪それで、これが差し入れのマフィンだよ☆」

「やったー！マフィンだー！」

「これ、2人で作ったの？」

「リサ大正解！私と雄弥の合作だから、味の保証はするよ！リサは雄弥と合作したことないでしょー」

私が小声で煽ったら、リサが分かりやすいぐらい拗ねた。その様子を見てた紗夜には、冷めた視線を送られたけどね。ま、爆弾を放り込むのは私だけじゃなかったんだけど…。

「美味しいわね…。リサのクッキーに張り合うんじゃないかしら」

「…ふーん？」

「ゆ、友希那さん…。リサ姉が不機嫌になったんですけど…」

「？リサもクッキーを2人にあげてみたらいいんじゃないかしら？雄弥にはお弁当を作ってあげてるのだし」

「なにそれ!？」

「ちよっ！友希那!？」

「今井さん!どういうことですか!」

「わわ!皆さん落ち着いてください!りんりん助けてー!」

「あこちゃん…こういう時の…最善は…一つだけ、なんだよ」

「教えてー!」

「知らぬが仏」

「なるほど!」

「…おい」

## 16話

最近になって、ようやく自分一人でもパンを一から作れるようになった。菓子パンとかはまだ不安要素があるが、そこまで難しくないパンなら任せてもらえるようになった。今日も自分でパンを焼き、それを商品棚に並べていく。並べ終えたら他のパンを並べてる沙綾の手伝いをして、開店時間までの少しの時間を2人でゆったりと過ごす。

「雄弥さんがいてくれると凄い助かります♪」

「俺なんてまだまだだろ。沙綾の方がうまく仕事してる」

「それは小さい時から手伝ってますからね。すぐに追い抜かれたら私落ち込みますよー」

「ははっ、たしかにな。でも沙綾の仕事をもっと手伝えるようになりたいって思ってるよ」

「もう、そんなこと言っても何も出ませんよ?」

「パンは?」

「私お手製のものなら出ます♪」

「出るのかよ」

「ふふっ、はい!出ちやいます!」

ひとしきり、いつもの軽いやり取りを終えると、話は当然のことながら先日のライブのことになった。結花が言うにはポピパの後にゆりさんがいるグリグリがライブしてたらしいんだが、俺はポピパのここに行ってたし、その後に紗夜と話してたから見れなかった。…まじで見たかった。あの人も何度も助けられてるから、お礼とはいかないがせめてライブは見たかった。

「ポピパのこと好きになってくれました?」

「そりゃあもちろん。バンドって段々と技術面を磨き始めて、壁に当たったりもするけど、ポピパは初心の『好き』って気持ちを忘れてな

いからさ。…ま、活動を続けてるバンドも忘れてるってわけじゃないだろうけど、ポピパみたいにすぐに『好きだから』って言うのはなかなかない気がするし」

「んー。私達を好きになつてくれた理由ってそういうことですか？」

「まさか。歌詞もみんなの演奏も好きだよ。けど、一番はやつぱり楽しんでるからかな。ポピパが笑顔で演奏してる姿に惹かれたよ」

「あはは、聞き出しといてあれですけど…、そう言われると恥ずかしいですね」

「そういうもんか？」

「そういうもんなんです」

「そうか。…それとさ」

「はい？」

「沙綾のこと、もつと好きになつたよ」

「…え…」

いつもはこうやって一緒に喋って、店を手伝って、食事を取って、そういう面しか見てないけど、沙綾の知らない面を知れた。沙綾が家族と同じぐらい好きで大切にしているポピパのことを知って、沙綾がはじける笑顔でドラムを叩いているのを見て、さらに好感を持てた。なんというか、安心したって気持ちもあるんだが、…結花と一緒に沙綾のことを身内と捉えてるってことかな。

なんて思慮にふけってるが、その間沙綾が一言を発してこなかったことに気づいた。沙綾はというと、まるで停止したかのようにその場に固まっていて、変化があるとすれば顔が真っ赤になつてることか。

「沙綾？大丈夫か？」

「……」

「おーい、沙綾ー」

「…あ、はひっ！らんれしよ！…あー！」

「カミカミだな…。大丈夫なのか？」

「だい…じょうぶ、です…」



「うーん、まだしばらくはお客さんも来ないだろうし、少し休んでいいじゃない。」

「大丈夫です…ほんとに、大丈夫ですから」

「そうか？無理はするなよ」

「はい」

沙綾は何度か深呼吸して、気持ちを落ち着かせていた。それがうまくいったのか、少し顔の赤みが減っていった。これなら、ほんとに大丈夫なんだろうな。

「そ、そういえば雄弥さん」

「どうした？」

「ライブの時の悩みごと、解決したんですか？どこかスッキリしたような感じですけど」

「ああ、おかげさまでな。話しかけてみたら、思いの外嫌われてはなかったな」

「そうなんです！安心しました！」

「沙綾が支えてくれたおかげだ。ありがとう」

「いえいえ！私は大したことでませんよ。少しでも雄弥さんの参考になればと思って言っただけで…」

「そんなことないさ。沙綾には勇気づけられた。なにかお礼させてほしいぐらいだ」

「お礼だなんて……」

手を交差させるように振って、断ろうとした沙綾だったが、俺が真剣に見つめると困ったような顔をして動きを止めた。少し考え込むように目を閉じて、しばらくしたら頬をかきながら目線を合わせた。

「ほんとに…いいんですか？」

「ああ。可能な限り望みを叶えるよ」

「えと…じゃあ…その…雄弥さんと…お出かけしたいです」

「わかった。それなら1日空けといたほうがいいよな」

「い、1日も空けてもらっていいんですか!？」

「いいよ」

「やった!今度の土曜日は空いてますか?」

「空いてるぞ。時間とかはまた後で決めようか。お客さんも来たことだし」

「あ、ほんとだ。いらっしやいませー!」

あれだけ喜んでもらえると嬉しいもんだな。営業スマイルなんかじゃない。本当の笑顔を浮かべてお客さんを迎える沙綾を見て、そんなことを思うのだった。

くくくく

…困ったわ。先日のライブの時に雄弥さんと偶然にも再会して、なんとかお互いに話せる仲にはなれたけど…。

「連絡先を交換するの忘れてたわ…」

中学生の時から雄弥くんは携帯電話を持っていたのだけれど、当時は私が携帯電話を持っていなかったから…あの件の後に必要だと両親が判断して買ってくれたけど。…でも、私が携帯電話を買ってもらった時には雄弥くんたちはいなくなっていたから。

「…もう一度あって、きちんと謝りたいのに…」

「氷川さん?…どうか…されました?」

「!…白金さん。おはようございます」

「はい。…おはよう…ございます。それで…あの…」

「いえ、大したことではありません。ただ、彼と連絡先を交換しておくべきだったと思います。…話をしないといけませんので」

あの時は、今井さんが雄弥くんにお弁当をつ、作っていると聞き、焦っていたので、聞きそびれたのです。…今思えばRoseliaであんなことになったの初めてね。けっして嫌なことではなかったけど。

—————

「知らぬが仏」

「なるほど！」

「…おい」

私と結花が今井さんに詰め寄ってる間、原因の湊さんは啞然とし、白金さんと宇田川さんは悟りを開いたような表情で見守り、それに雄弥くんが呆れていたわ。なんとも纏まりのない状態ね。このことをきつとカオスとでも言うのでしょうね。

「はあー、結花も紗夜もそのへんにしてやれよ。人の弁当って美味そうに見えるだろ？それで、リサとお互いに弁当を作って交換しようって話になっただけだ」

「そうなの？」

「…今井さんを庇って嘘をついてる、というわけでもないようね」

「ああ」

「じゃあいいや。私が作ってる時はちゃんと食べてくれてるんでしょ？」

「当然だ」

「うんうん♪なら私が詰め寄る理由もないね！…紗夜はどうか知らないけど？」

「なっ！…私だって深く聞く気はないわよ」

「ほんとにー？それならなんで問い詰めてたのかなー？」

「それを結花が言うのか…」

結花のからかいの対象が今井さんから私へと変わった。こういう時の結花は手に負えないのだけど…。私がどう切り抜けようか考えていると、そんな空気を湊さんが壊してくれた。

「話は終わったかしら？そろそろ今日のライブを振り返りたいのだけど」

「友希那く、誰のせいでこうなっと思ったのかなく？」

「私は別にリサをからかいたくて言ったわけじゃないのだけど…」

「ふーん？そんなこと言う子にはく」

「ちよつ、リサ？やめなさ…きやつ…やめ…」

「ぷにぷにく、ほれほれく」

「やめなさい…ごめんなさい、私が悪かったから…!…はあはあ」

「これでおあいこかなー？さてと、あこと隣子も元に戻ってー。ファミレスに行くよー」

「リサ？私はファミレスに行くだなんて言っていないわよ？」

「え？だってもうそろそろ出ないとダメじゃん？ならファミレスっしょ」

一瞬で2人を元に戻した今井さんに言われて、私と湊さんは時計に目を向ける。時計の針が指している時間から考えてみると、たしかにここでは振り返りはできないわね。

「…仕方ないわね」

「やったー!あこ今日はハンバーグ食べよーつとー!」

「あこは元気だねく」

「雄弥は何食べる？」

「…ドリアあたりでいいんじゃないか？」

「じゃあ私はドリア以外のにしよーつと」

「半分交換、だろ？」

「さっすが雄弥!分かってるねく♪」

「結花たちも来るの?」

「え、ダメなの?」

「あなた達は「観客側からの感想言うよ?」来ていいわよ」

「友希那切り返し早いね」

「それでは…行きましようか」

「うん!」

湊さんが良いと言うのなら、私もそれでいいのだけど…、…話せはするのだけど、まだ雄弥くんとは、うまく距離を掴めないわね。ライブ前は突然のことで動揺しててなんとも思わなかったけど、こうやって少し落ち着いたら緊張するわ。すぐそこにいるのに、どう向き合ったらいいか分からない…。

注文したものが届き、ひとまずは食事を楽しみ、それが終わったらいよいよ今日の振り返りとなった。個人的には今日のライブは良い出来だと思っていたし、どうやらそれはみんなも思っていたことのようにだった。

…でも、今この場にはRoselia以外のメンバーが、私達より上の世界を見て、そこで勝ち抜いていた人たちがいる。

「Roseliaのレベルは評判通りプロレベルだね。でも、あくまでプロレベル」

「…つまり、その中ではまだ上位にはいけないと?」

「さすが友希那、よくわかってるね。頂点はそう簡単には取れない、それはみんななんとなくは分かっているよね?はつきり言うと、友希那もまだ未熟だしね」

「え!?!友希那さんがですか!?!」

「心当たりあるでしょ?」

「…今日のライブはいつも以上のモノが出た。そのことで歌が先走りかけたわ」

「うそ…あたしそんなの気づかなかったんだけど…。紗夜と燐子は?」

「いえ、私も…」

「わかりませんでした…」

「ま、私も雄弥に言われて分かったんだけどね！雄弥ならみんなのレベル上げれるよー？」

「なにプレゼン始めてんだよ…」

「…やっぱりなのね」

「友希那？」

湊さんは、どこか納得したような顔で雄弥くと結花を見つめていた。彼女の中で生まれていた疑問は、もしかして…。

「あなた達、Augenblickで活動してたわよね？」

「お、知ってたんだ。うん、私がボーカルで、雄弥がベースだよ。…リサも教えてもらおうチャンスだよー？」

「…へ……」

「雄弥、お願いしてもいいかしら。あなたの都合のいい時間でいいから、私達の練習に来てほしいの」

「……、ああ。わかった」

(みなと…さん…?)

雄弥くんが、練習に来るようになる？たしかに、レベルを上げるなら上の世界を知ってる人に指導してもらうのがいいのだけど…。

私が混乱したままその日は解散となった。結花も都合が合えば雄弥くんと一緒に来てくれると言っていたけど、…正直結花が間に入ってくれることにどれだけ安堵したことか。

—————

「……あの…それ、でしたら…結花さんに…雄弥さんの…連絡先を…教えてもらえば…いいのでは？」

「……あ」

「…氷川さん……」

「わ、私だってこういう時があるんです！」

恥ずかしかった…。白金さんが見る目を宇田川さんの時と同じようにしたから特に…。あんなの追い打ちも同然だわ。その後結花にお願いしたら、あっさり教えてくれたわ。何をこれだけ悩んでいたのかしら…。

家に帰り、寝る前に少し勉強をしておこうと机に向き合っていると、ドアがノックされた。このノックの仕方は…日菜ね。

「空いてるわよ」

「あ…勉強してたんだ。ごめんね」

「別にいいわよ。ちょうど区切りのいいところだったから」

「そっか」

「それで、どうしたの？」

いつもとはどこか違う。日菜にしては珍しく余所余所しいというか、何かを怖れてるような…。私の普段の接し方からすればこうなるのは当然か。でも、今日は何かが違う気がする。

「お姉ちゃん…さ、…ユウくんに出会ったの？」

（っ!!?踏み込みづらそうにしたのは、このことね。それに、彼の名前を言った途端日菜の雰囲気冷たいものに…）

「…ええ。会ったわ。と言っても偶然よ。私はライブに出てて、彼は戸山さんたちのライブを見に来てたのだから」

「…ふーん？…ま、そこはいいや。それで、相変わらずのロクデナシだったでしょ？」

「…日菜。彼は、雄弥くんはあなたが言うようなロクデナシなんかじゃないわ。彼は「それはお姉ちゃんが騙されてるんだよ!!」…っ日菜！」

「だって！本当にユウくんがロクデナシじゃないって言うなら、…」

あの時に！あの時に約束を破るわけないもん！！あたしとの約束、絶対守ってくれるって言ってたのに！！嘘ついたんだよ！！」

「あの時…？…私に私が知らないことだけど…でも、日菜。あなたも彼と向き合って、その時に何があったのか確かめるべきよ」

「…っ、そうやって…お姉ちゃんも…」

「日菜？」

「もう知らない！勝手にすればいいよ！」

「日菜！待ちなさい！」

部屋を飛び出した日菜を追いかけるも、日菜は自身の部屋の鍵を閉めて、開けてくれることはなかった。

（私は…いつたい…どうしたら…）

（なんで…なんで…お姉ちゃんまで…あたしから離れちゃうの？  
…やだよ…お願いだから、もう…誰もいなくなるらないでよ…。…あ  
たしを…1人にしないでよお…）



## 17話

リサと屋上で弁当を食べるのは、もはや当たり前とも言えるような出来事となってきた。しかし、今日はそこに少しだけ変化があった。今日は2人で食べてるわけじゃないということだ。

「雄弥の料理って本当に美味しいのね。リサに聞いたときは半信半疑だったのだけど」

「えー？友希那は信じてくれてなかったの〜？」

「リサを疑ったわけじゃないわ。予想してたより美味しかったということよ」

「ま、聞くだけじゃ分かんないもんだしな。何はともあれ湊の口にあつてなによりだ」

「友希那でいいわよ。私も雄弥と呼ばせてもらってるのだし」

「いやそれは名字呼びだと結花と被るからだろ」

「あら、リサのことを名前で呼んで、私のことは名前で呼べない理由があるのかしら〜？」

「強引だな…。わかった、俺も友希那って呼ばせてもらう。それでいいだろ？」

「ええ」

名字呼びから名前呼びに変わったことで、どことなくお互いの距離も縮まった気がするな。それに…なぜだろうか、湊と呼ぶより友希那と呼んだほうが、俺としてもしっくりくる。妙な感覚だ。

「…むー」

「リサ？」

「……嫉妬かしら〜？」

「なっ!?ちがつー!……くない」

「嫉妬？俺はリサって呼んでるし、嫉妬することなんてなくないか？」

「…………アタシの時のほうが時間かった」

「…そうだったけ？」

リサの時もわりとすぐに名前呼びになったような…。それにもう名前呼びになってるわけだし、そこで嫉妬されてもどうしようもないんだが。

「リサ」

「なに？友希那」

「リサも雄弥のこと呼び捨てにしたらどうかしら？」

「ふえ!？」

「私より付き合いが長いのに未だに君付けだし、それにリサらしくない気がするわ」

「そ、そんなこと…ないよ？」

「……………」

「いや…だって、い、今更って感じあるし」

友希那の無言による圧力に耐えられないのか、リサはしどろもどろになりながらなんとか言葉を紡いでいた。リサからの呼ばれ方の話だから、俺だって無関係じゃない。リサに助け船を出すとしよう。

「俺はそんなこと気にしないから、リサが呼びたいなら呼び捨てでいいぞ」

「…え……………」

「…あれ？」

今更遅いとか、そんなこと気にしてるなら気にしなくていい。そういう考えで言ったんだが、逆効果だったのか？リサの顔が赤くなってるし…。でも友希那は満足気な感じなんだよな…。

「よかったじゃない、リサ。あなたが気にしてることを雄弥は気にしてないそうよ」

「で……でも……」

「このままでいいのなら今まで通りでいいんじゃないかしら？」

「…友希那…まさか、気づいて……」

「なんのことかしら？ 私はリサの助けになればと思ってるだけよ」

「…うん。なんでもない。…ありがとう友希那。…えと、ゆ…ゆうや」

「うん。改めてよろしくな、リサ」

「……っ！うん!!」

まだ少し頬を赤くしてるが、リサは見ている人まで笑顔にするような、そんな弾けんばかりの笑顔を浮かべた。リサの心中を察してあげることができないが、友希那にはある程度お見通しなようだ。

「さてと、雄弥に聞きたいのだけど、週末の予定は空いてるかしら？」

「土曜日は空いてないな。日曜日なら昼間は空いてる。夕方からはバイトがあるが、……練習か？」

「そうよ。日曜日は13時30分からスタジオで練習してるから、もしよければ来てくれないかしら？」

「いいぞ」

「ありがとう。たしかリサも夕方からバイトがあるらしいから、それに間に合うように終わらせるわ。だから練習を最後まで見てほしいのだけど……」

「そういうことなら最後まで見れると思うぞ。…期待してるぞ」

「ええ。練習を見て失望するなんてことにはさせないわ」

~~~~~

うん…、来るの早すぎたかな。集合時間までまだまだあるし……、でも家についても落ち着かなくて、純と沙南に「へんなのー」って言われちゃったし。少し寄り道してから来たらよかったのかな。…でもそこまで心の余裕があるわけじゃないし。気を紛らわせよう

と思って忘れ物がないかとか、服装が乱れてないか確認を始めたんだけど…、

「…服、変じやないかな。似合ってたなかったりとか…」

「変じやないだろ。俺はよく似合ってると思うぞ」

「へ？…あ…ゆ、ゆうやさん…」

「おはよう沙綾。待たせちゃったか？」

「い、いえそんなことないです！私が早く家を出ちやっただけですし、それに全然待ってないですよー！」

「それならよかった」

ホツと息を吐いた雄弥さんの表情は穏やかだった。結構な頻度で雄弥さんとは顔を合わせているのに、今日は雄弥さんにドキツとさせられる。…これって、昨日香澄に言われたことが尾をひいてるってことだよな。

—————

「やっぱり明日も練習しようよ！」

「だーかーら！りみも沙綾も予定があるんだって！2人の予定崩させんなよな」

「ごめんね香澄ちゃん。絶対に予定空けといてってお姉ちゃんに言われて…」

「そうだよな。わたしこそごめんね。…沙綾の明日の予定って何なの？」

「へ？」

「りみりんはゆり先輩とお出かけでしょ。沙綾は？」

「家の手伝いとかだろ？」

「え？雄弥先輩とお出かけでしょ？」

「「え？」」

「なっ!?なんでしって…あ」

し、しまつたく。これって「そうだよ」って言ってるのも同然な反応じゃん。いや、でも、だっておたえが言い当ててきたわけだし、こうなるのも仕方ないよ。それより、おたえ以外の3人の目が輝いてるんだけど…。

「そうなの？ 沙綾ちゃん」

「あ、あはは。うん、実はそうなんだ。この前のライブのチケットを用意したお礼ってことでさ」

「なるほどなく。あの人そういうところしつかりしてそうだもんね」

「うん。私もお礼なんていいですって言ったんだけど、それは悪いからって言われちゃって」

「雄弥さんそういうところ譲らないもんね」

「そうなんだよねー。……ん？」

「りみりん、雄弥先輩と知り合いだったの？」

「え!? そうだったのりみりん！」

「か、顔見知りぐらいやで？ お姉ちゃん繋がりで知り合っただけやし……あ」

りみりんの口から関西弁がでた…、ということは本当にそれぐらいなんだろうね。そっかあ、ゆり先輩とりみりんは前々から雄弥さんと知り合いだったんだ。言われてみたらたしかに、ライブの日にりみりんは雄弥さん達と話す時、緊張してなかったもんね。

「いやあー、意外な発見だね。ね、有咲」

「そうだな。あー、驚いた」

「それにしても…、そっかそっかあ」

「…香澄お前、なに1人納得してんだよ」

「えく？ 沙綾が明日デート行くのかうって思っただけだよ？」

「で、デート!? いやいや、私たちは別にデートに行くわけじゃー！」

「え？ だって雄弥さんと沙綾の2人きりで出かけるんでしょ？ もしか

して結花さんもいるの?」

「う、ううん。雄弥さんと2人だけど…」

「じゃあデートだよ!大ちゃんも男女2人で出かけるならデートだって言ってたもん!」

大ちゃん……たしか香澄の従兄弟だっけ。そういえばその人もドラマーなんだっけ。それよりも……、え?明日のやつって、デートってことになるの?

—————

なんてことがあつて、服をどうするかとか、アクセ類をどうするかとかを夜にすっごい悩んだ。朝も朝で鏡の前で何回もチェックしたし…。

そうやって悩み抜いて決めたものを、雄弥さんに『似合ってる』って言われてすごく嬉しかったし、気恥ずかしさもあつた。雄弥さんの私服って実はそんなに見たことなくて、新鮮な感じがするんだけどそれ以上に…。

(カッコいい…)

「沙綾?どうかしたか?」

「い、いえ…その、雄弥さんも服似合ってますよ。カッコいいです」

「そっか。それならよかった。ありがとう沙綾。それじゃあ行くっか」

「はい」

今日出かけるのは、この辺で1番大きいショッピングモール。電車に乗って他のところに行ってもよかつたんだけど、雄弥さんはまだショッピングモールに行っていないみたいだから、ショッピングモールにした。雄弥さんは来たことがないから、当然何があるか知らない。だから私が行きたいところに行く、ということになつてる。

「ヘアアクセ…、そういや沙綾こういうの好きって言ってたな」

「はい！こういうの見てると…あ、これ可愛い！」

「へへ、今の沙綾の服装にも似合いそうだな」

「そうですか？…どうしよー」

「他も見てみるか。時間はあるんだし」

「いいんですか？やった♪」

雄弥さんの好意に甘えて、いろんなのを見ていった。他にも可愛いヘアアクセがいろいろあったんだけど、その中でも一番気に入ったのがあった。…でも……、

「これに合う服持っていないですよね……」

「ん？あー、蛍光色系の服か」

「はい…。ライブの時なら着たりするんですけど、普段は全然で…。なんか似合う気がしなくて」

「そんなことないだろ」

「え？」

「沙綾に合う服選ぶから、そのヘアアクセも買おう」

「ええ!?だ、大丈夫ですから、私ほんとにそういうのは…」

「ライブの時には着てるわけだし、実際似合ってる。なら普段蛍光色の服を着ても似合う」

「なんか無茶苦茶なような…」

渋ってはいるけど、そういう服を着たくないわけじゃない。それに、雄弥さんって服のセンスありそうだし、なによりも雄弥さんに服を選んでもらえるのが嬉しい。だから、断りきることもなくてできなくて、ヘアアクセを買って、今度は服屋さんに来た。雄弥さんは来たことないはずなのに、迷いなく店の中を進んで行って、服を選び始めた。

「これ…いや…それだと……こつちか？…あつちのも…」

「選んでもらってるのってなんか緊張しちゃうなあ」

「あちらは彼氏さんですか？」

「ひゃっ!？」

「あ、失礼しました」

「い、いえ。……っ！彼氏じゃないです!」

「え？違うのですか？あそこまで真剣に考えてくれてるのに……あ」

「へ?」

「少々お待ちください」

店員さんが雄弥さんに声をかけに行つて、2人でなにやら話し始めた。しばらくその様子を見守つてると店員さんがまた戻ってきた。

「お客様、こちらへどうぞ」

「え?どういうことですか?」

「ご試着してください」

「え、でも」

「沙綾、俺からも願います。さっきのヘアアクセもつけてみてほしいし」

「雄弥さん…、わかりました」

試着室に案内されて、雄弥さんにも選んでもらった服を試着する。今つけてるヘアアクセから、さっき買ったヘアアクセに変えて……わ、こうなるんだ…。

「あ、開けますね」

「お客様!大変よくお似合いです!」

「沙綾、すごい似合ってるよ。かわいい」

「あう」

雄弥さんにかわいいって言われちゃった。私でもこういう服着れるんだね。その2つの思いが同時にこみ上げてきて、私は恥ずかしさ



を誤魔化すためにカーテンを閉めた。

この服は雄弥さんからのプレゼントということで買ってもらっちゃって、その後お昼ご飯を食べてから、カラオケに行つて、帰る前にプリクラも撮っちゃった。家に帰つて自分の部屋で1日を振り返つてみたけど、カラオケに行つてからずっとグイグイいったよな…。そこを少し反省しつつ、プリクラを眺めて口元がニヤけまくつた。

(そういえば雄弥さん、歌もすごかったなあ。CDだと結花さんがボーカルだからデュエットだったけど、今回はソロなわけだったし。…調べたらライブの映像じゃなくても画像とかは出るのかな?)

「へへ、ユウくん、結局他の子とデートしてんじゃん。やっぱり信用できなない人だなあ」

## 18話

今日は雄弥と一緒にRoseliaの練習を見に行く日。あの日からバンド活動は休止中だし、ゆりさんと出会うまではバンド関連とは一切合切距離を取ってたから、また雄弥と一緒にバンドに関われるのが嬉しい。また一緒にステージに立てるのが1番だけど、それはどうなるかわからない。とりあえず、今はこれだけでも嬉しいんだ☆

「おはよう、結花」

「あ、起きたんだね。おはよう雄弥♪」

「朝からご機嫌だな。そんなに楽しみなのか？」

「そりゃあそうだよ。音楽好きだし！」

「……そうだったな。……ごm「謝らないでっつてば」……ゆか」

「先週にも言ったでしょ？一人で抱え込もうとしないでっつて。雄弥は責任感が強すぎるよ。紗夜と日菜のことは、私から何か言うことはできないけど、少なくともあの事に関しては雄弥の責任じゃない。それでも責任を感じるなら、私と半分ずつ背負おう？」

「……なんで……そんな」

「雄弥のお姉ちゃんだからね♪それに……私雄弥のこと大好きだから。大好きな人が背負うものを一緒に背負ってあげたい。自然なことでしょう？」

「よくそんな恥ずかしい事言えるな」

「えく。雄弥ほどじゃないと思うんだけどな」

「それはないだろ……。でも、ありがとう結花」

「どういたしまして♪さ、朝ごはんにしよ！」

雄弥は私から音楽活動を奪ったって思ってるんだろうけど……、それは逆だよ。私が雄弥から奪ったんだ。紗夜と日菜との関係は、私の知らないところで起きた出来事がきっかけらしいけど、音楽活動に関しては私が悪いんだから。それなのに、その責任を私から奪って抱え込もうとするなんて、お人好しを通り過ぎてるよ。

「いつもよりちよつと豪華だな」

「イヤだった？」

「まさか。何時から料理したんだ？」

「んー、6時かな」

「…今8時なんだが」

「おかげでちよつと眠たいかも」

「はあ。自業自得だな」

呆れたように肩をすくめた雄弥だったが、どうやらまた甘えさせてくれるみたい。お互いの顔が見えるようになって向かい合って座ってるんだけど、雄弥は椅子を移動させて私の横に座った。私の手からお箸を取って、おかずを口の前に持ってきた。

「ほら、口を開けろ」

「言い方が荒いよ？リサと食べさせ合いしたときってそんなだったの？」

「いや別に食べさせ合いなんて……あれ？したっけ？」

「やれやれだよ」

「ま、そこは置いとくとして。はい、あーん」

「あくん♪んん！美味しい！」

「結花が作ったんだけどな」

「雄弥が食べさせてくれるから美味しいんだよ？」

「なんだそりゃ」

「むー、なら雄弥にも食べさせてあげる。あーん」

「俺は別にいいんだが…」

「あーん」

「……あーん」

「はい♪どう？美味しいでしょ？」

「そうだな。結花がつく」はい口開けて」…おい」

私が作ったから美味しいって言ってもらえるのも嬉しいんだけどさ。でも今は私が食べさせてるから美味しいって言ってもらいたい。だから私は雄弥がそう言ってくれるまで、わんこそばの如くどんどん雄弥の口に食事を運んだ。雄弥も別に鈍感じゃないから、4回目には「結花が食べさせてくれるから美味しい」って言ってくれたんだけどね。

「食器は俺が洗うから、結花はソファでゆっくりしといてくれ」「はい」

テレビを点けたけど、興味を引くものがなかったから雄弥の背中を眺めることにした。平均身長より少し背が高く、ガタイが良いわけじゃないのに大きく見える背中。……いったいどれだけのことを背負い込もうなんて思ってるんだろ。

「結花? どうした? もう少しで洗い終わるんだが」「…ちよつとあの時のこと思い出しちゃったから」「…そっか」

洗い物の邪魔になると分かっているけど、私は雄弥に後ろから抱きついた。腕を回して雄弥を離さないようにギュっと、強く…。雄弥は、手を拭いてから私の腕を解いた。力で勝てるわけ無いから、抵抗しても意味がない。やっぱり邪魔しちゃいけないよねって、そう思ってたら今度は私が雄弥に抱きしめられた。お互い向かい合うようにして。

「…ゆうやっ」  
「ソファに座ろっか」  
「でも…あらいもの…」  
「後でもできる」

有無を言わせないように私を抱っこした雄弥にソファに運ばれた。最初は横に並んで座ってたけど、すぐに雄弥の膝の上に乗って、もたれかかった。雄弥が後ろから優しく包んでくれて、ゆっくりと頭をを撫でてくれる。それが心地よくて、あの時のを思い出して沈んでた気持ちも楽になってきた。

「ねえゆうや」

「うん？」

「あの事は、二人で背負おうね。絶対に自分のせいだって思い込まないでね」

「…わかった」

「私たち、ずっと一緒にいようね。…母さんだって…」

「そうだな。大丈夫。結花を置いてくことなんてしないから」

「うん」

「少し寝てていいぞ。時間がきたら起こすから」

「ごめんね」

「違うだろ？」

「そうだね。ありがとう。ちよっと休むね」

体の力を完全に抜いて、瞳を閉じる。雄弥が私の体を支えてくれて、側に置いてある毛布をかけてくれた。毛布の暖かさと雄弥の温かさに包まれて、すぐに眠りにつくことができた。

~~~~~

「んんん！あー、よく寝た！今何時ー？」

「12時前」

「嘘!?私そんな寝てたの!?!」

「心地よさそうにぐっすりな」

「うん、寝心地よかったけど…ってそうじゃなくて！雄弥4時間近くもずっとこのままだったってことですよ!?!」

「そうだな。別に気にしてないぞ。結花が安眠できたならそれが一番だ」

「ううー、お姉ちゃんとしての威厳が…」

「何言ってるんだか。それよりお昼は今から作っても仕方ないし、スタジオ行く途中でどっか寄るぞ」

「あー、まあそうするしかないか」

準備は昨日のうちからやっておいたから、髪を整えたら鞆を持ってすぐに家を出ることができた。雄弥の隣に並んでしばらく歩いて、バイト先であるハンバーガー屋さんに行くことにした。通り道だしね。

「いらっしやいませ。つて、あれ？結花ちゃん？…と、その人は…」

「初めまして、弟の藤森雄弥です」

「あー、あなたがそうなんですね！私は結花ちゃんのクラスメイトの松原花音って言います。よろしくね」

「同い年だし、2人とももつと砕けた感じで話なよ」

「えと…いいのかな？」

「いいぞ。俺もそうさせてもらうから」

「うん！それでご注文はどうしますか？」

「えつとね」

食べたいものを注文して、それが出てくるのを待つ。そこそこ忙しいそうだけど、なんとかなってるみたいだね。注文したのもそんなに待つことなく出てきて、雄弥と一緒に席に座る。

「バイト先に友達がいると気楽に働けるな」

「そうなんだよね。それが狙いで紹介してもらったわけだし」

「さすが、抜かりないな」

「時間は少し余裕あるよね？」

「ああ。だからゆっくり食べても大丈夫だぞ」

「うん。それもあるけど、せっかくだしバイトで仲良くなった子とか

の話したいなーって」  
「なるほどな」

バーガーを食べて、ポテトをゆっくり摘みながら雄弥にいっぱい話を聞いてもらった。学校のことを家でいっぱい話すから、こうやってバイト先のことを話すのは、けっこう少ないんだよね。だから新鮮で、雄弥が楽しそうに聞いてくれるから、私も楽しくなっちゃった。時間ギリギリになったのは、仕方ないよね。

くくくく

今日は雄弥さんと結花が練習に顔を出しに来てくれる日。だからといって特別何かをするわけでもない。私はいつもと同じように早めに来て部屋の鍵を受け取り、先に準備を始める。準備が終わったら自主練習を始める。しばらくしたら湊さんが来て、彼女も同じように準備をして練習を始めた。……今日は今井さんが一緒じゃないのね。

「友希那さん、紗夜さん、こんにちはー！」

「…今日も…早いですね」

「あれ？リサ姉はまだなんですか？」

「湊さん」

「私も細かいことは知らないわ。先に行つててと言われたただけだもの」

「今井さん…：間に合うと…いいんですけど」

さすがにそれは大丈夫なんじゃないかしら。今井さんはあれでも遅刻することがありませんから。白金さんと宇田川さんは、今井さんのことを気にかけてつつも準備を始めた。でも、いつもより少しペースが遅いわね。…仕方ないわね。

「少し外に出てきますね。今井さんが来ているか確認もしますので」

「わかったわ。でも、時間までには戻ってきてちょうだい」  
「わかりました」

受付の方まで行くと、今井さんの姿が見えた。ちゃんと間に合っているようだけど、誰かと話しているのかしら。今井さんに声をかけようと近づいていくと、誰と話しているのかがわかった。私たちの待ち人である雄弥さんと結花だわ。

「3人とも、着いてたのなら部屋に来てほしいのだけど」

「あ、紗夜。ごめんごめん。話し始めたら止まらなくてさ。行く、結花、雄弥」

「あら？今井さん、雄弥さんの呼び方変えたのね」

「う、うん。ダメだった？」

「なんで私の許可が必要なんですか…。気にすることでもありませんので」

何故か安堵する今井さんに首を傾げたけど、私までここでゆっくりするわけにもいかないわ。部屋へと引き返して行くと、今井さん達も後ろをついてきてくれた。4人で部屋に戻ると、みんなは雄弥さんと結花も一緒であることに驚いていた。時間通りに来るとは私も思っていたけど、こうやって固まってくるとは思わないものね。

「リサの準備が終わったら練習を始めましよ。雄弥と結花にはあとで指摘してほしいのだけど、いいかしら？」

「わかった。やりやすいようにやってくれたらいい」

「ちやーんと練習を見ておくから、良いのを期待してるよ」

「当然よ。全てをぶつけるわ」

今練習中の曲を演奏して、私達だけで1回振り返ってまた演奏。それから雄弥さんと結花に意見を聞くことになった。



「あこ、ここのとこなんだが…」

「燐子、こつちのパートはね〜」

「紗夜、この小節はだな…」

「友希那サビのとこなんだけどね」

正直、2人の実力を侮っていたわ。私たちより上とは思っていたのだけど、想像以上だった。小さなミスを指摘するだけじゃない。今できていることをさらに良くするためにはどうしたらいいか、そんなことまで意見を出してくれる。そのまま鵜呑みにすることを、2人から禁止されているけど、それは「そうしたらこの曲はRoseliaの曲じゃなくなる」という理由からだ。

「んで、リサはだな」

「お、お手柔らかにー、なんて…」

「上手くなりたくないならそれでもいいが？」

「うぐつ、…上手になりたいよ」

「なら遠慮なく」

一番雄弥くんが指導に力を入れたのが今井さんだった。彼女はたしかにブランクがあるけど、実力は申し分ないはず。彼女の性格上、気にかけてることも多くて、多忙なはずなのに練習量は決して少なくない。それでも一番雄弥くんから指摘を受けるのは、彼もベースを弾いていたからということね。ギターの私も容赦なく指摘されたけど…。並べてみると今井さん>私>宇田川さん、かしら。雄弥くんはドラムの経験はないから、知識とバンドを組んでた頃の経験で言ったのね。

「雄弥ってすごいね。ベース以外にも教えられるなんて」

「そうか？ Augenblickは練習の気分転換で他の楽器を弾く、なんてことをしてたから、むしろ教えれない方がおかしいってなるんだよ」

「ほえ〜」

「てか話をそらそうとするな」

「えへへ、一応頭では理解できてるんだけどさ…、難しいんだよね〜」

「…：リサ、とりあえず最初のキー押さえてみる」

「??ことう?」

「ああ。今から俺が動かすから、それに従ってくれ」

「え、ええ!?!ちよ、ちよちよちよ!まって!」

「待たない。時間の無駄だ」

「うう〜、ドキドキするよお」

……彼はいったい何をしているのかしら?今井さんの後ろに回って、左手も右手も重ねてるけれど、あんなの抱きついてるようにはか見えないわ。雄弥くんの手の動きを今井さんも手を重ねられてることで体感できる、とかそんなやり方なのでしようね。やりにくいからかゆつくり弾いてるけど、今井さんがなかなか出来ていなかったころをしつかり弾いてみせてる。

「つとまあこんなとこなんだが、わかったか?…：リサ?」

「ふにやあく、ゆうやが…あう」

「まったく。雄弥くん、何してるのよ」

「紗夜…。いやこれはだな…」

「わかつてはいるつもりよ。でも、どうしてかしらね?ムシヤクシヤしちゃうのよ」

「そう言われてもな…：」

「はれ?…：あ、紗夜。どうしたの?」

「…今井さんが戻ってきたようなので、ここまでにしておきましょうか」

「え?…え?」

なんのことが分からないと言わんばかりに混乱してる今井さんを置いて、私は自分のスペースに戻ろうとした。…でも、今井さんと

雄弥くんの会話でその足を止めることになった。

「あ、そうだ。雄弥も弾いてみてよ」  
「っ！」

「悪いなりサ。俺には無理だ」

「え？なんで？……あ、そっか。利き手<sup>左</sup>が逆<sup>利</sup>だったね！そりやあ無理だよ。ごめんね」

「…そういうことだ」

「……っ！」

(？氷川…さん？)

練習が終わり、雄弥くと今井さんはアルバイトへと向かっていき、結花はスーパーへと買い物に行った。湊さんは結花と意見交換したことを忘れないようにと、個人練習をするために残るらしい。……私もそうしたかったのだけど、今日はそんな気分じゃなかった。自然と私と白金さん宇田川さんの3人になったのだけど、これと言って話せていなかった。でも、今はそれがありがたかった。それがしばらく続いたのだけど、その沈黙を破ったのは白金さんだった。

「あの…氷川さん…、どうかさされましたか？」

「りんりん？」

「…どういことですか？」

「どこか…引つかかっている…いえ、思い詰めてる…ように見えたので」

「え!?あこ全然わかんなかったよ!そうなんですか?紗夜さん」

「……それは……」

「雄弥さんのこと…ですよね」

「!？」

「紗夜さん!話してください!あこ、何ができるか分からないですけど、紗夜さんの力になりたいです!Roseliaなんですから!」  
「っ……、…少しだけ、お時間をもらってもいいですか?」

「はい」

「もっちらんです！」

「実は…雄弥くんはー、」

私は2人に少しだけ話した。詳細とかを話せるわけでもないから、本当に触りの部分だけを。私たちの間で何があったのかの、ほんの一部を…。

## 19話

今日はとうとう体育祭当日。学園祭同様、招待券があれば他校の生徒も見に来ることが出来る。ちなみに、身内なら招待券はいらわないのだそうだ。

「おはよう雄弥。いろいろと大変な1日になりそうだね」

「愁か。おはよう、主に男子たちの無駄なテンションの上がり方のせいなんだけどな」

「いいんじゃないかな？そのテンションを活かして準備も率先してやってくれたし、生徒会としては大助かりだよ」

「ふーん？ま、片付けの時はそれを使えないだろうがな」

「大丈夫。そこも策があるからね」

「そうかよ」

『ウオおおー！！！！』

「……教室に入らなくていいか？」

「何言ってるの。入らないと駄目だよ。…僕も気が進まないけど」

そう言われてもな。こんな暑苦しいテンションの奴らと同じ空間にいないといけないんだろ？女子たちも冷めた様子で教室の外に出てるし。外にいる女子たちと「暑苦しいな」って話をしてたら、おそらく男子たちの異常なテンションの原因の一つになってるであろう人物が来た。

「おっはよーう☆ところで、なんで外に出てるの？」

「中から聞こえてくる声で察してくれ」

「？」

『諸君！英気は養ってきたであろうな！！』

『当然だ！』

『諸君！今日の宴を貫くのは誰だ！』

『俺達だあー！！』

『よろしい！我々は必勝をここに誓う！』

『ウオおおー！！』

「……なにこれ？」

「男子たちが異常なテンションで暑苦しいから、こうやって外にいるんだよ」

「なるほど」

「あのテンションの高さは今井さんにも原因があるんだろうけどな」

「へ？なんで？」

こいつ、まさか言う気なのか？リサも頑張って意識しないように忘れてきただろうに。それを言うのか？

「だって今井さん仮装競争出るじゃん」

(言いやがった！)

「……あ、……っつ！！」

「リサ、大丈夫か？」

「むりい……」

「だよな。……愁」

「ご、ごめん。あの……雄弥……アイアンクローはちよっ……イタタタタ！！」

「瀬田。アレは？」

「抜かりないさ」

「よかった。俺はリサを保健室に連れてくから、みんな荷物はよろしく」

「はーい！」

「リサのことよろしくー！」

「そろそろ手を離してほし……イタイイタイイタイ！」

愁に制裁を加えたら、リサの手を引いて保健室に移動する。朝一番で生徒が来ると思ってなかったんだろうな。先生が一瞬固まっていた。保健室に来たものの、リサは体調が悪いわけでもどこかを怪我したわけでもない。ただ、落ち着かせるためにも保健室が都合いいというだ

けだ。教室にいない理由も、「保健室に行ってる」ということなら納得されるからな。

「そんなわけで少し休ませてもらいますね」

「どういうわけよ…。戻れそうになつたら戻ってね。私もこの用具を救護テントに運びに行かないといけないから」

「そうですか。お構い無くお仕事してください」

「整理がすんだらそうさせてもらおうわ」

「はい。リサ、ベッド使わせてもらおうか」

「…うん」

「……………おいで」

頷くもその場から動かないリサを誘導し、ひとまずは保健室のベッドに腰掛けさせる。少し寝かせとこうかとも思ったけど、それはリサが断固として拒み、今度はリサに要求を出された。

「…今日…さ」

「うん」

「できるだけ……………側にいて」

「え」

今日の体育祭には、結花はもちろん紗夜や沙綾たちも来る…らしい。来客者と過ごすのは、昼休みの時なんだろうし問題ないんだろうけど、また変な噂とか流れそうな。…………俺は気にしないけどさ、紗夜たちの耳にまで入ると面倒なことになりそうなの…。

俺が返答に詰まっていると、リサが不安そうに目を揺らしつつ俺を見上げてきた。リサは強い女の子だが、耐性が無いものに対しては本当に無力だ。不安になるのは誰しも同じだろうが、リサはそれを感じやすい。友希那は別クラスで、瀬田はファンに囲まれるし、今の氷川には頼りにくいのだろう。そして他の男子たちは元凶だから論外。

「…ダメ……だよね……。……ごめんね」

「いや、いいよ」

「え?」

「今日は一緒にいよう」

「…でも…」

「今のは驚いてただけだから。気にしなくていい」

「ほんと?」

「ああ」

リサの隣に腰掛け、体を引き寄せてリサの頭を撫でつつ俺の心音を聞かせる。結花にやってもらったらすぐ落ち着いたし、結花もこうしてもらったら落ち着けるって言った。リサは最初、体を震わせて離れようとしたが、すぐに押しつけるのをやめて逆に腕を俺の背中に回してきた。

「結花とたまにやることなんだが…、落ち着けたか?」

「…うん。おかげさまで。…でも、お願い…もう少しこうさせて」

「ああ。リサが満足するまでこのままにいるよ」

「……あなた達、せめてカーテン閉めてくれないかしら?」

「ありがとう雄弥」

「気にするな。俺は俺のやりたいようにしてるだけだ」

「そっか。えへへ」

「聞こえてないのね……。はあく、若いっていいわあ…」

~~~~~

結局俺とリサがクラスと合流したのは、グラウンドへの移動が始まった時だった。瀬田と愁が俺とリサの荷物まで運んでくれたのは、感謝しかない。開会式が始まる前の入場行進では、男子たちを前に固めることにした。男子の数が奇数だから俺が男子たちの中で一番後ろに行き、俺の隣にはリサがいるように女子たちに取り計らっても



らった。…妙にツヤツヤした表情で、ニヤけていたのが引つかかったがな。ちなみに、リサの前には愁がいる。

「そーういや選手宣誓って生徒会長がやるんだったな。今日初めて見るわ」

「あれ？転入してきた時に会わなかったの？」

「まあな。別に生徒会に顔を出しに行く必要なかったし」

「へー、そーいうもんなんだね」

「生徒会もルーズだからね。でも、生徒会長は雄弥も知ってる人だよ」  
「…は？」

愁とリサとの会話を一旦中断し、前方に目を向ける。男子たちのおかげでその姿は見えにくいのが、生徒会長が朝礼台に上がっていき、校長の前に立ったおかげでその後ろ姿を見ることができた。…あの姿は、

『――宣誓！我々生徒一同は――、生徒代表、秋宮疾斗！』

「お前かよ！」

「ね？雄弥の知り合いでしょ」

「そーだが…、いや待てまで！あいつ3年だろ!?なんで生徒会長やってんだよ！普通3年は部活も生徒会も引退だろが！」

「疾斗の進路が確定してるのと、人気が高いからかな。ノリで立候補したら当選しちゃったんだよ」

「この学校までもなはずだろ…」

「自分のクラスを思い出しなよ」

「…なるほどな」

「あ、あはは…、女子としては一緒にしてほしくないかな」

「大丈夫。そこは分けて考えてるから」

「そっか。よかった」

開会式が終わり、ラジオ体操も終わったら早速競技が始まる。最初

の競技は、100mリレー。定番のものだが、盛り上がることは間違いない。これを最初に持つてくる学校は、なかなか無い気もするがな。しかも10人でのリレーで男女混合だ。

本気で優勝を狙ってるうちのクラスからは、当然足が速いメンバーが選出される。俺は他の奴らがやりたがらない競技に出て、そこで確実に点を取るといふ役割になっているから、これには出ない。女子からは、大本命といえる氷川も出る。これで負けたら優勝はないだろうな。

「1位取れるかな」

「取ってくれないとな。勢いがつかなくなるし、このメンバーで負けたら他のも勝てない」

「じゃあしつかり応援してあげないとね！」

「え？しなくていいんじゃない？」

「ええ…」

「今でも十分あいつらのモチベーションは高いからな」

『風になる！』

『そう！千の風に！』

『あはは！それ死んじゃってるじゃん！』

「ほらな」

「ほんとだ…。ヒナも楽しそうにしてるし、これなら大丈夫かな」

『あ！おねーちゃん！！見ててねー！絶対勝つからー！』

『ちよつ、日菜！そんな大声で言わないで！』

『なんと！あの麗しき女性が！氷川様のお姉様！』

『者共！半端な姿は見せれぬぞ！』

『承知！！』

「：勝ったな」

「そうだね」

うちの学校は、全体で8クラス。俺たち2年だけ2クラスで、3年と1年は3クラスだ。少ない方な気もするが、その分こういう行事で

は盛り上がりやすい。勝負の形式も学年関係なく全てのクラスが敵だ。1位から8位まではつきり表れる。

グラウンドが大きなおかげで、8クラス同時に走ることができる。これも見所の一つとなるか。勝負は圧倒的だった。異常なテンションで走る男子たち全員が、この体育祭で自己ベストタイムを叩き出したからだ。しかも元から学年でも10位以内に入る連中が、だ。見る見るうちに差が広がったし、アンカーの氷川も容赦なかった。紗夜に良いところを見せたいという思いが強かったんだろうな。最下位のアンカーがバトンを受け取ってすぐにゴールしてた。

「次の競技なんだっけ？」

「ちよつと待ってね、プログラム見るから。えつとく『やれるものならやってみろ。決して玉は入れさせない』……なにこれ？」

「玉入れか」

「わかるんだ…」

「疾斗が名前つけてんだろ。あいつの感性とネーミングセンスを知ってたらわかる。さっきのも『留まることを知らない者たち』って名前だったし」

「プログラムが意味ないじゃん」

「それはそれでいいんじゃないか？ 来客者も次はなんだろうなっていう期待が持てるわけだし」

「それも狙ってるのかな？」

「ありえそうなのが疾斗なんだよな」

玉入れもただ投げればいいわけじゃない。通常の玉入れなら、かごに入れた数が多い組の勝ちだ。しかし、この競技の玉入れは、防ぐことが重要になってくる。自分たちの籠に他のクラスの間人が投げられるのだ。籠に入れられた玉が多いと負ける。それを防ぐために、ダンボール製巨大ハエ叩きを使う。それを各クラス3人まで持つことができ、籠を守るのだ。

ちなみに、うちのクラスはさっきのリレーでぶつちぎりの1位を

取った。その後これをするとなると、当然狙われるのだが。

『何だこいつら！バケモノか！』

『全然玉が入らないぞ！』

『チーターや！チーターやで！』

『薫様がいるのに玉なんて投げれないわ！』

と、まあこんな調子でももの見事に防ぎまくってるのだ。いや、まあ女子連中は瀬田が防ぎ役にいるから投げれてないんだけどな。というか瀬田の応援が始まったし。

それで、こっちのクラスの連中は他のクラスに分散していて、男子たちは高弾道で玉を投げて籠に入れるという芸当をやったのけてる。女子はさすがに数人しかできてないが、…できてるのもおかしいか。まあでも、野球部、アメフト部、ソフト部とかをかき集めたメンバーだしな。女子サッカー部の子なんて投げるのを諦めて、蹴り始めたし…、そのほうが入ってるんだけどな。

「うちのクラスってすごいんだね！」

「そうだな。前半で燃え尽きなかったらいいけど」

「ペース配分ぐらい考えてるよ。…きつと」

「そこは僕がきっちり管理してるから安心してよ」

「出た。策士め」

「え？毛利くんって策士なの？」

「作戦立案、戦術、戦略、現場での対応力。そういうのがずば抜けてんだよ。本人はモヤシ野郎だけど」

「酷いな！人並みの運動はできるよ！」

「あはは、とりあえず毛利くん任せとけばいいってことだよね！」

「ま、そうだな。んじゃ、俺たちはそろそろ集合場所に行くか。さつきから招集がかかってるし」

「……………うん」

なんの招集かと言うと、リサが本気で嫌に思っている”仮装競争”だ。玉入れが始まった時から招集はかかってたんだけどな。できるだけリサに時間をあげたかったから玉入れを観戦してたというわけだ。乗り気になれてないリサの手を引きながら集合場所へと向かう。

(さてと、今日で一番頑張らないとな)

## 20話

アタシが最初に参加する競技が、一番イヤな”仮装競争”。衣装に着替える場所がちゃんと用意されて、アタシは重い足取りでその中に入っただけ。救い…って言うのは分からないけど、入場行進の時は全員がフード付きのマントに身を包むこと。だから、レーンに立って紹介される時にやっとどんな衣装なのか分かるってなること。

「……雄弥が…なんとかしてくれてるって言ってたけど。…でも、少しの間は我慢しないといけないんだよね」

アタシが着ることになる衣装を手にとって、深呼吸してから着替えた。雄弥を信じて、アタシも覚悟を決めなきや。

着替え終わって、マントで身体を隠しながら外に出ると、雄弥が待ってくれていた。アタシは雄弥のところに駆けていったんだけど、慣れない靴のせいで躓いちゃって…。でも、アタシが地面にぶつかるとは無かった。それは、雄弥がアタシを受け止めてくれたから。

(ああ…、この温もりが、優しさが、……好き)

「大丈夫か？」

「うん。ありがとう」

「その靴は慣れない…というか、ヒールで走るのは無理があるだろ。足に悪いぞ」

「あ、あはは…」

「ま、そつちもなんとかするからいいんだけど」

「できるの？」

「ああ。それに、できるできないじゃない。やるんだよ」

「そっか…。お願いね♪」

「任せろ」

競技の時の入場行進は、別に腕を振って足を上げて、とかは言われない。それにみんなマントで見を包んでるしね。アタシはマントで見えにくくなってるのをいいことに、そつと雄弥の手を掴んだ。チラつと顔を見たけど、なんの変化もなくて前を見てた。その事に寂しさを感じたけど、手を握り返されたことですぐに吹き飛んだ。

「俺たちは第一走者だな」

「うん。……あれ？同じクラスなのに一緒に走るの？」

「そこはコネだ」

「…なるほどね」

先生に案内されたレーンに立つと、隣が雄弥で反対側が友希那だった。ここまで知り合いで固めれちゃうんだね。そのおかげなのか、あこ達にすぐに見つかって声援を送ってもらっちゃった。そうそう、中等部と高等部は体育祭の日がちがズレてるんだよね。だからあこは隣子や紗夜と一緒にいる。結花とか他にもバンドで知り合った子たちも固まつてるね。結花の呼びかけかな。みんな一緒にいるの好きそうだし。

「友希那もこれに出るんだね」

「これはみんな手を抜くだろうという前提で選ばれたのよ。運動が苦手な人たちが固まるだろうからって。……そんなこともなかったようだけどね？」

「あ、あはは、アタシと雄弥は、まあいろいろとね」

「そう」

つぐみのアナウンスで、順番に1レーンの子から紹介されていく。ハロウィンっぽいっていう曖昧な基準だから、ただの仮装大会みたいなことになってるんだよね。だって海賊とかハロウィン関係ないじゃん。友希那は、猫をイメージにした衣装だった。なるほどね、友希那が釣られた理由って絶対これだよ。

そうやって達観してたけど、アタシの順番がきた。つぐみもアナウンスで詰まつちやつてるんだけど、やっぱりこんなのアタシ以外ないんだね。それとつぐみ！そんな恥ずかしそうに紹介されたらアタシもキツイんだけど！

「ううー」

「……リサ」

「ゆきなあ、これはねえ」

「クラスの男子たちが原因といったところかしら。：リサにこんなことさせるなんていい度胸してるわね」

薫たち女子陣の抗議のおかげでマシになったとはいえ、露出が多い。肩どころか背中も露出してるし、胸元も見えるようになってる。足の方だつて付け根あたりまで見られちゃうし……。マシになったのがどこかっていうと、おへそのところを隠せたことらしい。あとは、ストッキングを長いやつにできて、手袋も肘まで隠せるオペラ・グローブになったんだとか……。

(ほんと……やだあ……。視線が……)

アタシが羞恥に耐えてる間に、すぐに雄弥の紹介があった。アタシはそれを聞いてる余裕はなかったけど、いつの間にかアタシの前に雄弥が立ってた。大きな帽子を被つてて、どこか道化師っぽいような。

「リサ、3歩前に出てくれ」

「え、う、うん」

「よし、疾斗！マイク！」

「よくわかんねえけど面白そうだ！おらよ！」

「サンキュ……皆様少々お時間を頂きます。今からお見せするのは、わたくし私藤森雄弥が行うマジックでございます」

「ゆ、ゆうや？」



「では早速参りましょう！リサ、信じてくれ」

「！……うん！」

雄弥は、コートの内ポケットに手を入れて、そこから大きな青い布を取り出した。アタシぐらいの人だったらすつぽり覆い隠されるよ  
うな、そんな大きさの布。どうやって収納してたのかも疑問だね。そ  
れだけでもみんなの視線が雄弥に集まる。感じてた視線が減ったの  
が実感できた。

けど、雄弥はそれだけで終わるわけじゃない。アタシにその布を被  
せてきた。アタシは何も聞かされてないからビックリしたけど、布越  
しに雄弥に「ジツとしてくれ」って言われたから言うとおりにした。

「それでは参りましょう。校舎に取り付けてある時計にご注目くださ  
い。…おやおや？針が速いペースで動いてますねえ。しかも逆回り  
です」

アタシは時計がどうなってるのかが見えない。どこかのタイミン  
グで、チャイムがなったことだけはわかった。雄弥はいったい何がし  
たいんだろ。

「ではお時間です。彼女、今井リサさんに改めてご登場いただきま  
しょう」

雄弥に布を勢い良く取り払われた。アタシは何が起きてるのかわ  
かってないから、目を強く瞑ってた。だけど、よく耳をすませたら拍  
手喝采が巻き起こってた。アタシはゆっくり目を見開いて、雄弥の顔  
を見つめる。雄弥は「成功だな」って微笑み返してくれた。なんのこ  
とか分からなかったけど、肌で感じてた風をあまり感じなくなったの  
に気づいた。視線を自分の体に下げると…、

「…………へ？」

「リサ：可愛いドレスね」

「う、…うん。え？え？どうやって？アタシ何もしてないよ!？」

「それを言ったらネタバラシになるだろ。…彼女には、サキュバスから不思議の国のアリスへと衣装変更していただきました。皆様、お時間をいただき、誠にありがとうございます。それと残念がつてる男子諸君、イカレ帽子屋<sup>マッドハッター</sup>が君たちの望み通りにするわけがないだろう」

青いワンピースで、可愛らしい白色のフリルもついでる。本当に絵本に出てくるアリスの衣装とそっくりだ。アタシは助けてくれたことと、こんなに可愛い衣装を着させてくれたことが嬉しくって雄弥に抱きつきながら何回も何回もお礼を言った。

「言つたら。なんとかしてやるって」

「うん。うん！」

「…あなた達、競技前よ」

「あつ、ご、ごめん！」

「さてと、切り替えて競技を始めるとするか」

『リサってばだいたーん★』

『彼女は何を考えているのかしらね？』

『わわっ！結花さん紗夜さん落ち着いてください！りんりん助けてー！』

『お二人とも…お昼休みが…ありますから』

『リサさん凄いなー！ね、沙綾！』

『そうだね香澄。…ほんとに、いろいろとね』

(…何も聞こえてない。うん、何も聞こえてないよ)

この競技でも、アタシたちのクラスがトップを取った。もちろん雄弥とアタシがワンツーフィニッシュってことだよ。…まさかこの衣装でも恥ずかしい目に合うとは思わなかったけど。

~~~~~

私はお昼休みに雄弥と一緒に弁当を食べるって約束してる。R  
oseliaのメンバーとポピパのメンバーと花音も一緒という大  
所帯。まあでも、紗夜は日菜と食べるらしいから、用事がすんだら  
そつちに行くらしい。

(それはともかくとして)

「雄弥くん、午前中のアレはどういうことかしら?」

「さ、紗夜? 雄弥はアタシのために「今井さんも今井さんです!」はい  
!」

紗夜が仁王立ちして、雄弥とリサが正座させられてる。あ、ちゃん  
とシートの上だからね。地べたに直接なんてこと紗夜はさせないか  
ら。

私はそれを遠巻きに見ながらお弁当を広げて、話が終わったらすぐ  
に食べられるようにしてる。重箱を使うときが来るとはね。ま、沙綾  
と一緒に作れたし、千紘さんに教わる事ができたから、全然オツ  
ケーなんだけどね。

「なんですかアレは。大衆の前で!」

「紗夜あの衣装はリサの意思じゃないわ」

「湊さん。私だってそれはわかっています。私が言いたいの、雄弥  
くんに抱きついたことです」「私も抱きつきたいって?」「まったくその  
とお…違うわよ! 結花邪魔しないで!」

「だってお弁当広げ終わったんだもん。それに日菜を待たせていいの  
?」

「くっ……わかったわよ。とにかく今井さん! ああいうことはしない

ようごー!」

「…はい」

「雄弥くんも!」

「わかった」

「絶対雄弥わかってないよ」

「奇遇ね。私もそう思ったわ」

「友希那とは良い友達になれそうだよ」

友希那と握手を交わしてる間に紗夜が日菜のところに行つたことで、雄弥とリサは解放された。紗夜は自覚してるんだろうけど、人前じゃそれを認めないからね。

(…焦り、もあるんだろうね。紗夜が距離を取ってる間に、リサが尋常じゃないペースで雄弥と距離を詰めたから。知らない人からしたらカップルに見えるもん)

「結花も紗綾も、弁当作ってくれてありがとな」

「いえいえ！結花さんとお弁当作れて楽しかったですし、こういう豪華なお弁当の作り方も教われましたから」

「そうそう。それに雄弥にお弁当作るなんて当たり前じゃん？次は雄弥が作ってきてほしいな」

「そりゃもちろん作るぞ」

「紗夜と燐子と花音と千聖と彩とポピパちゃんの分よろしくね！」

「多くね!？」

「こんな感じに重箱とかで作ればいけるよ！」

「いや俺こういうの経験ないし…」

雄弥に大量に弁当を作らせようとノリで話してたら、私の行動は親友の敵に塩を送ることになってしまった。うっかりしてたよ、そうだよね。リサは見た目がギャルっぽいだけであって家庭的な女の子なんだったね。

「あ、あのー、雄弥？」

「ん？どうした？」

「よかつたら、だけどき……その…アタシとお弁当…作らない？」

「結花さん！」

「やらかしちやったね〜」

まあでもなるようになるでしょ。元の鞘に納まる、的な。だって、ああやって紗夜に説教されるのって、昔よく見た光景だったから。変わったのは、雄弥の隣が日菜じゃなくてリサってことだけだね。ともかく、久々に見た見た光景だけど、紗夜も雄弥もその懐かしさもあって、真剣なんだけどどこか楽しそうだった。

（紗夜が距離を戻せるまでに、リサが距離を縮めきれちゃうのか…、そこが別れ目かな）

## 21話

「殲滅だー！」

「捻り潰してやれー！」

「情けなぞ無用ぞ!!」

「返り討ちにしてやれー!!」

「……ヒートアップしてやがんな」

「雄弥も大暴れしてくれないと作戦に支障が出るんだけどね？」

「わーってるよ。適当にあしらってくる」

「頼むよ」

今やってる競技が何かと言うと、騎馬戦だ。体育祭の顔とも言える種目の一つだな。で、この騎馬戦のルールも少し変わってて、全クラスが一斉に競うようになってる。1回戦は最後の1騎まで戦う殲滅戦。8クラスあるから地獄絵図だよな。だって心境からすれば1:7なわけだしな。で、愁が言ってる作戦ってのは、2回戦に向けての布石なんだよな。

(そろそろうちのクラスの奴らも減ってきたな。…というか、だいぶ強いよな。全滅してるクラスもいるのに、まだうちのクラスは二騎しか落ちてないし)

「くたばれ藤森ー！」

「気合入ってんな。よつと」

「おのれえー！次は負けんぞー！」

「…あのテンションって感染でもするのか？」

「うるさいぞ藤森！カッコつく前にさっさと負けやがれ！」

「だがすぐには負けるなよ！うちのクラスの得点に関わる！」

「最低でも三騎は倒せ！そしてその後すぐに負けろ！」

「あのな…」

「こいつ！バケモノか！」

「誰かコイツを止めろー！」

「ん？」

「あれは…」

「生徒会長か」

「さすがのハイスペックぶり…」

（うちのクラスの騎馬は疾斗に落とされていつてんなあ。まあ疾斗のクラスもアイツ一人みたいだし、窮鼠猫を囓むってやつか）

残りの騎馬は十騎ほどか。俺と愁と疾斗と残り。俺と疾斗はフィールドの対極同士にいるが、お互い考えることは同じらしい。乱戦となつてるところに突っ込んでいき、他の騎馬を落としていく、俺と疾斗が三騎ずつ落とし、愁が一騎落とした。だが、俺と疾斗が接触する前に、疾斗は先に愁を落としに行つた。

「お前は先に落とさないと厄介だからなあ！どうせ闇討ちとか考えてただろうし！」

「僕を下衆な人間だと思つてないかい!?…このっ！」

「俺に勝てると思うなよな！」

「あー負けた。…でも、時間稼ぎは十分だね」

「…はあ、雄弥なら一騎打ちまで待つと思つたんだがな」

「潰せるときに潰す。当然だろ？」

「ま、2回戦に繋げられるだけの点は取つたし、よしとしますか」

この騎馬戦は、どれだけ敵を倒したかによって得点変動するようになってる。それは1回戦も2回戦も同じなのだが、2回戦はそこにボーナスポイントがつく。2回戦は大将戦なのだ。大将を討たれたら他の騎馬が残っていても負けで、大将は、他の騎馬より得点が高くなっている。ちなみに、どの生徒が大将なのかは、そのクラスの間と審判を務める教師陣しかわからない。そして2回戦も8クラス同時という混沌っぷり。

「場所は抽選で決められてるわけだが、角がよかつたよな」

「あはは、そこは委員長のかじ運の悪さだよ。ま、作戦は考えてあるわけだし、任せてよ。みんなの実力もわかったことだしね」

「頼むぞ、腹黒」

「ここで悪口言う!?というか腹黒じゃないし！」

抗議してくる愁を無視し、どのクラスがどの場所に配置されたのかを確認する。∴疾斗のそこは角か。くじ運の良さが尋常じゃないんだよなあ。この騎馬戦のフィールドは、長方形の形となっているから、角を取れなかったクラスは自然と潰されやすい位置取りとなる。俺たちもそうなってしまうたわけだが、唯一の救いは疾斗のクラスが遠いことか。

「みんな、作戦はわかってるよね？」

「まずは左のクラスを潰して角を奪う、だろ？」

「任せろ！速攻で片付けてやるよ！」

「うん。フラグを立てないでほしいな」

「始まるぞ」

開始と同時に、俺たちのクラスは左のクラスを潰しにかかった。誰が大将なのかわからないように、全員が攻めに回るといふ諸刃の剣の作戦で、だ。真つ当な考え方をするやつであれば、大将を守るように陣形を組む。左のクラスもそれだったらいい。だからこの作戦が綺麗にハマることとなった。

無駄にスペックが高い奴らが揃ってるからな。守りに入った騎馬たちを巧みに動かさせ、大将までの道を開かせる。そこに残りの騎馬がなだれ込むという戦法だ。ちなみに俺は殿担当。だから――

「藤森を狩るチャンスじゃオラー!!」

「何がなんでもここで藤森を落とせー!!」

「無様に散れ！藤森いー!!」

「カモがやってきたな」



「藤森ってわりと好戦的な正確だよな」

「騎馬戦は隠れた面を見せるものだったか」

「俺たちこんな奴を追いかけ回してたんだな。命知らずって俺たちのことだったのか」

俺以外の全騎馬が左行ったということは、右からの攻撃を俺一人で捌くということになる。右隣のクラスはそれを好機と思うわけだが、これも愁の作戦の内だ。右隣のクラスの意識も左に向く。そうなれば右端のクラスが背中を突ける形となるのだ。だから、俺が突っ込んできてる騎馬を数騎倒してると、勝敗が決する。

『3年A組！大将騎が討たれました！』

「なっ！」

「しまった！C組のやつらにヤられたか！」

「毛利のやつも恐ろしいやつだったのかー」

「これが作戦なんだもんなあ」

「くわばらくわばら」

「愁の作戦はもうちょい広い範囲で効果出してるぞ」

「は？」

「まだ広いのか？」

「少し待ってろ。すぐに実況者が状況を言ってくれる」

『1年B組！大将騎を討たれました！続いて3年C組、1年A組も敗北です！』

「体育祭でテンション上がってる奴らの心情まで利用する。それが愁の作戦だ。これで残りは半分だな」

俺たちのクラスが左を潰して、右隣にいた3年A組をそのさらに右にいる3年C組に討たせる。俺達のクラスが左角を取る時に、角同士で向かい合うことになる1年A組は、ドサクサで俺達のクラスを討とうとした。しかし、それも愁の読み通りで返り討ち。俺達の作戦同様に大将を隠そうとしたらしいが、急造の作戦じゃ粗がでる。それを愁

が見逃すはずもなく、大将騎を見抜いて討ち取ったってことだろうな。3年C組を討ったのが、疾斗がいる3年B組。うまいこと利用してくることも読んでいたが、被害を出さなかったのはこっちの予想を超えてるな。というより、疾斗が単騎で突っ込んだのが予想外すぎるんだよな…。

「さてと、残りも倒しに行こうか！ここからは好きに暴れていいよ！」

「うっしやキター！」

「俺達の見せ場ー！」

結果から言おう。作戦勝ちだった。2年B組を倒し、1年C組も疾斗たちに討たれた。結局1回戦の最後と同じようになったわけだ。違いは残ってる騎馬がお互いに1回戦より多いことだ。それで、向こうは短期決戦で挑んできた。俺か愁が大将だと考え、お互いの能力差を踏まえてのことだったようだ。

しかし、群がつてくるなら俺も倒し放題となった。俺一人でも倒していくなか、クラスの奴らも迎撃に回ったからだ。そうして結局疾斗一人となった。その時には俺が負けてた。愁が疾斗に必死の抵抗を見せ、激戦の末負ける。それで大将が討たれたと誰もが思った。しかし、大将は別のやつだった。疾斗が愁を倒した直後にすきについて倒したのだ。

「愁ってやつぱ性格悪いよな」

「なんで!?!」

~~~~~

毛利くんが作戦を考えた勝負はどれもダントツで勝ってるんだよね。今の騎馬戦もそうだけど、棒引きの結果を反映させて行った棒倒し『奪ってなんぼ』も勝ってたわけだし。これはうちのクラスが優勝するのもありえそうだよねえ。

(なんて考えても、気分転換できてないや。……お姉ちゃんが言ったこと、わけわかんないもん)

『——日菜、あなたは本心と向き合ってるの?』

(……っ!……向き合ってるよ。どれだけ考えてもあたしの中の答えは変わらない。そう言ってるのに、なんでお姉ちゃんはあること言うの……!)

「雄弥カッコよかったよ。バババっ!て次々倒すんだもん!」

「ありがと。…ま、疾斗ほどじゃないんだけどな。アイツ動きが速すぎるんだよ」

「あはは!たしかに生徒会長は別格だったよね。でもでも!その会長にアタシら勝ったわけじゃん?」

「全部愁の読み通りだけだな。途中から好き勝手に動いたのも実際には愁の作戦のうちなわけだし」

「うわ……、毛利くんって…何者?」

「ただの腹黒」

「ありもしないことを言いふらさないでくれないかな?」

リサチーがユウくんに関を寄せながらさつき騎馬戦のことを話してる。あの2人、知らないうちにどんどん距離を詰めてるよね。あーやってユウくんの隣にいたのは……って、そんなのはどうでもいいや。

今は1年生のダンスだけど、この後って借り物競争と障害物競争を合体させたやつだっけ。これも変な名前になってた気がする。

「んじや、そろそろ行ってくる」

「生徒会の人間としては、招集がかかったらすぐに行ってほしいんだけどね」

「いいだろ別に。事前にルール説明もされてるわけだし、早く行っても仕方ない」

「確認とかあるんだけどね…」

「雄弥頑張ってね！」

「ま、程々にやるさ。…なにしてんのリサ」

「雄弥にパワー送ってるの！あと怪我しないようにお祈りも！」

「いや、だから招集かかっているんだから早く行ってよ」

（ユウくんの性格からしてああだからいいとして、リサちゃんも大胆だよ。クラスのテントで抱きついてるって。見せつけてるのかな？）

前半の障害物競争したら、中間地点にお題箱がある。そこに書かれているものを見つけて借りる。したらまた後半も障害物競争になって、ゴール前に今度はクイズが書かれた紙が用意されてる。そこに答えを記入して、正解だったらゴールできる。そんなルールになってたんだっけな。出ようかなって思ったけど、ユウくんが出るからやめた。一緒には出たくないし。（全員参加のは仕方ないけど）

「ヒクナ！楽しんでる？」

「それなりにね。所構わずイチャつくリサちゃんほどじゃないけど」

「い、イチャついてないから！」

「えく？顔赤くしてるってことは、心当たりあるんじゃないの？」

「うぐつ、べ、別に…そんなこと」

「仮装競争でも藤森くんに抱きついて、お昼ご飯の時もイチャイチャしてたみたいだし、さつきも抱きついてたじゃん」

「あ、あれは…その…」

「ま、好きにしたらいいと思うけどね。あ、リサちゃんが好きな人の番だよ」

「なあっ?!ひ、ひなー！」

いやいや、もうみんな分かっていることなわけだし、今さら否定するなんて無理だよ。時すでに遅しってやつだね。それにしても、ユウくんは障害物のことをどう捉えているんだろ。ルールを守っているのに、障害物が障害物の役割果たしてないよ。全然スピード落ちてないよ。

借り物のお題を引いたユウくんは、紙を開いて固まっちゃった。お題が難しいなんてことはないはず。だって当日にあるかないか分か

らないようなものを借り物として設定するわけ無いから。

「雄弥どうしちゃったんだろ」

「う〜ん…、どこに行ったらすぐに見つけれるか考えてる、とか？」

「え、なにそれ？」

「だってあんまり大声出したりする性格じゃないじゃん」

「あ、そっか」

自分で言っておきながら、これは違うって思った。他の走者たちとの差が大きいなら、手当り次第に探してもいいはず。ユウくん足の速さならそれでも十分おつりがくる可能性の方が高い。それが分からないはずない。そう考えてたら、ユウくんがこっちに来た。あたしたちのクラスの人が持つてるもののかな。

「氷川」

「……なに」

「来てくれ」

「……………え？」

「ちよつ、まつて、え？雄弥なんで日菜なの？」

ユウくんの声が聞こえた人全員が思ったであろうことをリサチーが言ってくれた。人を連れて行くので鉄板なネタなら『好きな人』が鉄板だ。それならリサチーを連れて行けばいい。少なくともユウくんも意識してるはずだから。そしてそれならみんなも納得して、盛り上がり、冷やかしの言葉を言ったりできた。でも、ユウくんはあたしを指名した。ユウくんを嫌ってるあたしを。

「お題が”幼馴染”だから」

「…あ…なるほど〜」

「……だったら！お姉ちゃんを連れてけばいいじゃん！」

「氷川の方が近かった。これじゃ不満か？」

「このっ…！」

「俺の考えを理解できないわけじゃないだろ？」

「…………貸し一つだよ」

「ああ」

あたしとの約束を破ったユウくんには、貸しだのなんだの言っても意味ない気がする。でも、ユウくんは意見を曲げないだろうから、ずっと押し問答するよりかは、さっさと協力した方がいい。だからあたしはユウくんの手を取って一緒に走ることにした。本当は手を繋ぐのも嫌だけど。借り物には触れておかないといけない、なんてルールがあるらしいから。

「…平均台か。横向きで渡る？」

「…いや、それよりも抱えた方が早い」

「は？ちよっ、え！下ろしてよ！」

「渡りきつたら下ろすからそれまで待ってくれ。渡ってる途中で落ちたらやり直しだし」

「…あーもう！これも貸しだからね！あたしの体に触ってるわけだし！」

「わかった。それとそんなこと大声で言わないでくれるか」

「ふんだ！みんなに白い目で見られたらいいんだよーだ」

「容赦ないな…」

（だっってお姫様抱っこされてるんだもん！）

平均台を渡るときに妨害役に柔らかいボールを投げってくる人たちがいるんだけど、ボールを投げようとする男子に妨害役の女子がボールをぶつけてた。よくわかんないけど、とりあえず助かったからいいや！ちなみに、ユウくん以外の男の子が渡るときは本気でボールをぶつけてた。特に2年B組には。

ユウくんは無事にクイズに正解して、堂々の1位を取ることができた。なんか当然の結果過ぎたし、呆気なかったなあ。クイズも簡単

だったし。あーでも、彩ちゃんなら必死に考えてたんだろなあ。今みたいにペアでやってたら、『たすけてえー』って、言つてたかも。

(それにしても……、ああーもうモヤモヤする！優勝は確実だから、ビュツフエの時にユウくと答え合わせしよつと！)

~~~~~

アタシたちのクラスは無事に優勝することができた。プログラムの後半から生徒会長のクラスが怒涛の勢いで勝ちまくったけど、なんとか点差を覆されることはなかった。それで、クラスのみんなでビュツフエに来て、思い思いに食べ物を取つてご飯を満喫してた。

——でも、楽しいまんなまでは終われなかった。

珍しく、ヒナの方から雄弥に声をかけて、二人で店の外に出ちゃった。気になってこつそりあとをつけたんだけど、こんなことしなければよかったんだろうね。だって——、

「ねえ藤森くん。借り物であたしがついて行って、クイズに答えただしよ？なんで右手を使わなかったのなんで左手で解答したの？」

「……どういふことだ」

「とぼけないでよ。てつきり両利きになるための練習かと思っただけど、そうじゃないよね」

——右手が使えないんだよね。

(……え、……ヒナは……今……なんて。……おかしなことじゃないはず。だって雄弥くんは左利きなんだから！)

「右利きだったのにさ。あれだけキラキラしてたのに、勿体ないね」  
(なにを……話して……)

『雄弥も弾いてみてよ』

『悪いなりサ。俺には無理だ』

『あ、そっか。左利きだったもんね！』

『……そういうことだ』

(あの時の間って……そういう……ことだったんだ。……あたしは……)



## 22話

日菜に左手を使ったことを指摘されるのは、予想できていた。しかし、まさか右手が使えないことを当てられるとはな。

『いつそうなったのかは知らないけどね』

『…このことは』

『言いふらす気もないよ。そんなのるんっ♪てしないしき。…改めて言うけどさ、あの時のこと、許さないから。忘れないでよ』

日菜が言ったのは、約束を破った日のことなんだろうな。あの時のことは1度たりとも忘れたことはないが、あの時のことを日菜にも知ってもらわなければならないだろうか…。ただの言い訳にしかならないよな。でも、それとは別の問題もあるんだよな。

(リサが話を聞いてたとはな…)

店に戻ってリサに声をかけたら明らかに動揺してたし、視線が俺の右手にいったからすぐに気づいた。日菜との話を聞かれたんだって。そのこの話をしようにも、何も知らないクラスメイトたちがいるんじゃないだろうしよもない。暗がり恐怖がるリサを家まで送っていく、その時に話そうかと思っただが、リサがあからさまに話題を変えるから話すのを諦めた。リサの中で整理がつくのを待つしかないんだろうな。

——何よりも今はそれよりも先に解決しないといけないことがある。

「えっとー、沙綾？」

「っーん」

「いやいや、っーんて…。それに結花も…」

「っーんだ」

「ええ…」

「……雄弥さんは原因をわかってないんですか？」

「心当たりは……ある…」

「間違えたら罰ゲームね」

「さては初めからこの展開に持ち込む気だったな？」

俺の視線を避けるように顔をそらしてるが、笑うのを堪えるのがバレバレなんだよなあ。とは言っても、俺が2人の機嫌を損ねるようなことをしてしまったのも事実なんだろうな。結花たちと話したのは昼休みの時と、閉会式の後のはずだ。あの時の会話に答え、あるいはヒントがあるはず。

「……晩飯か」

「正解！優勝したらピュツフェってのは聞いてたけどさ、何時に帰ってくるかを聞いてなかったんだよね。だから、せっかく沙綾と用意してたお祝いケーキを食べれなかったわけ！」

「それは……そうだな。ごめんな」

「ま、それは今日にでも仕切り直していいとして。雄弥は別にも話すことがあるでしょ？」

「お見通し、か」

「まあね」

「え、なんの話ですか？」

「うーん……まあたぶん沙綾には関係ないことかな」

「そういうことだ。気を悪くしたらごめんな」

「……あの……それってもしかして、雄弥さんの右手のことですか？」

「!!」

まるで時が止まったかのような衝撃だった。まさか、まさか沙綾がそのことに気づくなんて思ってたからだ。なんせ、沙綾と出会ったのはこの街に戻って来てからのことで、左手を違和感なく使えるようになっていたからだ。だから、昔を知らない人たちはみんな、

俺が左利きだと思ってる。

(なのに……沙綾は……なんで……)

「…映像を見たんです」

「映……像……?」

「はい。雄弥さんたちのCDをもらって、他にも曲を聞きたいって思って調べたんです。そしたら音楽番組に出た時の映像があって、…その時に気づいたんです。雄弥さんは元々右利きだったんだって」「そっか。…さすがにネットのはどうしようもないからね。…そっかあ、盲点だったなあ」

「いったい何があったんですか!?あれだけの演奏ができてたのに!」

「……ごめん、それは話せない」

「っ!……私じゃ……駄目なんですか?」

「沙綾?」

「私じゃ……雄弥さんを受け止めれないって!そういうことなんですか!」

(沙綾は何を言って……まで、こんなの、前にも……あ、リサ……)

そうだ。よく似てる。あの時も曖昧なことを言って、それで怒らせたんだった。怒られて、泣かれて……散々だったのにまた同じことをして、…進歩してないじゃないか。顔を伏せてる沙綾の中で、いったいどんな感情が渦巻いているのか。それはわからないが、今やることはそれを確認するなんて無粋なことじゃない。

「ごめんな、沙綾」

「ゆうや……さん……」

「これは俺の一任で話せることじゃないから、だから話せないんだ」「……あ……いえ、わたし、こそ……ごめんな、さい。迷惑……かけて」

「迷惑だなんて思ってない。沙綾は沙綾の心で行動してる。それは大切なことだから、だから自分を責めないでくれ。俺が曖昧なことをするせいなんだし」

「そんな…こと…」

「沙綾は抱え込みがちだよ。それは沙綾の悪いところだよ」

「ゆかさん…」

沙綾が壊れてしまわないように、細い体を優しく抱きしめ、結花が沙綾に小言を言いながら頭を撫でた。なんでも一人で抱え込みがちなのは、沙綾もリサもそして紗夜もだな。そう思っていると横腹を軽くどつかれた。その犯人はもちろん結花なのだが、その目はジト目だった。

「今自分のこと棚に上げて考えてたよね」

「いや、そんなこと「考えてたよね」……かもしれ「考えてたよね」…はい」

「まったくもう」

「ふふっ」

「沙綾？」

「あ、すみません。結花さんがお姉ちゃんみたいだなって」

「みたいじゃなくて、お姉ちゃんなんだけどね。沙綾も私からすれば妹だし」

「え」

「可愛い妹だよ。だから、無理しないで何かあつたら言ってね」

「……はい！」

人のことを「たらし」なんて言ってくるわりに、結花も結構な「たらし」な気がする。女子同士なら仲がいいで片付けれるのがせこい。言い逃れができるってわけだし。まあでも、結花が男に今みたいなのを言っけるところを見たことないんだけどな。

「それじゃ、疾斗に呼ばれてるから」

「行ってらっしゃい。ほら、沙綾も」

「え……。行ってらっしゃい」

「…ああ、行つてきます」

「あははー、沙綾つてば顔赤くなつてない?」

「なつてません」

「そういうことにしようかな。雄弥今日は夜に予定入れないですよ? 昨日できなかったお祝いするからね☆」

「わかった」

~~~~~

今日はRoseliaの練習がなくてバイトしてるんだけど、全然仕事に集中できてなかった。その原因は明らかだ。雄弥の手のことを知らなかったとはいえ、ベースを弾いてほしいって言ったんだから。

(何も言わなかったけど、どれだけ音楽が好きなのか、ベースが好きなのかはアタシでもわかった。楽しそうにしてたから)

本人はベースが好きなのに、本当は弾きたいと思ってるはずなのに! アタシはなんてことを言っちゃったんだろ…!

「…さん…。リーサ〜さん!」

「わわっ! モカ? どうしたの?」

「それはこっちのセリフですよ。ずーっと暗い顔されてますけど、何かあったんですか?」

「…別に…大したことじゃないよ」

「雄弥さんのことですよね?」

「…え」

「Roseliaが今好調なのは、アコちん発トモチん経由で聞いてますから。リサさんがRoselia以外でそれだけ悩むのは、雄弥さん以外ないですから」

なんかアタシが単純な人みたいなことになってるような。でも、そっか。アタシの中じやあ雄弥の存在が R o s e l i a と同じぐらい大きなモノになってるんだ…。フワフワしてそうな雰囲気を漂わせてるのに、この後輩ときたら鋭いんだから。そのボンヤリした瞳でどれだけのことを見抜いてるんだろ。

「タイミングからして、昨日の体育祭で雄弥さんと何かあったんですかね。…もしくは、雄弥さんの秘密でも知ったんですか？」

「モカは何か知って…！……あ」

「やっぱりですか。でも、天才のモカちゃんでも秘密は知りませんよ。リサさんが何を知って、何を思い詰めてるのか、わたしでよければ聞きますよ」

「後輩に相談するのも…まあモカなら言いふらしたりしないし、いいのかな」

「信じてくださいよ」

アタシは、昨日盗み聞きしちゃった話の内容と前にベースを弾いてみてよって言ったことをモカに話した。言葉にすれば呆気ない、本当に呆気なくて、なんでそれだけのことで？って思われても仕方ないことなんだけど、アタシはこれを重く受け止めてて、モカもそれをくみ取ってくれた。

「右利きの雄弥さんが左利き並に左手を使えるように……。リサさんそれは日菜さんが言い当てたんですよね？」

「うん。そうだよ」

「だったら、紗夜さんも当然気づいてるはずですよね？だって練習の場にいたんですから」

「……あ。…たし、かに…でもそれならなんで」

「あの人の性格もあるんでしょうね。厳しい人ですけど、とても優しくして繊細な人ですから。でも、それならリサさんは知るべきだと思いますよ」

「知るべきって…まさか…」

「その通りですよ。雄弥さん達に何があったのか、あの日菜さんが嫌う出来事が何だったのか、紗夜さんが過去にどう関わっているのかを」

「けど、そんなの……」

「完全に余計なことですけど、そうしないとRoseliaの活動に支障が出ますよ？リサさんは思い詰めたものをそのままにして活動できる人じゃないですから。今日のバイトでそれは証明されてますしね」

モカの指摘通り、アタシは考え事をしながら動くななんてことはできない。それが雄弥のことであるならなおさらだ。でも、それでもこれは踏み込んだじゃないことなんだ。誰だって踏み込まれたことがある。この件は雄弥だけじゃない、紗夜も日菜も、もしかしたら結花だって踏み込まれたくない話かもしれないんだから。

「…まあ、リサさん次第ですけどね。わたしが強制したって仕方ないですし」

「そう、だね。…ありがとうモカ。少し整理できたよ」

「どういたしまして」

~~~~~

体育祭があったあの日、雄弥くんはやはり左手を使った。そしてそれを真横にいた日菜が見ていないはずがない。だから、私ももう逃げるのはやめにしないといけないわね。日菜と向き合えないといけない。

(…今となつては今井さんや山吹さんも知る権利があるかもしれないわね)

戻ってきた雄弥くんを支えてくれている2人にも…。雄弥くんはできることが多いから無茶も無理もする。だけど、雄弥くんの心は決して強いわけじゃない。それはずっと一緒にいた私も結花もそして日菜も知っていること。私たち3人で支えていた雄弥くんを、代わりというわけじゃないけども、今井さんと山吹さんが支えてくれている。だから、あの2人にも話さないといけない。

(私だってあの時のことをできることなら話したくない。とても…とても嫌な出来事で、私が雄弥くんから奪ったのだから)

——それでも、向き合おうと決めた。

みんなに話すのだと、問題は日菜がちゃんと場に来てくれるかだけど、そのための協力者をこれから作る。連絡はしているから、あとはその人が来てくれるのを待つだけ。私は羽沢さんのお店に来て、コーヒーをいただくことで気持ちを落ち着かせていた。そうしているとお店の扉が開いて、私の待ち人が来た。正確には待ち人たちね。

「珍しいね。紗夜ちゃんからの誘いなんて」

「しかも日菜ちゃんだけ呼んでないようだけど…」

「お待ちしました。丸山さん、白鷺さん、大和さん、若宮さん。…今回

回は皆さんにお願いがあってお呼びさせていただきました」

「お願い…ワタシたちにですか？」

「ジブン達4人に…ということは、日菜さん関連ということでしょうか？」

「え？日菜ちゃん関連？」

「やっぱり…」

「さすがに大和さんと白鷺さんはお気づきですね。順を追って話させてもらいますので、皆さんも何かお飲み物を」

「わかりました！つぐみさん！タノモー、です！」

「イヴちゃん、それは違うからね」



日菜を除いたパスパレの方々…、こうして同時に話すのは初めてね。…でも、今のやり取りだけでも、彼女たちの仲の良さも、あの飽き性の日菜がなぜ”居場所”だと言うのかが伝わってきた。それだけこのメンバーの絆が強いのだわ。

(この絆の強さを利用するようで心苦しいけれど、…これしか…)

## 23話

今日はパスパレの練習が無い日で、珍しくも全員の予定が空いてる日だった。だからなのか、昨日の練習の後にイヴちゃんがみんなでお出かけしたいと言ったんだ。彩ちゃんもそれにすぐに食いついたし、あたしもるんっ♪てきたからイヴちゃんに賛同した。マヤちゃんもOKを出したことで、千聖ちゃんもOKを出した。

それで、どこに行くかって話になっただけで、千聖ちゃんが行きたい喫茶店があるらしくて、そこに行くことになった。喫茶店巡りが好きらしいんだけど、千聖ちゃんもあやし達の中で一番忙しいから、なかなか喫茶店に行けてないみたい。

そんな千聖ちゃんが行きたがってた喫茶店に着いたんだけど、ここいいね。雰囲気が他の店と違うというか、とにかくるんっ♪てするお店だよ！さっそく中に入ってみると、中もイイ感じだった。喫茶店なのになぜか個室もあるらしくて、店員さんにそこを案内された。なんでモヒカンなんだろう？他にもモヒカンの店員さんが何人もいるけど、店長の趣味？あ、でもモヒカンじゃない人もいるし、一部の男の子中で流行ってるのか？…ま、どうでもいっか！

（あーあ、せっかくイイ気分だったのになあ。まさかこういことだったなんてね）

どういことかと言うと、案内された部屋には先客がいたつてこと。しかも、その先客というのが、お姉ちゃんたちRoseliaのメンバーと結花ちゃんと沙綾ちゃん。もうこれだけでわかつちやつたよ。

「…まさか彩ちゃん達もグルだったなんてね。シヨックだよー」

「っ、ごめんね日菜ちゃん！騙すようなマネしちゃって！」

「日菜…どうか丸山さんたちを責めないであげて、彼女たちには、私がお願いしたのだから」

「ふーん？……なるほどなるほど、ユウくん関連の話か。お姉ちゃん前から『向き合え』って言ってたもんね。けど、あたしの中の答えは変わらないけどなく。ちゃんと自分の中で考えたんだよ？考えた結果変わらない、それだけのことだよ」

「……そう。でもね日菜。だからこそあなたは知らないといけないことがあるわ」

「知らないといけないこと？……とりあえず席に着けばいいのかな？」

「そうね。話は長くなると思うから」

「わかった」

この部屋に用意されたテーブルは長方形になってて、椅子が『コ』の字に用意されてた。横に5席ずつで、縦に2席。その2席にはお姉ちゃんと結花ちゃんが座ってるから、2人がこの話の進行役ってことかな。あたしは端っこに座って、左斜め前にお姉ちゃんと結花ちゃん、正面にはリサちゃんがいて、右隣が彩ちゃん。

ちなみに、あたし↓彩ちゃん↓千聖ちゃん↓イヴちゃん↓マヤちゃん↓の順で。向かい側は、リサちゃん↓沙綾ちゃん↓友希那ちゃん↓あこちゃん↓燐子ちゃんの順だね。全員分の飲み物が運ばれてきたら、準備完了。お姉ちゃんに話してもらわないとね。

「それで？話って？」

「日菜…私はあなたに謝らないといけないことがあるわ」

「…え？」

「……ずっとあなたに拒まれるのが怖くて、それでいてあなたに勝手にコンプレックスを抱いていたから、今まで話せなかったのだけど……、雄弥くんが日菜との約束を破った原因は——私よ」

「……っ!!?……な、…なに…言ってるの?……お姉ちゃんが?……そんなわけ……」

「あなたと雄弥くんとの間で、どんな約束があったのかは知らないけれど、…だけど、天体観測の約束を破らせたのは間違いなく私のせいなのよ」

「意味が……わからないよ……」

「あなたの言っていた”あの時”というのは、…天体観測の日なのよね？」

「う、うん。…でも！それはユウくんが勝手に……お姉ちゃんは関係ないはずじゃん！」

「あるのよー」

「っ!!」

「…順を追って説明するから、最後まで聞いてちょうだい」

——それであなたに嫌われても仕方がないわ。それだけのことをしたのだから。

お姉ちゃんは、目を伏せてそんな言葉を紡いだ。なんでそんなこと言うんだろ……。だって、あたしはお姉ちゃんのことを大好きで、嫌いになるわけがないのに……。

みんな、ビツクリしてたり目を細めて言葉の真意を確かめようとしてたり、そうやって別れてた。だけど、共通してるのはお姉ちゃんに視線が集まってること。お姉ちゃんは、一度みんなの顔を見渡してから深呼吸して語り始めた。お姉ちゃんに責任がある、なんていう話を。どうやら、結花ちゃんの補足付きみたいだけど。結花ちゃんは、今この場にはいないユウくんから話を全部聞いてるらしいからね。

☆☆☆☆

☆☆☆☆

「失礼しました。…日誌も出し終わったし、仕事はこれで終わりだったな」

(あ、教室にプリント忘れてんだったな。取りに行つて帰るか)

「ユウウーくん！」

「うおっ！…日菜、飛びつくのやめてくれって言ってるだろ」

「えー。これがあたし達じゃん？」

「どうということだ……」

「それよりさ！ユウくん今日の夜は予定空いてたよね！」

「夜？そりゃあ予定空いてるけど」

「やった！じゃあ決まりだね！」

「何がだ」

「何って、そりゃあ天体観測に決まってるじゃん！」

なんで分からないの！と言いたそうな顔で頬を膨らませられてもな。そりゃあ候補として上げてはいたが、流星群の時期じゃないから違うだろうって思ってた除外したんだよ。なんてことを言っても仕方ないし、帰ったら荷物の準備でもするか。日菜のことだから、晩御飯食べてすぐに出発したいんだろうし。

「場所は？どうせご両親に言っていないんだろうし、車もないだろ」

「ふっふっふー、いいスポット見てくれたんだ♪あたしもまだそこで見たいけど、今日はそこでユウくんとお姉ちゃんと結花ちゃんの4人で星を見たいなって！」

「なるほどな。俺はこれからプリント取りに教室戻るし、紗夜も委員会があつてまだ学校にいるはずだから、紗夜には俺が言っとくぞ」

「ありがとう！あたしはこれから結花ちゃんと帰るから、結花ちゃんにはあたしから言っとくね！」

「ああ。それじゃあまた後でな」

「うんー！」

日菜と放課後…というか夜の予定を決め、昇降口で別れた。紗夜は鞆を教室に置いてたはずだから、うまいこと会うことができるだろう。委員会が長引いてるなら、待つとけばいいだけの話だし。

A u g e n b l i c kで活動を始めてからというものの、天体観測はあまり行えていない。日菜や紗夜とは毎日のように会っているが、4人で遊びに行くのは何気に久しぶりだ。急遽決まったこの後の予定を楽しみにしていたのだが、教室に戻ったらその気持ちが追いやられてしまった。

くくくく

委員会の用事が終わって、私は教室に戻った。委員会に行く時はいつも鞆ごと持っていくのだけど、今日は雄弥くんが日直だったから荷物を見とってもらえるから置いていった。日誌を出すときだけ雄弥くんの目も離れてしまうのだけど、それは少ない時間だし問題ないと思っただの。

教室に戻ったら雄弥くんの姿はなかった。今は日誌を出しに行ってるのかしらね。私は自分の鞆に荷物を片付け、チラツと雄弥くんの机を見た。と言っても隣が雄弥くんなのだけど、雄弥くんはどうやらプリントを忘れてしまってるようね。これ明日提出しないといけないし、後で渡してあげなきゃ。そう思ってプリントをファイルに閉まっていると、不意に声をかけられた。

「やあ紗夜さん、ちよつといいか？」

「…神木くん？なにかしら？」

神木仁くん。同じクラスの男の子なのだけど、学年…いや学校で最も素行が悪い人。雄弥くんが言うには、神木くんは自分の中の基準に従って行動してるだけのこと。どこまでの真っ直ぐに自分の考えた道を歩む人なのだろう。それが浮いてるように見える原因となってしまうって、出る杭が打たれるように批判を浴びてしまい、その結果先生の言うことも聞かなくなっちゃった、らしい。

雄弥くんは相手のことをしっかりと理解できる人だ。ここまでのことを分かっている、それでなお「仲良くはなれない」と言った。つまり、距離を縮めてはいけない部類の人…。

そんな彼だけど、私は人が変われると信じているから、行動に注意することをやめなかった。ただし、距離は絶対に縮めない。それだけはいけないと私も感じ取っているからだ。なによりも、彼は日菜を狙ってる。日菜は未知に興味を示すから、神木くんもその対象

になる。恐れを知らないあの子を私たちが止めてるのだけど、グイグイ行く日菜にあらうことか神木くんまで興味を示してしまった。

「紗夜さんも日菜さんも雄弥と仲いいよなあ?」

「そうね。小学校に入る前からの付き合いだもの」

「で、2人とも雄弥に惹かれてるわけだ」

「なっ……!!そ、そんなことないわよ!」

「いやいやそんな顔を真っ赤にして否定されてもな。誰でも分かることだからな。同学年の奴らみんな分かってるぜ?」

「うそ……」

「むしろなんで隠せてると思ってるんだか……。ま、いや。それでさあ?雄弥の奴も2人のことが好きなのじゃん?」

「そ、そうかしら」

「…めっちゃ顔ニヤけてる」

「に、ニヤけてないわよ!」

「緩みっぱなしだぞー」

そ、そんなこと言われても仕方ないじゃない。私たち姉妹はたしかに雄弥くんのが好きなのわけで、考えが読めない雄弥くんも私たちのことを好きでいてくれるかもって分かったんだから。

「そこでさあ。ふと思ったんだけどな?雄弥はよ、

本当に紗夜さんが好きなのかわかんねえよな」

「……………え……………なにを……………いつて」

「思い返してみたら心当たりあるんじゃないかねえか?日菜さんに向けてる笑顔と紗夜さんに向けてる笑顔、あれは同じ別の笑顔じゃないだろ」

「!!?」

(う……そよ……。そんな……こと……)

私が混乱しているうちに神木くんが私の目の前まで迫ってきていて、そつと耳打ちをされた。

——かわいそうな子だな

それが私の心に嫌というほど突き刺さった。思い当たる節がないわけじゃないからだ。たしかに雄弥くんは、私に向ける笑顔は温かいもので、日菜という時は弾けるような笑顔をしていたから。それは日菜の笑顔につられてのものだと思っていた。日菜の笑顔はそれだけ無邪気なものだから。でも、もし本当に神木くんの言うとおりでっら……。

「なあ紗夜、俺のモノになれよ」

「……え……」

私はこの時になってやっと理解した。全てを悟ることができた。神木くんは日菜を狙ってたんじゃない。初めから狙いは日菜じゃなくて私だったんだ。私だと悟っていたらこうやって話すことも無かったから、だから別だと思わされてたんだ。日菜を守るために私が壁となるのだから、自ずと会話することになるし、この状況を作り出せるから。

混乱した頭ではろくなことも考えられない。だけど、危機感死んでいない。私は本能に従って逃げようと思った。だけど、目の前に神木くんがいるのでは逃げられない。すぐに腕を掴まれてしまい、ドラマでよく犯人が人質を取ったときのように拘束された。私は後ろにいる神木くんを睨みつけたけど、本人は楽しそうに口角を釣り上げていた。

「いやあ、役者が揃う前にこの状況にできてよかったぜ」

「役者……？」

「なあ雄弥？」

「え……雄弥……くん……？」

「何をしている仁。おふざけってわけでもなさそうだな？どっちにしても許す気もないが」



「簡単な話だよ雄弥。俺がテメエの紗夜を奪う。そんだけのことだ」

「誰があなたなんかに！」

「黙ってろ」

「っ!!」

「ナイフ持ち込んでんのかよ…」

いったいどこに隠し持っていたのか、それは分からないけど、神木くんはナイフを私の喉元にナイフを突き立てられて脅迫される。私はその恐怖で何もできなくなってしまうた。

「それにしても薄情だよな」

「何がだ」

「女を危険に晒されておいて冷静なんだからよお。要はその程度の関係だったってことだろ？」

「ははっ。煽っても意味ねえぞ。怒り狂う俺を見たかったんだろうが、お前の期待に応える気はない。…返してもらおうぞ」

「お見通しかあ。でも、これでも冷静でいられるのかよ！」

——ビリ…

その音がいったいなんの音なのか分からなかった。だけど、急に肌が外気に晒されたのを感じてわかった。視線を下げると、私の制服が切られてて…。

「や…いやああああ!!」

「仁!!」

「ハハハ！やつとキレたか！にしても、綺麗な形してんなあ。おら、愛しの雄弥くんにも見ってもらえよー！」

「や…やだあ…雄弥くん…見ないで…」

「イイねえ！そういうの！」

「…この…ゲスが！」

「おっと動くなよ雄弥。お前の大切な紗夜ちゃんが傷つくぜ？」

「テメエ…」

このままじゃ……雄弥くんの前でもっと恥ずかし目られる……。そんなのは嫌だと思った私は、恐怖心も羞恥心も堪えて神木くんのスネを強く蹴った。それで隙を作って逃げようと思ったから。けど、神木くんはその痛みに耐えて私を床に叩き付けた。私は床に叩きつけられた痛みに怯んで、少し遅れて目を開いた。私は仰向けになつてるよううで、神木くんのナイフが振り下ろされようとしていた。

「オイタをする子には、ちよーつとお仕置きが必要だよなあ！」  
「ひっ……！」

私は目を強く瞑って顔をそらした。そうしたところで何が変わるわけでもない。逃げてるわけじゃないし、防ごうとしてるわけでもないのだから、結末は変わらない。

そうだというのに、私にはなんの痛みも与えられなかった。その代わりに、私の顔には何かが飛び散った。液体の何かが。

（いったい……なにが……。これ……赤い。……赤？……これって……血!?）

視線を上げると、私と神木くんのナイフの間に誰かの右手があった。いや、誰かなんて分かつてる。この場にいる人間なのだから、その手は雄弥くんの手だ。その手をナイフが貫いていて、その手から出た血が私の顔にかかっているのだ。

「ゆ……雄弥くん！」

「クククツ、やっぱそう動くよなあ？ええ？雄弥よお」

「……つつ……。仁……お前にしちや無茶苦茶だな。一貫性がないぞ」

「うるせえ……よ！」

「がっ……ああつ！」

「や、やめっ……！」

刺さっているナイフを動かすことで、雄弥くんの右手が挟られる。ベースを奏でるための大切な右手が！雄弥くんは痛みに耐えているけど、手からの出血が酷い。それに、あんなことされたらベースが！

「雄弥よ、紗夜をくれたらそれでいいんだぜ？」

「ふざけたことを……ぬかすな!!」

「がふっ……なん……がっ！」

「はあはあ……お前が挟り続けるからだ。おかげで痛覚が麻痺してきた」

「コイツ！」

「何本ナイフ持つてんだよ……」

雄弥くんの膝蹴りが神木くんの溝うちに命中して、蹲ったところを蹴り飛ばしていた。神木くんが立ち上がる間に手に刺さったナイフを引き抜いていたのだけど……、見てるこっちの方が辛いわ。ナイフが一応栓の代わりになってたみたいで、さつきよりも血が流れてるし……。立ち上がった神木くんは、またナイフを取り出して雄弥くんに突き刺そうとした。

「直線的すぎ」

「なっ……あがっ……ああああ!!腕が！腕があ！」

「騒ぐな。綺麗に折ってやったから病院でちゃんと治療してもらえば元に戻る」

「なんの騒ぎだ！……神木？藤森？……それにひか……なんてかつこしてるんだ！」

「あ……これは！」

「先生へんたいい」

「不可抗力だろ!？」

「紗夜、これでも着てる」

「……ありがとう」

雄弥くんの体操服のジャージを渡されて、私はそれに袖を通した。まだ冬服の時期じゃないし、そもそも夏服の時期なのだけど、雄弥くんはいつも体調が悪い人のためにジャージを持ってきている。

「も、もう先生は振り返って大丈夫か？」

「あ、はい」

「ふう…。それでなにがあつ…。その手はどうした!？」

「リアクションがいいですねえ」

「学生の時はよくお笑いを担当…。じゃなくてだな！」

「仁が紗夜を襲おうとした。止めに入ったらこうなった。詳細は後日ということで、仁を病院に連れて行ってあげてください。俺は保健室行つてきますんで」

「藤森もすぐに病院へ連れて行くべきだろ！」

「応急処置が必要でしょ。それに、骨はできるだけ早く治した方がいいですから」

「だが！「お願いします」…。わかった。絶対にすぐに病院へ行けよ！」

「分かってますよ」

先生は神木くんを抱えて大慌てで走り去って行った。教室に残ったのは私と雄弥くんだけ。でもすぐに手当しないといけないから、私が2人分の荷物を持って急いで保健室にいった。

「手当なら自分でできるから」

「駄目よ。私ができるわ。消毒するから耐えてね」

「大丈夫。感覚麻痺してつから。…あ、でも変な感じするなあ」

「何をのんきに……。ほら包帯巻くわよ」

「ありがと、紗夜。……。紗夜？」

包帯を巻き終わったところでお礼を言われたのだけど、なんで私が

お礼言われるのよ。…だって、私のせいで雄弥くんがこんな大怪我を！

私は自分を責めた。責めて責めて責めて責めて責めて責めて責めて責めて責めて責めて責めた。もう雄弥くんの側にいる資格なんてない。この怪我じゃベースを弾くことは…、私のせいで、私が奪ったんだ。雄弥くんの努力も才能も今の居場所も何もかも——私が！

溢れでる涙が止まることはない。雄弥くんの顔を見ることなんてできない。名前を呼ばれても俯いたまま首を振った。

「もう、私なんて雄弥くんの隣にいちや——」

(あ……)

私の言葉を遮るように顎を上げられて、言葉を紡いでいた口は雄弥くんの口で塞がれた。理解ができなかった。なんで私なんか。どれだけそうしていたのか分からない。時間を忘れてそうしていると、雄弥くんの方から離れた。

「紗夜。俺は紗夜のことが好きだ。愛してる。だからそんなこと言わないでくれ」

「…なんで…だって私は雄弥くんを！…私のせいで右手が！」

「右手は…まあ大丈夫だろ。あいつどこで覚えたのか知らないが、わりとキレイに刺してたからな。ちゃんと治療してリハビリすればまたベース弾ける気がする」

「そんな…こと…」

「ま、医者に聞かねえとわからんわな。それはこの後ということ、…紗夜に怪我がなくてよかった。あ、そうだ。日菜が今日天体観測しよってさ」

「っ…あなたは…」

「むぐっ」

彼の底の無しの優しさが辛かった。罰が欲しかった。だけど、それ

と同時にその優しさに癒やされた。心を救われた。だから、今度は私から雄弥くんと口を重ねに行った。

☆☆☆

「……分かったかしら。私のせいで雄弥くんは右手が使えなくなつて、その後に病院に行ったの。だから、天体観測の約束を守れなかったのよ。…恨むなら……私を恨みなさい」

「おねえ…ちゃん」

「そんなことがあつたんだ…」

「でも、でもそれって紗夜さんのせいじゃなくて、神木さんって人のせいじゃないですか！」

「あこちゃん…。そう…だね。……私も…そう思います」

「私が彼をもっと警戒しておけばよかったです。だから私のせいなんです」

「紗夜。疑問に思ったのだけど、雄弥が天体観測に行けなくなったのなら、それを日菜に連絡すればよかったです。ただのことじゃないの？なぜ雄弥は日菜に連絡しなかったの？…紗夜は精神的にそれができなかったのでしょうか」

「それは……」

「そのことは私が話すね」

「結花ちゃんが？」

「彩ちゃん。結花は雄弥くんから全て聞いているのよ」

「あ、そっか」

「…うん。それもあつたけど。その後のことは、私も関わって…るから。むしろ、こっちの話の方が天体観測の件に直結してるしね」

## 24話

「私の話をするためにも、まず知っておいてもらわないといけないことがあるんだ」

「知っておかないといけないこと？」

「そう。…紗夜と日菜も知らないことなんだけどね」

「私たちも…」

「知らないこと…」

カップに手を添え、反射されて写る自分の顔を見つめた。なんとも酷い顔だね。でも、思い出すだけでも辛い記憶だからね。少しでも気持ち落ち着けばと思つて一口飲んだけど、怖さは消えないね。

「もうこの世にいないんだ。私たちの親は」

「ちよ、ちよつと待つてください結花さん。だつて雄弥さんは、『親はどつちも忙しく働いてて海外に行つてる』つて以前言つてましたよ！」

「そうよ。私だつてそう聞いたわ。どういふことなの？」

「紗綾と紗夜が聞いたのは、私と雄弥で決めといた嘘だよ。だつて、高校生2人で生活してるのつて普通に考えたら、世間から変な目で見られるからね。そして、細かい話をするとな私と雄弥は血の繋がりがありません」

「……え」

「あはは…、物心ついた時から一緒だったから、私たちも初めて知ったときは信じられなかったんだけどね」

『おねえちゃ……結花』

『つ!!…やだよ』

『え?』

『いやだよ!わたし、雄弥のおねえちゃんのままでいたいよ!お願い…だから!姉弟でいようよ!』

『…あ……うん。おねえちゃん。僕たち、絶対一緒にいようね』

『うん、うん！約束！』

『うん。指切りしよ！』

「私の両親は離婚して私は父親に引き取られた。雄弥の方は、お父さんが亡くなって、お母さんが育てることになった。元々付き合いがあったらしくて、私の父親と雄弥の母親で再婚したんだ。それが私たちが2歳の時だよ」

——今言ったことを頭に留めといてね

☆☆☆☆

☆☆☆☆

「この怪我はどう考えても警察沙汰なんだけど？」

「実際警察沙汰になるんじゃないですか？強姦未遂に殺傷事件ですから。誰も死んでませんけど」

「さつき整形外科に運ばれてた子かな？」

「特定はしないべきでしょ」

「そうだね。それで君の右手だけど、時間がかかるのは仕方ないけども治るよ。手術は必要だけどね」

「ま、そうですよね」

「それでね、親御さんに話を通さないといけないんだよね。ほら、君中学生だし」

「卒業してたら自己判断でいけたんですかね？」

「まあ一応はね。正確には成人したら、なんだけど。高校生も一応は大人扱いされたりするし」

「なるほど」

当然のことながら、手術はすぐにしたほうがいい。そんなわけで家に電話したのだが、誰も出なかった。親と連絡がつかないということ。を先生に言うと、「本当に申し訳ないけど、明日の朝一番に来てほしい。この紙に親御さんのサイン付きで」と言われた。

救急車で運び込まれたら緊急ということ。で手術できたみたいなの



だが、俺が平然と総合受付に行つてたから優先度が低いと判断されちゃつたらしい。包帯も巻いてて怪我の具合を判断できなかったというのも、原因なんだろうな。

ちなみに、紗夜は先に帰らせた。病院もついてくると言っていたのだが、憔悴しきつてる紗夜を付き合わせるわけにはいかないからな。休んでくれと頼み込んで、紗夜に折れてもらった。

「とりあえず、治るとわかつてよかつた〜」

「ゆうーやー!!」

「うおっ!…結花?どうした?」

「どうしたじゃないよ!!先生から話聞いたの!大丈夫なの!」

「うん。診察も終わったし、手術してしつかり治せばまたベース弾けるつてよ。まあ手のリハビリの後に元のレベル戻るためのリハビリもあるから、大分先のことだろうけど」

「そんなのいいよ!…よかつた!…ほんとうに…よかつたあ」

「結花…。ごめん、心配かけて」

「いいの。雄弥が無事なら。ほら、荷物は私が持つから!」

「これぐらい「だめ!怪我人でしょ!」…わかつた。よろしく」

「うん!」

結花に鞆を持ってもらつて、肩を並べて家までの道を歩き始めた。家に帰ったら手術のことを話さないといけないな。そういや、仁のやつはどうなるんだろ。少年院にでも送られるのか?…ま、学校の判断しだいな気もするが、さすがに今回は警察が入ってくるだろうな。

「…父さんに言わないとだね」

「そうだな。…家にいるはずなんだが、さつき連絡つかなかったんだよなあ」

「じゃあ、まただね」

「そうだな。タイミングが悪いつたらありやしない」

「…うん」

「けど、あと半年だ。卒業したらって考えたら半年もないけど」

「そうだね…。ゼファーが用意してくれてるもんね」

「ああ」

結花に学校であったことを話していると、いつの間にか家に着いた。気がすすまないが、家へと入るとしよう。近所の人は誰も知らない最悪の我が家へと。氷川家でさえ、この家の実情は知らない。あれだけ家族での交流があったのに、だ。本性を隠すのが上手いんだろうな。

「…ふん、帰ったか」

「……父さんまた昼間から呑んで」

「オレの自由だろ？」

「そうだな」

「ふんっ。……あん？なんだその右手の包帯は」

「ちよつとトラブってな。明日手術しないといけなくなつた」

「手術だ?! バンド活動はどうする気だ!!」

「手術しないと治らねえんだよ。ちゃんと治してリハビリすればまたベースは弾ける。それまでは、少なくとも俺は活動を休むしかないな」

「このグズが！なぜそんな怪我をしてくる！」

やっぱり酒が入っているとヒートアップするのが早いな。この男は別に俺のことを案じて言ってるんじゃない。収入源が無くなることを怒ってるんだ。

俺たちがバンド活動を始めて、ブレイクし始めたと同時にこの男は仕事を捨てた。俺と結花の稼ぎを自分の私腹にできるからだ。元から巨万の富を得ていたくせに、節約家の一面もあったから莫大の貯金がある。しかしそれは自分の趣味に費やすためのもの。決して家族のためじゃない。……いや、そもそもコイツにとって俺たちが家族というカテゴリーに入ってるのも疑わしい。

それで、莫大な貯金があるのに、なぜ俺たちの収入を頼るのかと言うと、ありふれた話だ。酒とギャンブルに溺れて大損したからだ。知識もなく株に手を出したのも追い打ちをかけていたか。

「お前たちに生活の場を与えてやる！その見返りにお前たちはオレに金を貢ぐ！それぐらいのことも守れんのか！」

「治ればまた稼げる。俺たちには多額の稼ぎがあつたはずだ。それで食いつなげるだろ」

「そんなもの既に消えておるわ!!」

（馬鹿か！なんであれだけの金がすぐに無くなる！なんで学ばないんだこの男は!!）

「大丈夫だよ父さん。雄弥が休んでる間、私が今以上に頑張ればいいんだからさ」

「お前一人の稼ぎで……いや、待てよ……ああ、そうだな」

嫌な予感がした。怒髪天とばかりに怒っていた男が急に考え込んだと思つたら、今度は下卑た笑みを浮かべるんだからな。

「そうだよなあ。弟の失態を取り返すのが姉だよなあ」

「まあね」

「そうだな。体を使って今以上に稼いでもらうとするかあ！」

「うん……うん??」

「まさか……」

「結花ならよく稼げるだろうさ！中学生ながらにその体なんだからなあ!!」

「ちよつ、え？父さん……冗談……だよね？」

「冗談？そんなわけないだろ。さつそく明日から稼いでもらうとするか！はっはっはっはっは!!」

「そんな……。やだよ……そんなのやだよ!!」

「口答えするな!!」

「きやあ！」

「結花！」

クソ親父が結花の顔を殴った。まさか結花を殴ると思ってたなかつた俺はそれを防ぐことができず、俺が駆け寄るも先にクソ親父が結花に馬乗りになった。

「弟の代わりに稼ぐ。そう言ったのは結花だろお？」

「それは、バンド活動でって意味で！」

「ベースがいないバンドでどうやってたら今以上に稼げるっていうんだ？そんなのより身を売ったほうが手っ取り早く稼げるだろうが！」

「なんで……私……父さんの娘だよ？」

「そうだな。だから父さんのために稼げ」

「いや……いやあ……」

「ハッ！お前達が大好きな母さんと同じ道だぞ？喜んだらどうなんだ？」

「……え」

「はっ？」

コイツは何を言っているんだ？身を売ることが、母さんと同じ道になる？母さんは今も海外ブランドで働いてるんじゃないのか？だって、母さんはたしかにそう言っただけ家を出て……。

「あの女とオレの間になぜ子どもがいらないか分かるか？あの女、菜々が拒み続けたからだ。前の旦那を忘れられないとホザいてな！名字からしてそうだ！『藤森』もあの男、雄二の名字だ！そもそもあの二人を！雄二と菜々の仲立ちをしたのもオレだ！雄二よりもオレと菜々の方が付き合いが長かった！菜々も雄二もお互いに意識しあっているのは、オレが一番嫌というほど分かっていた！どうあっても菜々は振り向かない！だから相談しに来た雄二と手を結ぶことにしたんだ！菜々とくっつけさせる札に一度菜々を抱くと！だがあの男は約束を破った！だから事故に見せかけて殺してやったんだ！」

「お前……が……父さんを？」

「ああそうだ！殺してやったさ！そのショックに打ちひしがれる菜々に接近するために！その狙いは達成できたが、本来の目的は達成できなかつた。寝室を別にされ、部屋の鍵も外からは開けられないようにされた。そうやって雄二のことを忘れないようにしてたんだ！その鍵を突破したのが去年だ。突破して犯してやったが、そうしたら離婚すると言いはじめた。だから知り合いに連絡して売り払ったんだ。あの女のその稼ぎもオレの財産とする契約でな！つまりあの女はひたすら身を犠牲にするようにさせたんだよ!!ま、1週間経たずに自分で命を絶つたらしいがな」

「そん……な。かあ……さん」

「雄弥……」

ショックのあまり、無意識のうちに膝をついていた。しかし、そんなことに気を回してるほどの余裕なんてなかった。あれほど優しく、人を笑顔にさせる母さんが自殺に追い込まれたんだから。

『雄弥おいで』

『うん！』

『女の子を守る子になつてね。騙しちやだめよ』

『そんなことしないよ！』

『ふふっ、いい子ね。あら？結花もそんなことないでこっちにおいで。一緒に本を読みましょ』

『……うん！』

(あの母さんを……！こいつが!!しかも父さんまで!!)

今すぐ殴り飛ばしてやりたい。けど、まだ中学生なんだ。ゼファーが手を回してるし、事務所が面倒を見てくれるかもしれないが、俺がここでやらかしたら結花を1人にさせてしまう……！

「あの反省を活かして、結花には自殺できないようにさせておかない

となあ」

「ひっ…！やめてよ！そんなのやだよ！」

「まずは耐性をつけさせないとなあ。安心しろ。今からたっぷり調教してやるから」

「やめて！やめてってば！いや！いやああ！」

「やはり中学生ながら発育がいいな。胸もある、僅かながらクビレもある。これならよく売れるなあ。よかつたなあ結花。たくさん愛されるぞ？」

「そんなの…！」

「ああ安心しろ。後から氷川家の姉妹も送り込んでやるから」

——ブチッ

「ハハハ！仲良く3人で楽しむといい！」

「いやああ！助けて！助けてよ雄弥ああ!!」

~~~~~

気がついた時には全てが終わっていた。

荒れまくった部屋。どういふことか、なぜか床に転がってるゴルフのアイアン。目から血を流して横たわってるクソ親父。

涙を流してひたすら謝り続けてる結花。

そして、頭から血を流してる俺。包帯が巻かれていた右手の感覚が失われていて、真っ白な包帯も赤黒く染まっていた。

(ああそうか。俺は殺人を犯したのか)

「ハハッ…ハハハ！」

「ゆう…や？」

「ハハハハハハ！あつははははハハハハ!!」

親殺しだ。殺人を犯したんだ！

あのままでも結花とは離れ離れになった。1人にさせてしまうことになった。だが！親を殺したならどのみち結花と一緒にいること

はできない！結局1人にさせることになるんだ！

——もう結花と2人で家を出て、また紗夜と日菜と4人で……そんな願いも叶えられない！

——俺は……約束を守れない

☆☆☆

「……この後なんとか雄弥を落ち着かせて、ゼファー……えっと私達のマネージャーを頼ったんだ。雄弥の治療もあるし、近所トラブルとかを避けるためにその日のうちに街を出ることになった。雄弥の手術が終わったら、ゼファーの知人を頼って関西に……。そつちでゆりさんとりみちちゃんに会ったんだ。心がグチャグチャになった雄弥を支えないといけなかったんだけど、私も限界だった。その時に2人にすごい助けてもらったよ。私がまた歌を歌いたいって思ったのも雄弥が前を向けるようになったのも2人のおかげだしね。引越しもあるのに、ゆりさんなんて1人だけしばらく関西に残ってくれたりしたし」

「そんな……ことが……。ごめんなさい、私のせいで……」

「紗夜は悪くないってば。雄弥も気にしてないし。……あの日で私達がいなくなったから、紗夜は自分を責めちゃったんだよね。……ごめんね」

「そんな……こと。……それこそあなたが謝ることじゃないわよ」

「あの……雄弥さんは今どこに？」

「……お墓参りだよ。今日の日付が、初めて母さんのお墓参りした日だからね」

「そんな時に……。……ごめんなさい。知らなかったこととはいえ」  
「ううん。むしろこの日に話せたのもよかった気がする」

あの時……そんなことがあったんだ……。あたし……あたし何も知らなかったのに……。勝手に嫌いになって、勝手に距離を置いて……。

「……日菜もさ、雄弥と…自分の気持ちと向き合ってみてほしいんだ」  
「…あたし…は…だって…ユウくんを嫌いって…気持ちは…」  
「ヒナ、いい加減にしなよ」

「リサ？」

「自分の気持ちから目をそらすのはもうやめなよ！雄弥のこと嫌いになんてなってないでしょ！今も好きなんですよ！」

「違う！そんなこと「違わないよ！」っ！」

「だったら…本当に嫌いなんだったら、なんで今もユウくんって呼ぶの！」

「それ…は…クセだよ」

「考えてみたらヒナの行動はおかしいんだよ。嫌いならなんで雄弥の行動をほとんど把握してるの？嫌いなら視界に入らないように、情報が入らないようにするでしょ？」

「き、嫌い、だから…だから余計に…！」

やめて！やめてよ！あたしの心をグチャグチャにしないでよ！！

「ヒナが嫌いなのは雄弥じゃない！ヒナが嫌いなのは雄弥を許せないヒナ自身でしょ！」

「……っっっ！！」

「あ、日菜ちゃん！」

「待ってください！ヒナさん！」

「彩ちゃんも！追いかけるわよ！」

「し、失礼します！お代はここに置いてますのでー！」

——違う違う違う違う違う！あたしは…あたしは…！



## 25話

「…リサがあそこまで言うなんて、珍しいこともあるものね」

「あ、あはは。…まあ他人事ってわけでもないしさ」

「…そう」

「日菜のことはとりあえずパスパレに任せるしかないかな」

「ヒナちゃんのこと、あこ達は追いかけていいんですか？」

「そうした方がよかったかもだけど、そこは半々だし。なにより、もうすぐ雄弥がここに来るしね」

「え!?!雄弥くん来るの!?!」

「うん。強引な手だけど場のセッティングをしとこうと思って。紗夜が話をするって言うから、丁度いいかなって思ったんだけど…」

「さすがに…望みすぎかと…」

「だよ。あはは…いつも詰めが甘いつて雄弥に言われてるんだけどね」

そっか。雄弥がここに来るんだ…。なんか複雑だなあ。雄弥の過去を知れてよかったとは思うけど、それで余計に雄弥に負い目を感じてるわけだし。

私のその気持ちを察したのかは知らないけど、友希那が話題を変えてくれた。この喫茶店の話になったんだけど、友希那だけじゃなくてみんな思ってることだよ。ここ、店員さんがすっごい特徴的というか個性的だからね。

「ここはね。私たち Augengbäck のリーダー、秋宮疾斗のお祖父ちゃんが経営してる喫茶店なんだよ。来るもの拒まずって感じで採用したら個性的な人が集まったんだって」

「生徒会長の…」

「彼も個性的というか、大物なものね。妙に納得できるわ」

「はい。生徒会同士の交流があるので面識はありますが、言動の軽さとは裏腹に物事をよく見てる人ですからね」

「ちなみに疾斗の担当楽器はギターだからね」

「そうなのですか!?それは知りませんでしたね」

「結花さん!ドラムはどんな人が担当してたんですか!」

あこつてばグイグイ聞くねえ。まあ結花がボーカルで雄弥がベース、そして生徒会長がギターって分かったら、流れで聞きたくなるのも分かるけどさ。いつも静止役になってる隣子もどうやら興味あるみたいだし。

「ドラムはね、梶大輝ってのが担当してたよ。熱血タイプで暑苦しいところがあるんだけど、一番バンドのことを考えてて、ムードメーカーなんだよね」

「へ〜!」

「梶……大輝……あれ?」

「どうしたの?沙綾」

「あ、いえ。……たしか香澄の従兄弟がそんな名前だったなって思って。記憶違いかもしれないですけど」

「あー、それで合ってるよ。……というかあの二人って付き合ってるんじゃないの?」

「え?」

「え?」

「戸山さん……彼氏がいたの?」

「いやいやいや!あの香澄に彼氏って!」

「沙綾、心当たりないの?香澄って分かりやすいと思うんだけど」

「心当たりなんて……」

『沙綾聞いて、大ちゃんがねー!』

『この前大ちゃんと買い物行つたんだ〜!』

『大ちゃんがプレゼントくれたんだよ!』

『二人で出かけたならデートじゃないの?』

「……あ」

「案外わからないものなのね」

そつかあ、あの香澄に彼氏かく。でも聞いた限りだとなんと香澄に合った彼氏だね。一途なのは間違いないだろうし、何かあったら絶対駆けつけてくれるだろうし、駄目なことは本気で叱ったりしう。

「あの…キーボードの方は…」

「ああ、そうだったそうだった」

「もしかして…毛利愁くん…だったり…しますか？」

「合ってるよ。あれ？前に言っただけ？」

「いえ…わたしが…知る限りだと…彼が…ありえそうだな…って」

「”埋もれた天才”…だったかしら？賞に興味がないからコンテストに出なかった人よね」

「はい。…何度か…会ったことは…あったので、…彼が出てたら…わたしは…賞を…取ってないです」

「そんなに凄いの!?あこ、りんりんのが一番だと思ってるよ?」

「ありがとう…あこちゃん。でも…毛利くんは…本当に…すごい、よ?…いろいろ…教えてもらった…から」

「へへ、隣子の先生でもあったってことなんだね!それにしても…Augenblickと関わりある人が、アタシらの周りに結構いるんだね」

「まあね。地元での集まりだったから」

「雄弥くんも言っていましたね。同じ事務所のメンバーで固めたって」

家がそこまで離れてなかったら集まりやすいし、絆を深めやすいから…なのかな。別に離れてても、関係なく仲良くなれると思うけど…。まあでも、中学生で同じ事務所ってなったら自然と住んでる場所も近くなるか。

アタシたちが結花からバンドの話聞き始めて10分くらいかな。待ち人である雄弥が喫茶店にたどり着いた。…さすがにお墓参りの

後じゃ、いつもと雰囲気は違っても仕方ないよね。

「?席が余りまくってないか?」

「パスパレも来てたからね」

「:そうなのか」

「ちよつとバタバタがあつてね。あとで連絡が来るはずだよ」

「なるほど。それで、俺を呼んだのに帰るわけにはいかない、ってことで待っててくれたわけか」

「うん。他の理由もあるけど」

「他の理由?」

他の理由って何か言ってたっけ?そう思つて他の子を見回したけど、やっぱり誰も知らないようだった。みんなと顔を見合わせては首を傾げていると、いつの間にか結花と沙綾と紗夜がいなくなつてた。:って紗夜はさつき目を合わせてたのに!どうやってそんなすぐにいなくなれたの!?

「雄弥、3人は?」

「さあ。ここに残つててつて言われただけだから、よくわからん」

「:…悪いけど、私も少し席を外すわね」

「え?友希那?」

「あこ、隣子。少し付き合いなさい」

「:わかり:ました」

「え?え?どういうこと?」

「あこちゃん:あとで:…:説明:…するね」

「そういうことなら:…」

あからさまにアタシと雄弥の2人だけって状態を作られたんだけど!?隣子は察する側の人なのは分かるけどさ、まさか友希那までそういうのがわかるなんて思つてなかったよ…。

「今日の集まりはなんだったんだ？」

「あれ？雄弥は内容知らされてなかったの？」

「まあな。大事な話があるから、お墓参りに行けないって結花に言われただけだ」

「…そっか。……全部聞いたよ」

「…結花が話したのか」

「半分はね。学校でのことは紗夜が、その後のことは結花が話してくれたよ。紗夜はね…、日菜と向き合うためにも話さないといけなくて考えたんだよ」

紗夜の予定じゃ友希那と燐子とあこは、この場に呼ばないことになつてたみたい。雄弥と関わりが深い人たちと、ヒナをこの場に連れてくるために協力してくれたパスパレメンバーにだけ話すつもりだったみたい。でも、結花が3人を呼んだらしくて、『Roseliaの竿隊が来るなら、他のメンバーも呼ぶべきだよ』って。

そういつた事情も含めて雄弥に今日のことを話した。そして最後にはアタシが追及しすぎたせいでヒナが飛び出しちゃって、それをパスパレが追いかけることも。

「それでパスパレがいなくなつてたのか。……そうか」

「…ねえ。今返事もらつてもいいかな？」

「…え」

「アタシのこの気持ちに区切りをつけさせて」

「…それ……は」

「雄弥の過去を聞いて分かったよ。今も紗夜とヒナのことが好きなんだなって。……アタシじゃ……アタシじゃあ……ダメ……なんだよね？」

顔を伏せた雄弥の頬を両手で挟み込んで、その目を覗きこんだ。…なんて顔しちやつてるの。そんなに目に涙ためちゃってさ。

大人っぽくて、他の男子とは明らかに違う雰囲気があるのに、こう

いう所は凄いい子供っぽい。アタシができるだけ優しく笑ってあげたら、強く抱きしめられた。とても力強いのに、優しい。けど、その腕は、体は震えてて、耳元で何回も弱々しく謝られた。

「…もう、そんなんじやあヒナと仲直りできないよ？紗夜とも話し直さなきゃいけないでしょ？」

「…うん……うん……」

「アタシだって悲しいんだけどなあ……」

「ごめん……ごめん……！おれ……は……リサ……を……リサ……と……離れ……たくない……でも……」

「………そつか。……でもダメだよ。アタシは独占欲強いし、……嫉妬深いからさ。……アタシだけ……じゃないとイヤなんだ」

「うん……わかつ……てる。……一緒にいて、いっぱい話して……分かったから」

「ねえ雄弥。アタシはさ、別にいなくなるわけじゃないんだよ？フラレたからって距離を置いたりしない。今までと同じで、雄弥の側にいるからさ」

「り……さ……」

「だからさ、そんな顔しないで？好きな人が悲しんでは、見たくないな」

「……ああ……」

ちよつと口調が戻ってきたかな。まだ本調子じゃなさそうだけど、そこは時間で解決するだろうし。……でも、これは驚いたなあ。アタシとしては、嬉しいことだけど、ちよつと複雑かも。今回が最後だろうし。だから、すぐにはやめたくなくて、雄弥の首に回してた手に力を込めた。

——いつそずっとこのままでいいのに……

「リサ！雄弥！大変なこと……に……ごめんなさい。出直してくるわ」

「くく!!?ぶはっ、はあはあ、まって…友希那!…はあ…気まずいから!」

「それはこっちのセリフよ。どれぐらい時間空ければいいかしら?」

「空けなくていいから!」

「そう?」

「大変なことってなんだ?」

「なんであなたは平然としてるのよ…。…いけない、今はそんなこと言ってる暇はないわね」

「さつき時間空けるとか言ってたじゃん…」

「そんなこと忘れたわ」

「ええー」

「日葉が飛び出して行ったでしょ?」

「う、うん。彩たちがすぐに追いかけてくれたでしょ?」

「見失ったそうよ」

「…え?」

「…」

「一度は捕まえたらしいの。それで5人で話をしてみたいなのだけど、目を離れた途端にいなくなったみたい。捕まえた時に結花に連絡が来て、それで紗夜が迎えに行こうとしたのだけど…」

「…それを避けちゃったんだ」

「…まだ整理できてないってことか」

雄弥が今度こそ本調子になったみたいだね。ヒナのことを聞いた途端に…。やっぱりそれだけヒナのことが大切なんだね。なら、しっかり背中を押してあげなきゃね!

「雄弥が行かなきゃ」

「え…?」

「ヒナのこと、放っておけないでしょ?雄弥が行かないとダメだよ」

「だが…俺は…」

「しっかりして!雄弥の気持ちは変わってないんですよ!?!逃げるのは

やめなよ。向き合いなよ！紗夜もそのために今日この場を用意して！辛い記憶を思い出して全部話したんだよ!?!ヒナにコンプレックス抱いてて、ヒナに嫌われるかもしれないって怖さもあったのに、それでも全部包み隠さずに話した！そんな紗夜が好きになった雄弥は、アタシが好きになった雄弥は、ここで足踏みするような人じゃないでしょー！」

「!!」

「ヒナを探しに行つて。ヒナを見つけて、向き合つて、仲直りして、全部片付けて帰つてきて!!」

「…リサ、…そうだな。ありがとう。必ず全部解決させて帰ってくるよ」

「うん♪」

決意に満ちた顔、力強い目をした雄弥は、いつもの笑顔で喫茶店を飛び出して行った。大切な人を迎えに行くために。

…これでよかつたんだ。

…これでよかつたんだよ。

アタシの気持ちは全部ぶつめた。

もう思い残すことなんてないんだから。

「リサ」

「ゆきな…?」

「もういいのよ。よく頑張ったわね」

「ゆきな…:…ゆきなああ…」

「我慢しないでいいわ。私が受け止めるから」

「アタシ…あたし!…:…やっぱり…:くやしいよお!」

「…ええ。そうよね」

~~~~~

「あ、雄弥さん!」



「…やつと向き合う覚悟ができたみたいだね」

「沙綾、結花。…ああ、おかげさまでな。…リサにも背中を押されたし」

「…そっか」

私にはそっちはどうしようもないから、友希那に任せるしかないね。…いや、そもそも「私が」なんておこがましいか。リサのことを一番分かっているのは、他でもない友希那なんだから。

「それで、日菜を見失ったってのはどれぐらい前のことだ？」

「だいたい15分前くらいかな」

「…なるほど」

「あの…雄弥さん」

「どうかしたか？」

「えっと…うまく言えないんですけど…雄弥さんなら、大丈夫だと思います」

「ははっ、ありがとうございます」

「あと…それと…」

「ん？…んんっ!？」

「わお、沙綾つてば大胆だね☆」

「…えへへ、頑張つてねお兄ちゃん♪」

「あ、ああ。…行ってくる！」

「行つてらっしゃい」

沙綾が雄弥を赤面させるなんて、これは珍しいのを見たなく。もう見れない気もするけど、バッチリとコッソリ携帯で撮っているから、弄るときに使うと♪

「…結花ちゃん…」

「あ、バレた？」

「…バッチリ…。あとで、山吹さんに…送ってあげなよ？」

「そうだね！」

「ねえねえ結花さん」

「なあにー？あこちゃん」

「雄弥さんってリサ姉のこと、好きなの？」

「あ、あこちゃん……！」

この子はぶち込んでくるねえ。沙綾は……離れたとこにいて雄弥の姿が見えなくなるまで見送ってるし、手短に済ませたら大丈夫かな。

「…好きだっただろうね」

「…え？」

「じゃあ両想い？」

「そうだったんだろうね。でも、雄弥はそれに応えなかったし、リサも自分一人じゃないことに耐えられないだろうから、くつつかないんだよ。紗夜と日菜に出会ってなかったら、確実だっただろうね」

「なんで……言い切れるの？」

「だって、母さんとリサの人柄が一緒だから」

「え？どういふことですか？」

「男の子は…お母さんに似た人に…惹かれやすい…。女の子なら…その逆が多い。…そんな話が…あるんだよ」

「あ、そういうことなんだー！」

「…あこちゃん。ちよつと…飲み物…買いに行こ」

「いいよー！」

燐子があこちゃんを連れて離れていくと、今度は沙綾が戻ってきた。燐子は周りのことをよく見てるし、気を使える人だよ。…わりと優良物件なんじゃ。あーあ、私が男なら燐子は放っておかないな。

「結花…さん」

「どうしたの？……！……分かったんだね？」

「…はい。……私…雄弥さんが好きだったん…ですよ。…こんな  
の、初めてなのに…凄い嬉しかったのに……今は凄い…悲しいで  
す」

「そうだね。…お姉ちゃんの胸に飛び込んでおいで」

「あ…ああ……うわあああん」

（2人同時にフツタんだから、失敗したら許さないよ？雄弥）

## 26話

丸山さんから連絡があったから、彼女たちがいる場所に向かうことにした。日菜と話し直さないといけないから。日菜が「嫌い」という感情を覚えてしまったのは、あの日が原因なのは明白なこと。日菜が雄弥さんと決めた天体観測の予定が急に無くなったただけなら、きつとまだ日菜は自分を抑えれた。だから、日菜が雄弥さんと交したという別の約束、それがきつと火種となってしまうた。

雄弥くんとずっと一緒にいる結花でさえ知らないその約束は、もちろん私も知らない。だけど、その約束があったがために日菜は傷つけてしまった。

『ごめん紗夜ちゃん！目を離したら日菜ちゃんがいなくなっちゃった！』

頭の中を整理しつつ、日菜と実際に会ったら何を話すべきなのかを考えている時だった。丸山さんからの電話でそのことを知ったのは。

『完全に見失っちゃったから、手分けして探すね！』

「わかりました。あの子が行きそうな所をあたりますね」

『うん。ホントにごめんね！』

「いえ。元はといえば私が強引に今日という日を用意してしまいましたから。丸山さんたちもどうかお気をつけて」

『うん！何か分かったら連絡するね！』

通話を切つて思考を切り替える。あの子と話すことよりも、今はあの子を見つけ出すことに思考を集中させなくてはいけないから。日菜と双子だというのに、私は日菜のことを全然分かっていない。さつきああ言ったものの、日菜が行きそうな所なんて思いつかない。

「…立ち止まっても仕方ないわね。丸山さんたちがいた場所を基

点にして、場所を絞って当たるしかないわ」

猫のように自由で、何も予定が無いときは気の向くままに動く子。そんな日菜はこういう時いったいどこに行くのかしら。思い返せば、日菜がこんな行動に出るのも初めてだわ。どこか落ち着ける所、かつ一人でいられる所。そう分析して携帯の地図機能を動かす。候補を絞り込んで手当たりしだいに行くしかない。

「あまり遠くには行ってほしくないものね…」

元々行動力の塊といえるあの子が、誰にも見つからない場所を求めてしまうと、とうとう私たちだけの捜索の限界を超えてしまう。そうしたら警察に捜索願いを出さないといけない。できればそんなことはしたくない。警察のお世話になるような事態に巻き込まれるのは、2年前のあの時だけで十分なのだから。

「ここには…いないわね。…次」

七夕祭りの時に、カササギを追いかけたらたどり着いた公園。昔は日菜と雄弥さんと結花と私の4人でよく遊んでいた場所。ブランコを高く漕ぎすぎて落下した日菜を雄弥くんが受け止めようとして下敷きになったこともあったわね。それなのに高所恐怖症にならないあたり、あの子は恐れ知らずね。

「はあはあ…ここも…いない…」

大きな池がある公園。水上ボートがあつて、誰が雄弥くんの隣に座るかで取り合ったわね。あの時は結花の誕生日が近いということもあつて、雄弥くんが結花を指名したのよね。雄弥くんの隣じゃないからって楽しめないような性格じゃないし、日菜と一緒に雄弥くんたちが何を話してるかを当てようなんて遊びになったわね。

「……………こも……………ちがうの?……………日菜…どこなの?」

雄弥くんが行きたいと言って来た場所。そこまで広くないにも拘わらず、視界を埋め尽くすようにコスモスが咲く場所。摘んでいい場所といけない場所があつて、雄弥くんが摘んだコスモスを使って冠を3人分作ってくれたのよね。

太陽はもうほとんど地平線に沈んでしまっている。西がまだ若干明るいだけで、空はもうほぼ夜空が広がってしまった。：丸山さん達にはもう帰ってもらわないと。夜遅くまで付き合わせるわけにはいかないし、何よりも日菜も含めて彼女たちはアイドルなのだから。身を危険に晒すようなことをさせてはいけない。電話をしてそのことを伝えたら、当然反発された。彼女たちも分担して探してくれていて、情報まで集めようとしてくれていたらしい。日菜の失踪はアイドルの失踪。文字通り身を削る行動だというのに…。

『日菜ちゃんは私達の大切な仲間だから!友達だから!だから見つかるまで探すよ!』

「…ですが……………」

『紗夜ちゃんも思い当たる場所に行つて、それでもいなかっただんではない?時間もだけど、候補が無いから電話してきたんでしょ?一人で探すより、協力して探したほうがいいに決まってるよ!』

「そこまで……………どうして……………」

『さつき言つたのもあるけど、だって紗夜ちゃんも友達だもん!友達を助けるのは当たり前だよ!』

「!!」

『だから、私達にも協力させて。最後まで付き合わせて?』

「彩たちには帰ってもらおう」

『え?』

「…雄弥…くん?」

突然のことに固まってしまったけど、息を切らせながらも私の前に立っているのは、間違いない雄弥くん。きっと結花から聞いたのだろうけど、それでもどうやってここが分かったのかしら。私みたいの一つ一つ当たっていったら合流したということかしら。

「やっぱ紗夜はここにいたか」

「私は…？ どういうこと？」

「それは後で。紗夜、スピーカーに変えてくれ。…彩聞こえるか？」

『う、うん。聞こえてるよ。私たちには帰ってもらうってどういうこと？』

「日菜の居場所なら分かってる」

『え！』

「確信があるから、だから任せてくれないか？ 全て解決してみせるから」

『…でも…』

「頼む」

『……わかったよ。ゼー…つたいに！ 日菜ちゃんを連れて帰ってきてね！』

「ああ」

『千聖ちゃん達には私から伝えとくね！ それじゃあ、連絡待ってるから！』

「ありがとう彩」

通話が終わったところで私は、携帯電話をポケットに仕舞い込んだ。丸山さんに断言してたけど、雄弥くんはなぜ日菜の居場所が分かるのかしら。ある方向を向いているという事は、そっちにいらんのでしようけど、私にはそれがどこか詳細が分からなかった。そして悔しかった。姉だというのに、日菜と一番長い時間を過ごしているというのに、日菜の行動が分からないことが。一度離れた雄弥くんが、日菜のことを今でも理解できていることが。

雄弥くん…そして…日菜にも嫉妬してるのね、私。

「紗夜？どうしたんだ暗い顔して」

「……雄弥くんは、私のことを本当に好きでいてくれるの？」

「当たり前だろ」

「本当に？」

「…紗夜？」

「不安なのよ…。神木くんに言われたことを思い出して…、私は日菜の姉だから、いつも一緒だったからそれで好きでいてくれるのかもって。私はついでなんじゃないかって！」

「そんなことない！」

「だったら証明してみせてよ！日菜に向ける笑顔と私に向ける笑顔が異なるのは何故なのか！納得いく説明をしてみせて！あの日あなたはたしかに否定してくれた！愛してると言ってくれた！でも…あの事件があったとはいえ…いなくなったじゃない！伝える余裕がその時には無かったということとは結花の説明で理解したわ！でも……だったら…回復した時に…連絡してくれても良かったじゃない…」

「紗夜…」

雄弥くんを責めるように服を強く握りしめながらも、縋るようにその胸に顔をうずめた。不安を取り除いてほしい。私が雄弥くんに愛されているという実感がほしい。情けなんかじゃないと証明してほしい。

「…屁理屈に聞こえるかもしれない。言い訳にしか聞こえないかもしれない。…でも、本当に紗夜のことが好きなんだ。ついでなんかじゃない。情けなんかじゃない。俺は氷川日菜の姉が好きなんじゃない。氷川紗夜という一人の女の子が好きなんだ」

「…あ」

「向ける笑顔が違うと言われても仕方ないな。だって、日菜は日菜で紗夜は紗夜なんだから。同じ笑顔だったら、それこそ情けみたいじゃないか。というかな、紗夜という時が自然な笑顔だぞ？日菜の笑顔っ



てき、凄い無邪気だろ？その相乗効果というか…まあそんな感じでも  
つも以上になるんだよ」

「……ふふっ、たしかに屁理屈じみてるわね」

「だろ？だからさ…紗夜」

「なにかしら？」

「これから先も何度も紗夜を不安にさせるかもしれないし、悲しませる  
かもしれない。俺は紗夜だけを愛せるわけじゃない底辺の人間だ  
けど、それでも紗夜のことを愛してる。ずっとこれからを共に行きたい。  
歩んでいきたい。だから…こんな俺でもよかつたら…俺と付き  
合ってくれないか？」

「…っ…ばか。…私だって雄弥くんを愛してる。誰にも…それこそ  
結花にも日菜にも負けないと自負してる。だから…柔軟に生きれない  
私だけど、そんな私でよければ喜んで」

言葉もなく、どちらからでもなく、距離をゼロにした。強く握って  
いた手は体に添えるように、空をきっていた手は私の背中に回された。  
彼の温もりを感じ、彼の全てを受け止めるように、彼ともう離れない  
ように、求めるように。

彼との隔たりも確執もなくなり、元の距離感よりもさらに近いもの  
となれた。いつからかは覚えていない。幼少の記憶の時から彼とは  
一緒に過ごしていた。それが当たり前だった。だから、いつ、どうい  
う時に雄弥くんを好きになったのかは分からない。気づいたときには  
好きになっていて、自覚してからはどうしようもないぐらい彼に惹  
かれ続けた。いつもは気にしていない彼の仕草も、言動も、一つ一つ  
が愛おしくなっていたんだ。

——ああ、そうだったわね。私はずっとこうなりたかったんだわ。

「あ、紗夜は家で待っていてくれ」

「何言ってるのよ。私も行くに決まってるじゃない」

「ダメだ。もう暗くなってる」

「もう子どもじゃないわ」

「そう言ってるうちは子どもらしいぞ?」

「…:はあ。:わかかったわよ。日菜を家に連れて帰って来てくれるって信じてるわよ?」

「ああ、任せろ」

惚れた弱み…:なんて言うのかしらね。好きな人に真っ直ぐ見つめられて言われたら頷いてしまうのわ。:でも、心地いいわね。彼のことを好いているのだから。自覚できるから。

「あ、結花たちにも帰っとくように言っといて」

「彼女たちはまだ帰らせてなかったの?」

「うん」

「まったく…。仕方ないわね」

「はは、ありがと!」

「結花の説教が待ってるわよ」

「…:はい」

~~~~~

「…:あは…:あははは…:,なんであたし、:よりによってここに来ちゃったんだろ」

——これも因果ってやつなのかな。

——でも

——ここなら絶対に誰も来れないよね。

## 27話

お姉ちゃんと結花ちゃんから、2年前の真相をすべて聞かされた。あたしは子どもだったんだね。仕方ないこととはいえ、ユウくんに約束を破られたということだけを重く、大きく捉えた。その結果自分の気持ちが変わらなくなって、胸の中がモヤモヤし始めて、気付いたときにはドロドロになってた。完全な逆恨みなのにね。

「……あの時って、なんで天体観測しようと思ったんだっけ」

4人で遊ぶことが減ったから、というのもあったんだけど、それ以上の理由があったはずなんだ。たしか、同じクラスの子の会話が聞こえたからだっけ？

—————

「るんるん♪」

あたしが珍しく先生の手伝いをした。結花ちゃんの手伝いとか、お姉ちゃんの手伝いとかならするし、ユウくんが何かしてたら走って手伝いに行く。だけどそれ以外の人の手伝いなんてほとんどしない。あ、お父さんとお母さんは別だよ？

ともかく、あたしが手伝いをするなんて珍しいことで、先生もビックリしてた。でも「助かった。ありがとう」って言ってもらったし、ユウくんに話したらきつと褒めてくれるよね！それが楽しみでユウくんを探した。日直らしいから、教室か職員室のどっちかだよね！そんな時だった。いつも気にしないのに、気になる内容の話し声が聞こえてきたのは。

——藤森くんってホントに日菜ちゃんのこと好きなのかな？だって、あれだけ仲いいのに付き合っていないでしょ？

あたしの胸がキューってなるには十分過ぎる言葉だった。こんな  
の聞こえなかったらよかったのに、ユウくんの名前が聞こえたから気  
になって聞いちゃった。あたしはそれで揺らいじゃった。

(ユウくんが一緒にいてくれるのって、もしかして約束があるからな  
んじゃないかな…。それで、…約束があるから…：…仕方なく…：とか  
なんじゃ)

そんなことないと思いたかった。ユウくんには好かれていると思っ  
てたし、好かれていたって願望もあったから。よくわからなくなっ  
て、とりあえずユウくんにおおうって思った。会えばわかるから。だ  
からユウくんを探すのを再開した。教室にいなかったから職員室だ  
ろうと思って、ユウくんが通るであろう道を通った。

「ユウーくん！」

「うおっ！…：日菜、飛びつくのやめてくれって言ってるだろ」

「えー。これがあたし達じゃん？」

「どういうことだ…」

「それよりさ！ユウくん今日の夜は予定空いてたよね！」

「夜？そりゃあ予定空いてるけど」

「やった！じゃあ決まりだね！」

「何がだ」

「何って、そりゃあ天体観測に決まってるじゃん！」

話してみても、やっぱりいつも通りだった。あたしが好きな表情で  
笑ってくれる。呆れた様子を見せながらも付き合ってくれる。今も  
こうやって優しく頭を撫でてくれて、るんっ♪てさせてくれる。け  
ど、さつき聞いた言葉が脳裏をよぎって、胸がモヤモヤってなった。

ユウくんは教室に戻るみたいで、お姉ちゃんに話していくくれるみ  
たい。だからあたしが結花ちゃんに話すことにした。家が近いから

ね！結花ちゃんに話したけど、結花ちゃんは今晚来れないらしかった。次のレコーディングのために練習しないとイケないんだって。ざーんねん…。

あたしは、3人でもいいから天体観測をしようって思った。天体観測をして、その時にユウくんに告白しようって思ったから。確かめるならこれが手っ取り早いもんね。ユウくんが好きでいてくれるなら、断られることなんてないから。もちろん断られないと思ってたけど、ちよつと不安もあった。ドキドキしながら天体観測の準備をして、あたしは1人で先にセツティングしといた。ユウくん達は場所を知らないから迎えに行かないとだけど、先にセツティングしてたほうがいっぱい楽しめるから。

——でも、ユウくんは来なかった。連絡の一つもなく。

—————

「たしかこんな感じだったね…」

ユウくんに裏切られたって思った。クラスの子が言った通り、あたしのことが好きだったわけじゃないんだって。その後寝込んだんだよね。周りのことすべてをシャットアウトして、泣いて泣いて泣いて泣いて…。その悲しみはいつの間にか怒りに変わってて…、ホントに理不尽な話だよね。ユウくんは悪くないのに。勝手にあたしが1人で踊り狂って、好きな人を恨んだって話なんだから。理不尽で滑稽だよ。

でも、リサちゃんの言われたのも当たってる。あたしはユウくんが好きって気持ちも持つてる。でも、嫌いって気持ちもあたしの中にはたしかに存在してて、それが実は自分に向いてるっていうのは、言われて気付いた。

ユウくんたちの家はあたし達の家からすぐそこだったから、警察が来てたのも知ってる。でも、あたしは何も知ろうとしなかった。突然警察がユウくんたちの家に来て、お父さんやお母さんにも話を聞いて

たつていうのに、すべてから逃げた。ユウくんたちにスツゴイ大変なことが起きたつていうのは、察していたはずなのに、脳が…、あたしの心がそれを理解することを拒んだ。お姉ちゃんの身に何か起きたことも同じだ。知ることから逃げたんだ。

「…あたし…こんなダメな人だったんだね。…何もかもから逃げて、周りを振り回して、あたつて、怒鳴つて…」

——もう、いいや

目の前にある柵に体を傾けていく。せいぜいお腹辺りまでしか高さのない柵だから、このまま傾けていつたらどうなるかなんて分かつてる。分かつてるからこそやつてるんだ。

「このバカー！」

「……え」

足が地面から離れ始めたところで、聞こえないはずの音が聞こえて、いないはずの誰かに体を引つ張られた。咄嗟にやったことだからかな、バランスを崩しちやつてみたいで、その人は背中から倒れてあたしはその人を押し倒す形になった。

「つたあゝ……え……ゆう……くん？」

「まったく、何考えてんだよ。身投げなんてしようとして」

見覚えがある、なんて話じゃない。よく知つてる。どれだけ望んでも忘れられたかつた人が今あたしの目の前にいた。どれだけ走つてきたんだろ。肌寒くなつてきたこの時期なのに汗をかいてるし、めちやくちや呼吸も乱れてる。

「さすがに肝が冷えたぞ」

「なんで…」

「ん？」

「なんで助けたの!」

「何言ってるんだ?」

「あたし、みんなにいつぱい迷惑かけたんだよ!?何も知ろうとしないで、勝手にユウくんが全部悪いんだって決めつけて!なのに…:…なのになんで助けたの!」

「そりゃあ日菜のことが大切だから」

「っ!…:…うそだよ」

「嘘じゃない」

「うそだよ!うそ!だって…!」

その先のことは言えなかった。今はもう真実を知っているから、ユウくんが約束を守れなかったのは、仕方のないことだから。頭ではそうわかってる。でも感情はまた別なんだ。

それとは別の理由でも言えなかった。あたしの口にユウくんの口が重ねられたから。拒もうという意思が生まれた。でも、実際には拒むことができなかった。そんな意思は生まれてすぐに消えたから。その代わり、あたしの中で暖かい感情が生まれて、それがいつぱい広がっていった。この感情は初めてじゃない。あたしが見失ってた感情で、前まではずっとこれに満たされてた。

「日菜が言ったんだろ?『ずっと一緒にいよう』って。俺が言えた義理じゃないけど、約束を破ろうとしないでくれ。日菜に死なれたら俺も死にたくなるし、絶対に約束を果たせなくなるじゃないか」

「あ…:…覚えてて…:…くれたの?」

「忘れたことなんてない。俺は日菜のこと、ずっと好きだったから。あっちにいた時も、戻ってきて日菜に拒まれても、それでも俺はこの約束もこの感情も一ミリたりとも失ったことはないから」

「ゆう…:…くん。…:…ユウくん!」



覚えててくれた。ユウくんは忘れてなんてなかった。そのことに  
るるんっ♪てなって、離れたユウくんの口を今度はあたしが覆いに  
いった。ユウくんの首に、頭に手を回して、逃げられないように、あ  
たしのものだと示すように。

「…ひな……」

「えへへ。……あのね、ユウくん。あの日にね、ユウくんに伝えたかつたことがあるんだ」

「伝えたかったこと？」

「うん。……ふうー、……雄弥くん。あなたのことが、誰よりも好きです」

「……ありがとう日菜。俺も日菜のことが好きだ。もう絶対に日菜の前からいなくならない」

「えへへ、……でもね、ユウくん」

「ん？」

「…あたし、この”嫌い”って気持ちが消えそうにないんだ。この気持ちがあたしに向いてるってリサちゃんに言われて気づいて、…あたし……自分を好きになれそうにないよお……」

「日菜……。言葉の綾みたいなものだが…、リサや薫を始めた学校のみんなやパスパレのみんな、おじさんやおばさんや紗夜、なにより…俺が好きで仕方がない存在である、氷川日菜を好きになってくれな  
いか？」

「…なにそれ、変わんないよ？」

「捉え方の違いだ。負い目を感じてる自分を好きになれなくても、みんなに好かれてる自分なら好きになれるんじゃないか？」

「わかんない。…そんなのわかんないよ」

「やってみたら分かるさ。すぐにできるとも思っ  
てないし、これから一緒に克服しよう」

あたしのことを優しい目で、それでも真っ直ぐと見つめてくれて  
…、あたしはそんなユウくんにもたれ掛かるように力を抜いた。ユウ

くんはあたしのことを抱きしめてくれて、全身がユウくんに包まれたような、そんな感覚に陥った。：こーうやつてるん♪してるあたしなら：たしかに好きになれるかもしれない。そう思った。

これからのことは、それこそこれから分かるしかない。そう結論付けて、あたしはユウくんを信じることにした。ユウくんとなら、やっつけていける気がして。それに、今度こそ最後まで信じたいから。ユウくんの腕にしがみついて、肩に頭を預けながら家までの道を歩く。今までのことを踏まえたら、随分と調子のいいことをしちやつてる。でも、あたしはこーうしたいし、ユウくんもあたしの好きにしてほしいって言うてくれたから。

「ユウくんはさ、なんであの場所にあたしがいるってわかったの？」

「日菜のことならお見通しってことだ。：それに、あそこだろ？2年前にやろうとしてた天体観測の場所って」

「う、うん。すごいね。ほんとにお見通しなんだね。これじゃあユウくんに秘密なんてできないね」

「嫌か？」

「ううん！すっごく嬉しいよ！」

家に帰ったらお姉ちゃんに出迎えられて、お姉ちゃんにギュウツッて抱きしめられた。お姉ちゃんにそうしてもらえるなんて思ってたなかったし、泣いてるお姉ちゃんを見て、あたしは自分がしたことがどれだけ周りに心配をかけたのかわかった。あたしも泣いて、あたしもお姉ちゃんもユウくんを慰めてもらった。パスパレのみんなに連絡したらグループ通話が始まって、いっぱい怒られたしいっぱい泣かれた。リサちゃんたちにも心配かけちゃった。

その日は、お父さんもお母さんもお礼をしたって言うて、ユウくんは泊まることになった。：それで結花ちゃんから説教を受けてたけどね。明日家に戻ったら結花ちゃんと沙綾ちゃんにこっぴど怒られるみたい。：：：あたしも一緒に謝りにいかないかね。

## エピローグ

「おっねえちやーん♪」

「きやつ!?…もう日菜、飛びつかないでちょうだい」

「えへへ、だってーお姉ちゃんとライブ見に行けるなんて思ってたなかったも〜ん♪」

「あなたも呼ばれてると思っただけど…、私たちだけじゃないのよ?」

「関係ないよ〜♪」

「あはは! ヒナは相変わらずだな〜」

「あ、リサちやっほー!」

「やっほ〜☆」

今日のライブは私は結花から日菜は雄弥くんから誘われて、チケットを5枚ずつ渡された。今日はA u g e n b l i c k が活動休止の間、ギターの秋宮疾斗くん、ドラムの梶大輝くん、キーボードの毛利愁くんの三人で活動している”T e m p o r <sup>仮</sup>”のライブ。雄弥くんと結花はその三人と積もる話もあるから、と一足先に来ているらしい。

私は当然R o s e l i a のみんなを誘って(結花にそうしろと言われたのもある)、日菜はパスパレのみんなを誘った。だから、今この場ではR o s e l i a とパスパレのメンバーが集まっている。

「あれ〜? リサさんだ〜」

「へ? あ、モカじゃん! ってA f t e r g l o w 全員いるし」

「美竹さん達も来てたのね」

「まあ、つぐみがチケットを貰ってきたので。そういう湊さん達も全員なんですわね」

「ええ。紗夜が結花からチケットを渡されたみたいで。その結花は雄弥と二人で先に会場に入ってるみたいだけど」

総じて15人になると大所帯ね。この人数でこの場においても邪魔

になるだろうと判断し、私達も会場の中に入ることにした。さすがに3バンドが固まって見るということにはならなくて、それぞれ少し離れた席となった。自然と雄弥さんと結花の姿を探してしまっただけ、二人はまだこっちは来ていないようだった。さすがにメンバーとの話となると話すことが多いんでしようね。

「あ！友希那さんだ！」

「何言ってるんだ香澄……ってRoseliaの皆さん!？」

「戸山さん？それに市ヶ谷さん達も」

「もしかしてみんなも見に来たの？」

「そうなんですよ！紗綾が雄弥さんにチケット貰ったみたいで！」

「あははー、ビックリしましたけどね。貰っちゃってもいいのかなーって。でも他にも呼ぶから気にするなって言われて、それならいいかって」

「ポピパもなんだー！あこたちも貰ったんだよー！紗夜さんが結花さんから貰って言ってたもん！」

「…チケットって……そんないっぱい…用意できるもの…でしたっけ？」

「普通はムリじゃないっすかね」

「じゃあ雄弥さん達は普通じゃない」

「おたえそれ失礼だからな……気持ちには分からなくもねえが」

「あ、あはは。でもお姉ちゃんが言ってたよ？Augenblickはよく知人をいっぱい招待してたって。だから、その名残りみたいなもんじゃないかな？」

「…たしかにそうでしたね」

私たち家族もよくチケットを貰ってた。…彼らのお母様が生きてた頃はご両親も呼んでたみたいだけど、それでもたしか1回だけだったはず。彼らのデビューライブの時だけ呼んで、お母様がいなくなったら呼ばなくなっていた。

「紗夜？大丈夫？」

「え？」

「ちよつと顔色が悪いような気がして」

「…いえ。なんでもありません。彼らがステージに立っていた頃を思い出しただけです」

「あ……。うん、そっか…」

「？紗夜さん達、どうしたんだろ？」

「…いろいろ事情があるんだろ。首突つ込むなよ」

「それぐらいわたしでも分かるよ！」

「Augenblick：だったかな。雄弥さんたちがいたバンドつて」

「おたえは知ってんのかよ！」

「ちよつとだけ。好きだったから」

…そうね。花園さんはいろんなバンドのことを知っていたわね。話を聞いた山吹さんも知っているのだろうし、彼らが関西に行った時に出会ったという牛込さんも事情は知っているはず。様子を見る限り話してるわけでもなさそうだけど、そもそもおいそれと話せる内容でもないものね。

「あら！そこにいるのは香澄たちと紗夜たちね！」

「こころちゃん！」

「弦卷さん!？」

「こころー。あんまり大声で話さないでよ。他の人に迷惑だから」

「それは気をつけないといけないわね！」

「やっぱ理解してないかー…」

「あ、あはは…美咲ちゃん、こころちゃんも楽しみなんだよ。疾斗くんたちのライブが」

「そう…みたいですね。改めて花音さん、チケットありがとうございます」

「ううん。私も疾斗くんから貰っただけだから」

「薫くん！……すごいよ！はぐみ達もこういうところでやりたいね！いつもより楽しいライブができそう！」

「そうだねはぐみ。舞台を彩る光、場を輝かせる子猫ちゃんたちの光、双方を繋げるこの空気！ああ！なんて夢いんだ！」

「だから騒がないでくださいって……」

弦巻さんたちの所は相変わらず元気そうね。そして、あの人が瀬田さんね。日菜がるんっ♪ですると言っていた方。……こうしてみると、日菜が好きと言うのも納得が行くわね。それにしても、以前松原さんから「男の匂いが！」と結花が言っていたけど、まさか秋宮くんがそうなのかしら？

「そろそろ時間ね」

「ええ。……それにしても雄弥くん達はどこの席かしら」

「……そういえば」

『皆さんお待ちせしましたー！これからTempor・rのライブを始めまーす！』

「ま、あの二人だし、ちゃんと席に戻ってるでしょ！」

「そうですね」

彼らのやり方もAugenblickの時から変わっていない。最初は必ず歌詞のない、楽器隊だけの短い演奏。それが挨拶代わり。この後MCでメンバー紹介をして、一気に駆け抜けていく。それが彼らのライブのやり方。だから、今日ももちろんすぐにメンバー紹介に入った。

「改めてみんな来てくれてありがとうー！！秘密にしてたけど、実は俺達”Tempor・r”のライブは今日で最後なんだよね」

「ノリが軽すぎね!?もつとこう……あーもう！とりあえず台本無視すんな！」

「僕も流石にそれはドン引きかなー」

「いやあ、だって俺シンミリすんの嫌いだし〜？それに、初めに言ってたじゃん。俺達が活動を終わる条件」

「…まあそうなんだけどな。ぶっちゃけ俺も寂しさが微塵もねえし」  
「むしろ嬉しきしかないよね」

彼らが言っていることが分からなかった。活動を終わると言っておいてなぜそんなに前向きなのか、明るくいられるのか。でも、彼らが活動を三人で始めた時に言っていたことを知ってるお客さんは、歓喜の声をあげていた。

「ま、とりあえずメンバー紹介！ドラム担当、梶大輝！」

「みんなよろしく」次が「待てまで!!挨拶に被せるな！」

「いいじゃねえか別に。よろしくしか言わないだし」

「扱い酷いな!？」

「僕がキーボード担当の毛利愁だよ。今日は絶対に最高の1日なるから最後までついてきてね？」

「勝手に一人でやるな！」

「二人の茶番って長いじゃん」

「茶番じゃねえ！」

「うっ！」

「なんで疾斗はダメージ受けてんだよ！」

「そこどうなだれてるのが僕らのリーダー、秋宮疾斗！」

「おっしやああ！今日は盛り上がっていいこうぜー！」

「お前めんどくさいな！」

相変わらずアドリブが酷いMCね。でも、普段の様子を隠すことなく前面に出すのは、ファンの間でも好まれているのも事実なのよね。

——そのすぐ後だった。私たちが驚かすことが起きたのは

「じゃあ残り二人も紹介すつかない！」

「え……」

「紗夜…まさか…」

「我らがボーカル&ベース藤森結花と藤森雄弥！」

「みんな久しぶりー！それと、ただいまー!!」

「Augenblickの活動再開、それが今日の本当のライブだから。ついてきてくれるよな？」

——もう立つことができないはずの私の恋人がそこに立っていた

~~~~~

「日菜ちゃん……これって……」

「あ、あはは……いっつも驚かしてくるんだから……」

「ヒナさん……」

「あれ……?おかしいな。嬉しいのに……涙が止まないや……。ここ、こんなにおかしいよね?」

「いいえ。そんなことないわ」

「そうですよ。何もおかしなことなんてありません」

「…日菜ちゃん。見届けよう。一緒に!」

「あや、ちゃん……。……うん!」

演奏なんてできはずの右手。だけどユウくんが今使ってるのは左利き用のベース。弦を抑えるのは結局右手になるし、激しい動きなんてできないはず。それなのに、ユウくんの演奏は凄かった。曲を支えるギリギリの音しか出せていないのに、それでもユウくんのベースはバシツと決まっていた。

結花ちゃんも中学の時と変わらない……ううん、あの頃以上の歌唱力だった。バシツとした歌も、ギューンってなる歌も、キュンってする歌もどれもるるんっ♪てなったもん!

ライブが終わったらユウくんから連絡が来てて、待っててほしいって言われちゃった。お姉ちゃんも同じだったみたいで、二人でライブのことを話しながらユウくんを待っていた。



「ライブ凄かったよね！もうズガガガンって感じ！」  
「どんな感じよ…。でも、凄かったのは間違いないわね。雄弥くんができることは最低限のことのはずなのに、周りは気を使わずに自分の最大限を出していたのに、あれだけのライブになるなんて」  
「ユウくんだからだよ！」  
「ふふっ、それもそうね」

お姉ちゃんとライブの感想を言うのもそうだけど、こうやって話せるの自体久しぶり。今日はもうるんるん♪しまくりだよ〜！

「ごめん、待たせた」  
「あ！ユウくん！」  
「…だから急に飛びつくくなって」  
「ユウくんの匂い〜♪」  
「聞いてないし…」  
「お疲れ様、雄弥くん。それとそんなに待ってないわ」  
「ありがとう紗夜」  
「結花は一緒じゃないの？」  
「結花には準備してもらってる」  
「準備？」  
「るんっ♪てするやつだね！」

ユウくんが結花ちゃんに頼んで何かを準備してもらうってことは、間違いない私たちをるんっ♪てさせてくれる。私たちは、ユウくんにある場所に連れて行ってもらった。そこには結花ちゃんがある物を用意して待っていてくれた。

「ユウくん…」  
「これって…」

「2年前にできなかったことだな。けど、今ならできる。やろうぜ？」

天体観測をさ」

「ユウくん！」

「だからいきなり……、もういいや」

「ほんとに……ほんとにありがとう!!」

「日菜……喜んでくれて嬉しんっ!!」

「ちよつと日菜!?!」

「あはは!日菜ってば大胆だね〜!紗夜もいつとく?」

「なっ……!わ、私はそんなこと……!」

場所も2年前と同じで、ユウちゃんと付き合えることになったこの場所。本当にやり直してことなんだね。そういうところも好き!!

—4人で、またあの頃と同じように。

「雄弥って今二股なわけじゃん?」

「いきなり雰囲気壊してきたな」

「紗夜と日菜的にはどうなの?」

「私は雄弥くんといれるならそれで。…それに……その日菜も一緒にいれるわけだし」

「おねえちゃん……。だあい好き!!」

「だつてさ?紗夜は?」

「うっ……その……私も……同じよ」

「直接言ってくれないの?」

「……好きよ」

ああーもう……るんるんっ♪てし過ぎてぼわわーんってなるよ。ユウくんは結花ちゃんに絡まれたくないのか、望遠鏡を覗き込んで星を見てる。あたしはユウくんの後ろから抱きついて、肩に顎を乗せた。そうしたらユウくんも星じゃなくてあたしを見てくれる。

「日菜?」

「ねえ、ユウくんはもう一個の約束を守ってくれる?ハチャメチャな

約束だけど」

「当たり前だろ？約束だからってだけじゃない。俺が二人のことを好きだから」

「うん♪」

「その約束ってなあにー？」

「私も知らないことよね？」

「えへへ♪ユウくとねく、ちっちゃい時にした約束なんだく。あたしとおねえちゃん、どっちもユウくんのお嫁さんにしてもらって約束だよー！」

「わーお…、本気？」

「まあな。紗夜も日菜も愛してるから。…まあ最低な選択だけどな」

「そんなのいいのよ…。周りになんて言われようと、あなたと一緒にいら」

「あたしもそうだよ♪」

「はあ、ならそれでいいや。姉として許しちやいます☆」

「ありがとう結花」

「ユウくん（雄弥くん）」

「ん？」

あたしとお姉ちゃんはユウくんの両頬にそれぞれキスした。

「これからよろしくね♪」

「雄弥くんとならどんな未来も歩んでいけるから」

「…ああ！こちらこそ！」

——あたし達は一度バラバラになった。理不尽なことがあって、あたしが勝手に決めつけて…。

——でも、また一緒になれた。雄弥くと結花はまたステージに立てるようになった。

——あたし（私）達は、もう一度輝ける。